company trip

55th anniversary

創立55周年記念
社員旅行

in Europe

総合建設コンサルタント
株式会社 第一コンサルタンツ
DAI-ICHI Consultants Co. Ltd.

写真１　大鐘楼から見たヴェネツィアの町並み

写真２　サン・マルコ広場

写真３　ドゥカーレ宮殿

写真４　ゴンドラ遊覧

写真５　高速鉄道イタロ

写真６　ドゥオモから見たフィレンツェの街並み

写真７　ウフィツィ美術館（ヴィーナスの誕生）

写真８　アカデミア美術館

写真 9　コロッセオ

写真 10　コンスタンティヌスの凱旋門

写真 11　真実の口

写真 12　サン・ピエトロ大聖堂

写真 13　スペイン広場

写真 14　トレヴィの泉

写真 15　最後にジェラートをおいしく頂きました

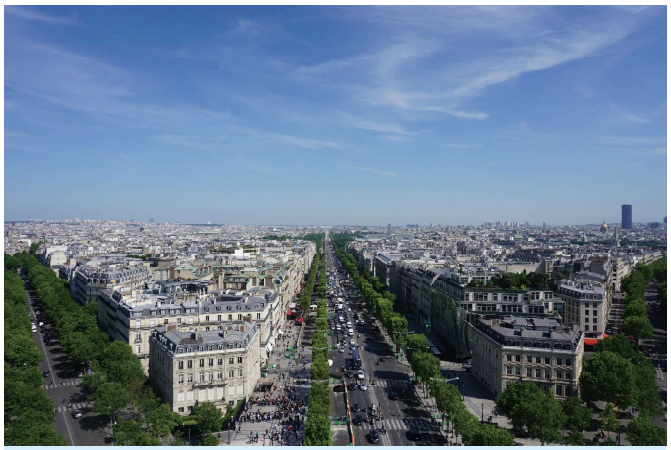


写真 16　パリの街並み

写真 17　シャルトル　ノートルダム大聖堂

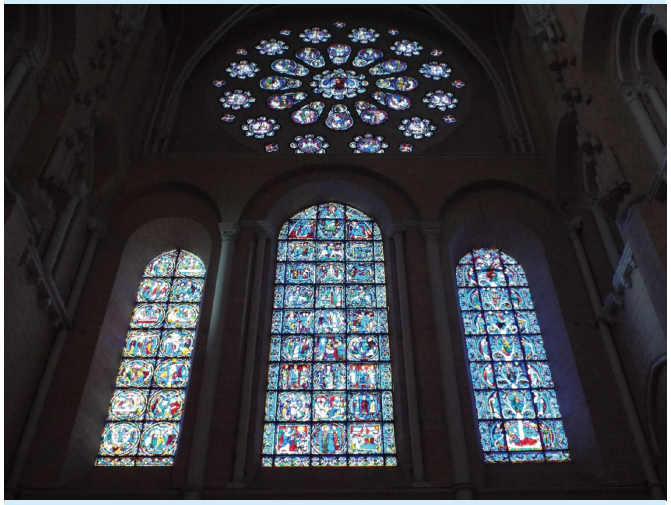


写真 18　シャルトルブルーのステンドグラス

写真 19　モン・サン・ミッシェル

写真 20　モン・サン・ミッシェルのオムレツ

写真 21　クロード・モネの庭

写真 22　ムーラン・ルージュ

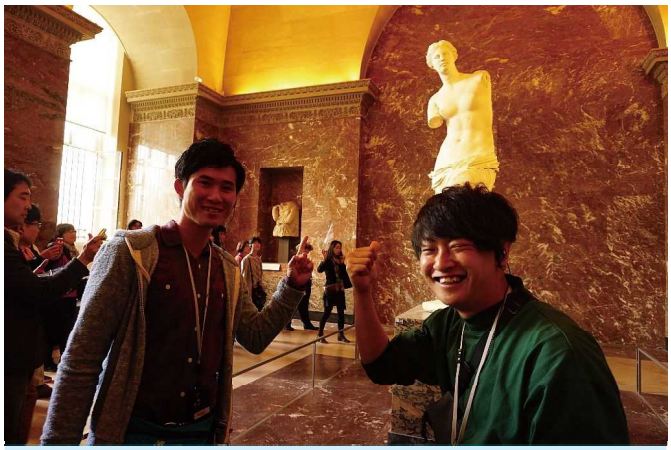


写真 23　ルーヴル美術館（ミロのヴィーナス）

写真 24　モンマルトル　サクレクール寺院

写真 25　ヴェルサイユ宮殿

写真 26　エスカルゴ料理を堪能

写真 27　エトワール凱旋門

写真 28　エッフェル塔

写真 29　セーヌ川クルーズ

写真 30　ドイツ連邦議会議事堂

写真 31　ブランデンブルグ門

写真 32　グリーニッケ橋

写真 33　サンスーシ宮殿

写真 34　ツェツィーリエンホーフ宮殿

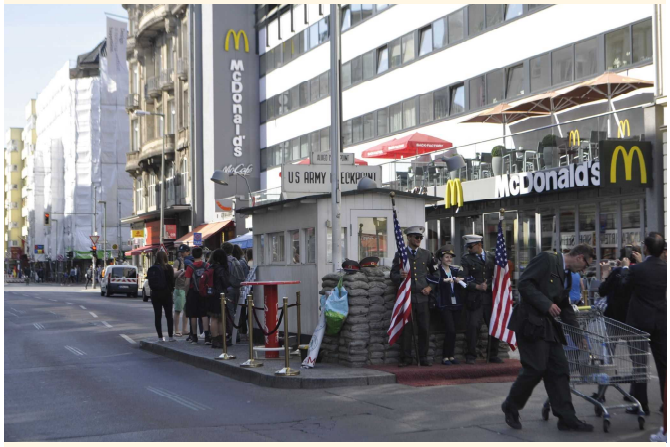


写真 35　チェックポイント・チャーリー

写真 36　ベルリンの壁

写真 37　ベルリン大聖堂

写真 38　ペルガモン博物館

写真 39　1L ビールで乾杯

写真 40　ヴィース教会

写真 41　ノイシュバンシュタイン城

写真 42　BMW 博物館

写真 43　ミュンヘン新庁舎（マリエン広場）

写真 44　アリアンツ・アレーナ

写真 45　レジデンツ（ベルデスバッハ王家の宮殿）

序　文

わが社は昭和38年11月29日に創業しました。今年で55周年を迎えます。ひとえに、国土交通省や高知県をはじめとする四国内の官公庁、そして何よりも日々献身的に働いてくれている社員とそれを支えてくれているご家族のお陰であり、心より感謝申し上げます。

私は数年前から社員に、「55周年には全員でヨーロッパへ行こう」と夢を語り、高い経営目標を掲げてきました。社員はこれによく応え、努力を惜しむことなく懸命に働き、業績を順調に伸ばしてきました。そして平成29年度には念願であった受注20億円の壁を突破することができました。

行きたい旅行先を社員に尋ねたところ、ほぼ同数でイタリア、フランス、ドイツがあがってきました。これまでは、全員が同じ場所へ行くことが暗黙の約束になっていましたが、今回は社員の希望に沿うようにイタリア班、フランス班、ドイツ班に分かれて行くことにしました。

旅行の行程を決めるに当たって、私から次の4つの条件を提示しましたが、それ以外は親睦会と旅行会社にすべて任せました。

①あまりハードな行程にしないこと。できれば連泊が望ましい。

②観光地、中心街に近い便利な場所にあるホテルを選ぶこと。特にヴェネツィアはヴェネツィア本島に泊まること。

③羽田空港を利用するなど効率的に移動できるルートを選ぶこと。

④イタリア内の移動には高速鉄道を利用すること。

本書は、社員が執筆したヨーロッパ旅行記を綴ったものです。わが社では、平成25年の社員旅行から参加者全員に旅行記を執筆してもらっています。旅行記は社員の成長、そして会社の成長の証でもあります。

わが社は建設コンサルタンツという仕事を通じて、社員の技術力だけでなく人間力を高めることで、「地域から愛され、必要とされる人づくり」を目指しています。社員旅行はその一環です。社員が同じ釜の飯を食べ、お互いが助け合いながら見聞を広めることで、社員が絆を強め、視野を広げることを願っています。

5年後には創立60周年を迎えます。社員全員で再びヨーロッパに行くことを目標にして、さらなる社業の発展に努めて参る所存であります。

代表取締役社長　右城　猛

目　　次

口絵（イタリア、フランス、ドイツ ）

序　文

目　次

第１章　ヨーロッパ旅行の概要 1

第２章　イタリア 7

第３章　フランス 45

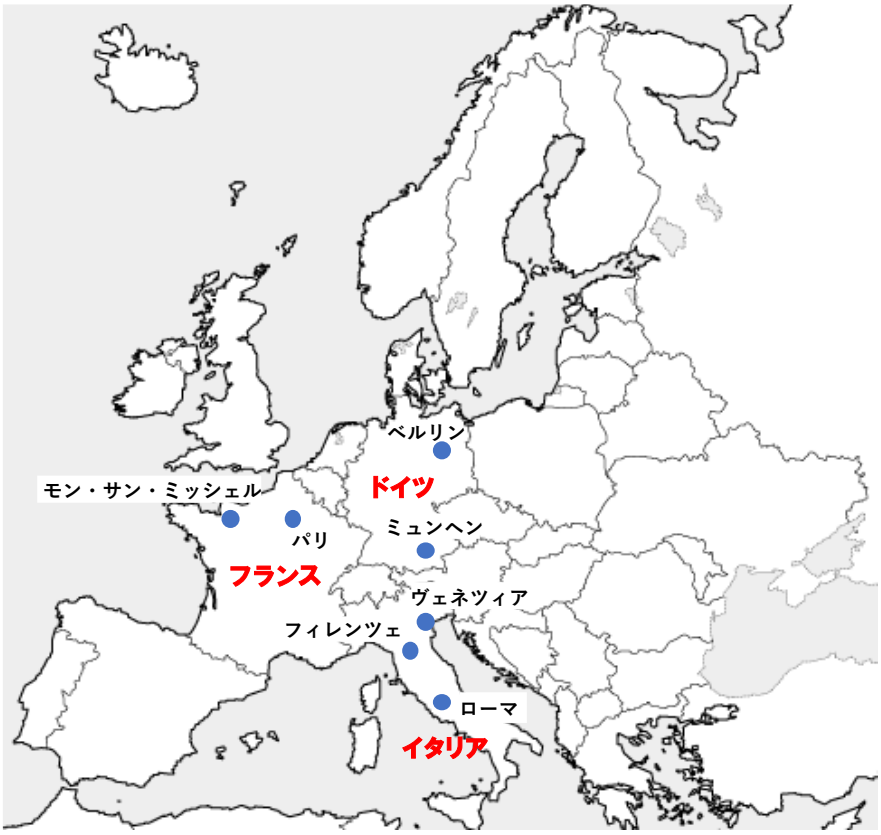
第４章　ドイツ 69

第５章　社員旅行の思い出 94

ヨーロッパ旅行の概要

3 班の概略

行き先	月日	参加者	訪問地
イタリア班	5 月 7 日(月)～12 日(土)	社員 30 名、家族 6 名、添乗員 2 名	ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ
フランス班	5 月 14 日(月)～19 日(土)	社員 27 名、家族 2 名、添乗員 2 名	パリ、フランス西海岸、パリ郊外
ドイツ班	5 月 21 日(月)～26 日(土)	社員 31 名、家族 1 名、添乗員 2 名	ベルリン、ポツダム、ミュンヘン



創立 55 周年記念社員旅行訪問先

イタリア班の日程

5 月 7 日 (月) 晴れ	羽田からヴェネツィアへ	高知 10:15→羽田 11:35(ANA564) 松山 9:45→羽田 11:10(ANA584) 羽田 14:05→フランクフルト 18:45(LH717)　所要時間 11:40 時差 7 時間 フランクフルト 21:45→ヴェネツィア・テッセラ空港 23:00(L332) ヴェネツィア泊
5 月 8 日 (火) 晴れ	ヴェネツィア観光	サン・マルコ広場、サン・マルコ寺院、ドゥカーレ宮殿 ゴンドラ遊覧 ヴェネツィア泊
5 月 9 日 (水) 曇り	フィレンツェ観光	ミケランジェロ広場 サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂 ウフィツィ美術館 フィレンツェ泊

5 月 10 日 (木) 晴れ	ローマ観光	コロッセオ、真実の口が展示してあるコスメディアン教会 ヴァチカン市国 サン・ピエトロ広場、システィーナ礼拝堂 ローマ泊
5 月 11 日 (金) 晴れ	ローマ観光 日本へ	スペイン広場、トレヴィの泉 ローマ 12:10→ミュンヘン 13:40(LH1843) ミュンヘン 16:15(LH714)→
5 月 12 日 (土)	日本	→羽田 10:50 羽田 13:30→高知 14:55(ANA565) 羽田 12:15→高知 13:45(ANA589)

フランス班の日程

5 月 14 日 (月) 晴れ	羽田からパリへ	高知 7:15→羽田 8:30(JAL490) 羽田 10:40→パリシャルル・ド・ゴール空港 16:15(JAL045)　所要時間 12:35 時差 7 時間 パリ泊
5 月 15 日 (火) 晴れ	モン・サン・ミッシェルへ	シャルトル・ノートルダム大聖堂 モン・サン・ミッシェル モン・サン・ミッシェル泊
5 月 16 日 (水) 晴れ	パリ郊外とパリ	クロード・モネの庭 ムーラン・ルージュ パリ泊
5 月 17 日 (木) 雨、曇り	パリ	自由行動 ルーヴル美術館 シャンゼリゼ通り、エトワール凱旋門、エッフェル塔 パリ泊
5 月 18 日 (金)	パリ観光 日本へ	ヴェルサイユ宮殿 パリ市内で昼食 セーヌ川クルーズ パリシャルル・ド・ゴール空港 20:30(JAL046)→
5 月 19 日 (土)	日本	→羽田 15:25 羽田 16:55→高知 18:15(JAL497)

ドイツ班の日程

5 月 21 日 (月) 晴れ	羽田からベルリンへ	高知 10:15→羽田 11:35(ANA564) 松山 9:45→羽田 11:10(ANA584) 徳島 10:50→羽田 12:05(ANA282) 羽田 14:05→フランクフルト 18:45(LH717)　所要時間 11:40 時差 7 時間 フランクフルト 20:15→ベルリン 21:25(LH044) ベルリン泊
5 月 22 日 (火) 晴れ	ベルリン観光 ポツダム観光	ドイツ連邦議会議事堂、ブランデンブルク門 ベルリンオリンピック(1936)のメインスタジアム「ベルリン・オリンピアシュタディオン」 ベルリン郊外のアウス自動車専用道路(1913～1921)(最初のアウトバーン) グリーニッケ橋 ポツダム旧市街のショッピング街ブランデンブルク通りのレストラン Ballhause で昼食 サンスーシ宮殿(世界遺産) ポツダム会談の舞台　ツェツィーリエンホーフ宮殿(世界遺産) 自由行動　(ベルリン高級デパート KaDeWe) レストラン・マキシミリアンス(バイエルン料理) ベルリン泊

5 月 23 日 (水) 晴れ ミュンヘンは曇り	ベルリン市内観光 ミュンヘンへ移動	ポツダム広場　SONY センター チェックポイント・チャーリー、ベルリンの壁イーストサイド・ギャラリー ベルリン大聖堂、ペルガモン博物館 レストラン「Neumann`s」で昼食 ベルリン　テーゲル空港 16:00→ミュンヘン 17:10 (LH2041) ホーフブロイハウス(Hofbräuhaus München)で食事 ミュンヘン泊
5 月 24 日 (木) 雨、曇り	シュタインガーデン、シュヴァンガウ ミュンヘン市内	シュタインガーデンのヴィース教会(世界遺産)へ シンデレラ城のモデル「ノイシュバンシュタイン城」 昼食 BMW 博物館、BMW ヴェルト(ショールーム) マリエン広場、ミュンヘン新市庁舎 ミュンヘン新市庁舎の地下レストラン「ラーツケラーRatskeller」で食事 ミュンヘン泊
5 月 25 日 (金) 晴れ	ミュンヘン 日本へ	FC バイエルン・ミュンヘンのホームスタジアム「アリアンツ・アレーナ」 ヴェルテルスバッハ王家の宮殿「レジデンツ」 空港で昼食 ミュンヘン 16:15(LH714)→
5 月 26 日 (土)	日本	→羽田 10:50 羽田 12:15→松山 13:45(ANA589) 羽田 13:30→高知 14:55(ANA565) 羽田 13:35→徳島 14:50(ANA283)

イタリア班

青木正典(青木)、弘田伸(弘田、弘田)、楠本雅博(楠本、楠本)、高橋祐也、渡部清隆(渡部)、工藤頌子、村岡志郎、島村圭太、小島心平、生田万祐子、岡　潔、須内寿男、安地勝江、大和田菊代、小笠原明弘、細川公二、齋藤啓太、小松由和、十河智麻、澤田亜由美、尾崎勝彦、長崎悟史、伊藤哲也、西村研了、山本崇顕、有澤尚可、田中聖一、柴田昭英、那須太郎、那須滉樹

JTB 添乗員　瀧本文雄、竹内季

【ビデオ係】島村圭太、長崎悟史、伊藤哲也、山本崇顕、那須太郎

フィレンツェのミケランジェロ広場(2018 年 5 月 9 日)

ローマのコロッセオ(2018 年 5 月 10 日)

フランス班

西川徹、濱田拓也、小野昭彦(小野)、山本幸栄、明神怜佳、森下昌裕、北澤聖司、高橋昌也、横山成郎、芝田和仁、北村暢章、有澤芳則、土居徹平、矢田康久、西村紘寛(西村)、吉田直起、島内司、田村隆幸、中越紀子、小島由佳、西岡徹、西森尚人、谷加奈、窪添智津子、小野裕正、畑中徳雄、吉門祐弥

JTB 添乗員　瀧本文雄、安達晃子

【ビデオ係】北村暢章、西村紘寛、吉門祐弥

モン・サン・ミッシェル(2018 年 5 月 15 日)

ヴェルサイユ宮殿(2018 年 5 月 18 日)

ドイツ班

右城猛(右城絹枝)、矢田部龍一、松本洋一、山本裕子、小松俊則、山本剛也、佐藤香奈子、片岡寛志、冨永敏絵、堀田朋男、公文海斗、兵頭学、矢野川稔、片山直道、乾隼輔、又川嵩哉、中平隆文、阿部一輝、千葉辰政、徳橋蓮、三浦貢一、児玉翔、山中公貴、岩瀬誠司、池愛夫、森本雅陽、井上敬士、木村卓、宮崎卓巳、杉本梨菜、坪田沙希

JTB 添乗員　眞田直也、安達晃子

【ビデオ係】山本剛也、冨永敏絵、兵頭学

ベルリンのブランデンブルク門(2018 年 5 月 22 日)

ミュンヘンのアリアンツ・アレーナ(2018 年 5 月 25 日)

2018 年 5 月 7 日(月)～12 日(土)

イタリア

世界遺産イタリア

調査部　取締役部長
弘田　伸　(1987 年入社)

1. はじめに

初めての欧州の旅。その中でもイタリアは第一希望。今回は家族の強い希望もあり、出費も嵩むが妻と娘も同行することにした。

2. ヴェネツィア

朝 8 時前ホテルを出発し水上バスに乗船。世界で最も美しい広場と言われている「サン・マルコ広場」に到着(口絵写真 2)。まず、街のシンボル、高さ 98mの大鐘楼にエレベータで昇りヴェネツィアの景色を望む。想像以上の絶景だ(口絵写真 1)。

続いて「サン・マルコ寺院」・総監の館「ドゥカーレ宮殿」を観覧(口絵写真 3)。その後、6 人ずつに分かれボーダーシャツ姿のイケメンが手漕ぎするゴンドラ(口絵写真 4)に乗り、当社用に用意していただいたゴンドリエーレの生歌を聴きながら運河をクルーズ。「これぞヴェネツィア観光」。昼食後は夕食まで自由行動となる。

ヴェネツィアは水の都と言われるとおり大小の運河が張り巡らされている。島内は車の乗入れが禁止されており、交通手段は徒歩または水上バス等である。建物は古く、町並みで特徴的なレンガ色の屋根は想像していたとおり綺麗だ。また、標高が低く、11 月～3 月の時期には水位が上がり、サン・マルコ広場や寺院まで海水が入り込んでくることもあるようだ。

私たち家族は、スーパーで土産物を買い込み水上バスで一度ホテルに戻り、夕食までヴェネツィアの街を散策した。

記念に 80 ユーロでヴェネツィアングラスのセットを購入

3. フィレンツェ

3 日目はホテルから歩いて直ぐのサンタ・ルチア駅から 2 時間かけフィレンツェへ。フェラーリカラーの列車を想像していたが、くすんだ色でがっかり(口絵写真 5)。

到着後、バスで世界一の眺望と言われ、フィレンツェの町を一望できる「ミケランジェロ広場」へ。広場の中心にはダヴィデ像のコピーが置かれている。ここでは小雨で少し霧がかかっており世界一とはほど遠い。イタリアの名車フェラーリの試乗が行われていたが、時間がなくて残念。

続いて、ミケランジェロ作で世界的に有名な「ダヴィデ像」が展示してある「アカデミア美術館」へ。入場待ちしていると三つ編み女性のジプシーが物乞いに近づいてくる。観光客もわかっており無視すると立ち去る。これもイタリア観光のならでは。美術館に入ると正面奥に「ダヴィデ像」細部まで彫刻してある筋肉隆々の石像は一見の価値あり。

午後からは「サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂」へ。外壁の彫刻や装飾は言葉を失うほどの美しさ。建物自体が芸術作品だ。

これからが大変。ドゥオモ・クーポラの見晴台を目指し 464 段の階段を上る。汗だくになりながら一人の脱落者もなく登り切る。天気も回復しミケランジェロ広場とは違った町並みが望める(口絵写真 6)。

次に「ウフィツィ美術館」を観覧。この美術館はレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなど三大巨匠の作品が展示されている(口絵写真 7)。美術館などは正直興味なかったが、世界的絵画には圧倒されるばかりだ。

世界一の眺望もあいにくの天気でがっかり

アカデミア美術館　正面に有名な「ダヴィデ像」

サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂

見晴台での家族写真

4. ローマ

フィレンツェ駅から列車で 1 時間半かけローマへ。

まず、円形闘技場「コロッセオ」に行く。ここは誰もが一度は写真などで目にしたことのある建造物で、ぜひ見てみたい観光地の一つだ。

到着するとすでに大勢の観光客で入場待ちの行列ができている。

コロッセオは西暦 80 年に完成した約 5 万人を収容する巨大娯楽闘技場で、剣闘士同士の戦いのほか、剣闘士と猛獣の命がけの戦いが行われていた。戦いの舞台は木造だったため、現在は朽ち果て、地下がむき出しになっている。隣にはナポレオンが気に入りフランスのモデルとなった凱旋門がある。

ローマ大帝国の栄光が感じられる場所である。

続いて映画オードリー・ヘプバーン主演の「ローマの休日」で有名な「真実の口」が展示してある「コスメディン教会」へ。こんなところに「真実の口が」である。勉強不足だが建物の中に展示してあるとは予想してなかった。もともとはマンホールの蓋だったようだ。この口に偽り物が手を入れると抜けなくなるという伝説がある。

全員が順番に口に手を入れる(口絵写真 11)。当社に偽り物はいなかったようだ。

昼食はローマが発祥の地「カルボナーラ」、味は旅行の中でも美味しい方だった。

コロッセオと凱旋門

こんな意外な場所に真実の口が・・・

5. ヴァチカン市国

昼食後徒歩でヴァチカン市国へ。

ヴァチカン市国はサン・ピエトロ広場を除き古い城壁

に囲まれている。カトリック教会の総本山サン・ピエトロ大聖堂を中心に面積 0.44km2 の世界最小の独立国であり、国全体が世界遺産に登録されている。

まず、「ヴァチカン美術館」に入館。ロビーで荷物と服装のＸ線検査を受ける。ヴァチカン美術館は歴代のローマ教皇が収集品を展示する世界最大級の美術館で美術館・博物館・ギャラリーなどで構成されている。

地図のギャラリーには 120mの壁面にイタリア各地の地図が展示してある。16 世紀からこんな正確な地図が描かれていたかと思うと西洋文化には驚かされる。

最後に「システィーナ礼拝堂」を拝観。壁面に描かれている「最後の審判」はミケランジェロの絵画の頂点と言われており圧巻である。残念ながら撮影禁止となっている。

続いて「サン・ピエトロ大聖堂」を拝観(口絵写真 12)。その規模と美術品や装飾には圧倒されるばかりだ。

塀の向こう側がヴァチカン市国

長さ 200m 余りある圧巻のサン・ピエトロ大聖堂礼拝堂

6. ローマ→高知

最終日は、「スペイン広場」、「トレヴィの泉」を見学し空港に向かう。

スペイン広場の中央には「バルカッチャの噴水」、広場の東側には 135 段の階段があり、その上には「トリニタ・ディ・モンティ教会」がある(口絵写真 13)。この周辺は有名なブランド店が集まるショッピングエリアとなっており、私たちは早朝の開店前に行ったが、日中は大勢の観光客で賑わっている。

続いてトレヴィの泉を見学(口絵写真 14)。言い伝えに習い、「再びローマに来ることができる」よう一枚のコインを後ろ向きに投げる。叶うことができるか？

12 時 10 分発ローマ空港からドイツのミュンヘンで乗り継ぎ羽田空港を経由し 14 時 55 分高知龍馬空港に無地到着。

7. おわりに

まずは、参加者の協力、JTB の添乗員のおかげで誰ひとりスリやトラブルに遭うことなく無事帰路につけたことが何よりであった。

今回のイタリア旅行 6 日間で歩いた距離の合計をスマホで確認すると 42.5km。フルマラソンに相当する距離で大変ハードな旅となった。しかし、イタリアは見所が沢山あり、せっかく来たのならこれくらいは当然か。行った所々でそれぞれの歴史を感じ家族を同行させた価値は多いにあった。

建造物に関しては日本の木造に対しイタリアは石造。歴史ある建物を修復しながら今日に至っている。そのスケールの大きさと彫刻などの美しさには言葉を失うばかりだ。

ローマでは古い水道橋なども残っており、インフラ整備も盛んに行われていた。土木技術の先駆者として「すべての道はローマに通ず」と言われたゆえんが垣間見えた。

道路は石畳が多く歩きづらく疲れる。交差点は信号がなくロータリー式がほとんど。複雑だが街並みとマッチしており渋滞は少なく感じた。

美術館や寺院は、教科書や映像で見た世界を目の当たりにし、本物を見ることの大切さを感じさせられた。世界中から観光客が集まるのも納得だ。

食に関してはパスタ、ピザやステーキなどを食したが、味付けが全体的に薄味で塩が欠かせない。前菜のサラダは日本のようなドレッシングはなく、オリーブオイルとバルサミコ酢。正直、日本の方が美味しいと感じた。

旅行で残念に思ったのが、世界的観光地なのにゴミやたばこの吸い殻があちこちに落ちている。掃除している姿も見かけない。国民性の違いなのか。また、街中の壁は至る所ペイントでの落書きだらけ。これも芸術なのか。

今回のイタリア旅行でモチベーションを上げ 55 周年の弾みとしたい。

アーチ構造を見て

技術開発部　部長
楠本　雅博　(2003 年入社)

8. はじめに

本レポートでは、古代ローマ時代から採用され、美しさと堅固さを兼ね備えたアーチ構造について記載する。

9. ヴェネツィアのアーチ

ヴェネツィアは言わずと知れた「水の都」である。街の随所に小規模なアーチ橋が見られる。船上からの橋梁点検に出発！

(1) サン・マルコ広場近くの橋

観光用のゴンドラ乗り場に近く、ゴンドラの往来も多い。アーチの下面は大理石で化粧貼りされ美しい。筆者としては、アーチ部材が直接見えないのが残念である。

(2) 高欄が美しい橋

高欄の化粧飾りが美しい橋だが、側面から見るとアーチライズ(アーチの幅に対する高さの比率)が小さい。

アーチライズを大きくすると、支点部の水平力が小さくなり合理的である。しかし水路幅が広い場合にアーチライズを高くすると、アプローチ部を長くするか、階段や急勾配の路面となる。橋上の歩行者に配慮してアーチライズを小さくしたと考えられる。

下面に化粧板はなく、両端が大理石、中央部はレンガで構築されている。アーチクラウン下面のレンガ間に隙間が見える。直下を通るゴンドラへのレンガの落下、アーチ構造の不安定化が懸念される。

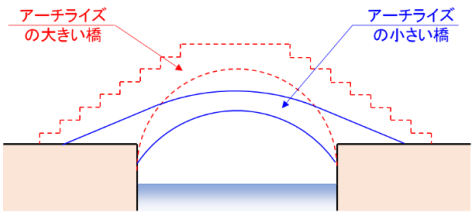


図-1　アーチライズの大小

写真-1　サン・マルコ広場近くの橋(側面)

写真-2　サン・マルコ広場近くの橋(下面)

写真-3　高欄が美しい橋(側面)

写真-4　高欄が美しい橋(下面)

(3) 端部が拡幅された橋

片側端部が拡がったバチ構造を有する橋。

桁下を見ると、当初のレンガの上にモルタルが塗られ、さらに鋼材が配置されている。

水路は海水である。ゴンドラが通過するため、桁下高を確保する必要がある。やむを得ず腐食の懸念がある鋼材を使用したと推察される。鋼材は細く、またアーチとの間に隙間がある。アーチの補強としての効果には疑問がある。モルタルとの併用により、レンガの剥落防止が主目的と考えられる。

(4) 小さなアーチ橋

白い大理石と、オレンジ色の漆喰のコントラストが可愛いアーチ橋である。

下面を見ると、アーチを構築した後、表面にモルタルが塗られたと推察される。その後オレンジ色の漆喰が塗られ、さらに幅員方向に鋼材が配置されてた。鋼材は側面の大きな大理石の変位を拘束していると考えられるが、本来の目的はよくわからない。

(5) リアルト橋

ヴェネツィアのほぼ中央にあり、橋上にアーケードがあることで有名。最も大きな運河カナル・グランデを跨ぐ支間長 28.8m、幅員 22.9m の橋である。

全面が大理石貼りである。詳細構造はわからない。石橋としては 1591 年に架設されたとの記載がある。架設後 427 年である。石橋の前は木橋であったとの事。木橋の架設は 1245 年、日本では鎌倉時代である。

日本で最も有名な石造りの上路式のアーチ橋は、1634 年に架設された長崎の眼鏡橋である。架設後 384 年の橋である。

供用期間を 50 年だ、100 年だという維持管理の考え方を考えさせられる年数である。

橋の構造として歴史が古いのは丸木橋や石造りの桁橋である。しかし、アーチ橋に限れば、石造りかレンガ造りが古く、しかも美しい。私が一番好きな橋梁形式である。

写真-5　端部が拡幅された橋(側面)

写真-6　端部が拡幅された橋(下面)

写真-7　小さなアーチ橋(側面)

写真-8　小さなアーチ橋(下面)

(6) デラ橋

現代のイタリア人がアーチ橋を設計するとこうなる、と思わされるデラ橋。

魚の骨をイメージさせる主構を有する。橋面の一部と高欄はガラス製である。有名なヴェネツィア・ガラスが使用されているかどうかはわからない。

主構や高欄は緩やかな曲線を描いている。デザインは細部から全景まで行き届いており、優雅な姿はタメ息が出るほど美しい。

写真-9　リアルト橋

写真-10　デラ橋(側面)

写真-11　デラ橋(橋面)

10. フィレンツェのアーチ

フィレンツェは、建物の屋根や間口を構成するアーチ構造が美しい街である。

写真-12、13 は、最も有名なドゥオモ(大聖堂)のドーム屋根である。ドーム屋根にもアーチ構造の技術が使われている。

写真-14 は、シニョーリア広場の中心にあるヴェッキオ宮中庭の柱列である。間口上部の梁としてアーチ構造が使用されている。

写真-12　ドゥオモ(大聖堂)のアーチ屋根

写真-13　アーチ屋根の内面

写真-14　ヴェッキオ宮内部

11. ローマのアーチ

ローマで見られるアーチ構造は、歴史が古く、優雅さよりも重厚さを感じる。

写真-15 は、コロッセオに向かう途中の道路にある水道橋の遺跡である。残念ながら車道上は撤去されている。歩道上には門型アーチが残っている。

写真-16 は、コロッセオの近くにあるフォロ・ロマーノ遺跡である。半割りのドーム屋根が見える。崩壊を防止するため、PC 鋼材と鋼製アンカーで補強されている。変位計も設置されている。

写真-17 は、コロッセオの外壁、三層のラーメン構造である。よく似た構造として水道橋として有名なポンデュガール橋がある。両者は紀元前後に建設されている。古代ローマ時代を代表するアーチ構造である。

12. おわりに

大規模な土木・建築物は公共事業として行われることが多く、予算的な制約が大きい。これに対して独裁者あるいは宗教的な力が強かった時代は、その権威を象徴する大規模な構造やデザインが重視されたのだろう。アーチ構造は、時代の要求にマッチして進化・拡大したのではないかと思った。

またヴェネツィアのデラ橋を見て、アーチ構造の進化に伴い培われた「構造とデザインの融合」という考え方

は、今でもイタリアに根付いていると感じた。

日本にもアーチ構造を有する土木・建築物は数多くある。先人達の知恵と努力に敬意を持って、ゆっくり見てみたいと思った。

写真-15　街中にある水道橋の遺跡

写真-16　古代ローマ時代のフォロ・ロマーノ

写真-17　有名なコロッセオの外壁

美しい景色・美術品に感動

常務取締役
青木　正典　(1983 年入社)

1. はじめに

今回の 55 周年記念ヨーロッパ旅行は、5 年前から右城社長が目標に掲げていた記念行事である。

これを実現できたのは社員全員の頑張りによるものだと思う。

弊社は、海外旅行には家族同伴を推奨していたが、まわりが気を遣うのではないかと思い、今まで一度も家族に声をかけたことがなかった。

しかし、今回はなかなか行けないヨーロッパであることと、結婚 30 周年なので一緒に行くことにした。

創立 55 周年と結婚 30 周年の二つの記念旅行になった。

2. 観光

二日目は、水の都ヴェネツィアでサン・マルコ広場、サン・マルコ寺院、大鐘楼 96m、ドゥカーレ宮、ゴンドラ(クルーズ)を観光。

ホテル近くの停留所から水上バス・ブアポレットでサン・マルコ広場に移動した。

水上バスで移動中初めて見る景色に感動する社員

初めて見る風景には感動ばかりで全員がカメラから手を離せなかった。

サン・マルコ広場

最初に訪れた美術館はドゥカーレ宮の内部にある美術館。

ドゥカーレ宮はもともとヴェネツィア共和国の総督邸兼政庁であった建物を 14 世紀から 16 世紀にかけて現在の形に改修されヴェネツィア市民美術館財団が運営している。

徳島県鳴門市にある大塚国際美術館で陶板に再現された絵画に驚かされたことがあるが、本物はそれ以上に感動した。

ドゥカーレ宮内装の絵画

ドゥカーレ宮絵画の前で家内と記念撮影

ヴェネツィアでは、ゴンドラでのカナル・グランデクルーズが帰国してからも目に焼き付いている。

ゴンドラへの乗船を待っている間、我々の乗っている船が転覆し、それがニュースで流れている光景が頭をよぎった。

大運河に漕ぎ出すには、ゴンドラがあまりにも小さすぎる。

恐るおそるゴンドラに乗り混んだ。

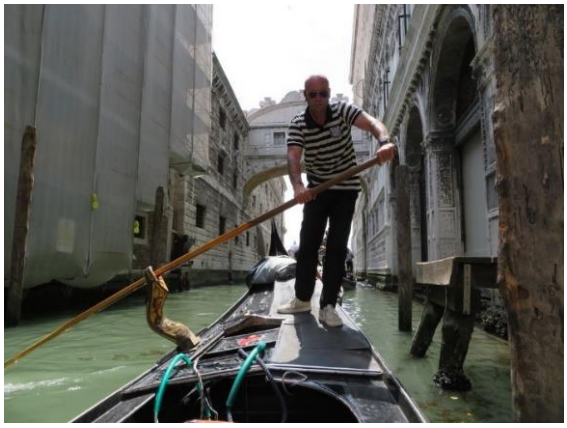
しかし乗ってみればもうそんな心配は吹っ飛んだ、運河の水面が座っている高さと同じように感じた。

5、6 隻に分かれて乗船した全員が大運河のクルージングに興奮しているように思えた。

ゴンドラでのクルージング

クルージングは、大運河だけでなく街並みに流れる小運河にも入っていった。

小運河のクルージングは迫力ある大運河とは全くの別物で、情緒溢れる街並み、貫禄のレンガ作りの建物、運河に跨がる橋、箸の上のたくさんの観光客、一緒に乗船したスタッフの生ギターと生歌が建物と建物の間で響き渡るなんともいえない心地良さに魅了された。



小運河に入っていったゴンドラ

小運河のクルージング・橋の上には沢山の観光客

三日目は、ヴェネツィアから真紅フェラーリ特急の列車「イタロ」でフィレンツェに移動した。

フェラーリ車や F1 カーのように鮮やかと思いきや、始発なのに少し汚れた姿で現れた。

少しがっかりしたが一応記念写真は撮った。

フェラーリ特急真紅の列車「イタロ」

添乗員の話では、こちらの交通機関は時間にルーズで、10 分 20 分の遅れは日常的で問題にならないらしい。

イタリア人はおおらかなのだろうか。

情熱的で気質の荒い性格と思っていたのだが。

観光は、世界一の眺望ミケランジェロ広場、サンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂ドゥオモ・クーポラ、アカデミア美術館、ウフィツィ美術館。

三日目の観光で一番印象に残ったのはやはりドゥオモの屋上から見たフィレンツェの街並み。

この絶景を見るためには、464 段の階段を上る必要があった。

昼食時に JTB の滝本さんから「お酒は少し控えておいて下さい」と忠告があった。

日頃趣味でゴルフをやっており体力には自信が有ったが、いざ登り始めると、これがなかなか大変で途中で何度も休憩を余儀なくさせられた。

最後に到着した疲れ果てた二人

先に登り始めた家内と女性社員を心配しながらやっとの思いで上がると、そこには心地よい風とフィレンツェの街並みの絶景がひろがっていた(口絵写真 6)。

四日目は、永遠の都ローマ観光、コロセオ、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会、サン・ピエトロ大聖堂、ヴァチカン美術館を観光。

コロッセオはメディアでよく見る。

実際にどれくらいの迫力があるのか楽しみにしていた。

テレビで見るのは崩れかけた外観だけである。

中の格闘が行われた広場が見えるのかと思いきや、一階部分のアリーナはほとんどなく、少し再現した部分があるだけで地下の部分がむき出しになっていた。

コロッセオの一階部分のアリーナ

現地ガイドに聞くと、運営に国は関与しておらず、公表されている集客数や収益の数字は微妙らしい。

ヴァチカン美術館の入り口のエレベータはとても近代的あったが、中に入ると歴史を感じさせる作りであった。

現地ガイドの説明を聞きながら、「最後の晩餐」などの作品を見ているうちに、あたかもその作品か描かれた時代に生きているような気分になった。

私はキリスト教徒ではないが、キリストについてもっと調べてみたい気持ちになった。

目の前の作品が超一流の本物の芸術だったからだろう。

最終日スペイン広場、トレヴィの泉を観光し、空港へと向かった。

トレヴィの泉は、右手でコインを持ち左肩の上からコインを投げると願いが叶うと言われている。皆はいったい何を願って投げたのだろうか。

トレヴィの泉

3. 食べ物

イタリアといえば、パスタ、ピザのイメージがある。初日に食べたイカスミパスタは少々味が薄かった。

七味のような香辛料をふりかけてくれたので、それを混ぜて食べたのだが、これがなかなかの激辛で大変な思

いをした。後は、ピザもパスタもＴボーンステーキもおいしく頂いた。

パスタ＆Ｔボーンステーキ

サラダなど朝食の味が全体的に薄めで、最後に出たデザートがものすごく甘かった。

四日目の夕食時、JTB さんからのサプライズで、この旅行中あるいは近く誕生日を向かえる調査部の伊藤君と松山事務所の工藤さんにケーキのプレゼントがあり、二人とも大変喜んでいた。

サプライズバースデーケーキ

サプライズに喜ぶ伊藤君

4. 最後に

今回、イタリアの知識がほとんどないまま旅行に参加した。

美しい景色・美しい美術品に感動させられた。

それにまつわる知識があればさらに楽しい旅になったことだろうと後悔している。

最後に、創立５５周年記念と結婚３０周年記念をヨーロッパで過ごさせて頂いた会社並びに社員の皆さんに感謝したい。

期待と不安のイタリア旅行

総務部　総務課
髙橋　祐也　(2014 年入社)

1. はじめに

今年の社員旅行は、ヨーロッパ 4 泊 6 日の旅だった。私にとっては 2 年前のグアム旅行に続き人生 2 度目の海外旅行である。イタリアは世界遺産の登録数が世界一。文化や芸術など見どころは盛りだくさんである。出発の日を今か今かと心待ちにしていた。いよいよ出発前日、期待と緊張で胸がいっぱいになり、何度も忘れ物がないかチェックして就寝した。

2. 一日目（出国）

初日は高知からヴェネツィアまで飛行機のオンパレード。最長は羽田空港とフランクフルト空港間でフライト時間は 11 時間 40 分。もちろん、人生初の経験だった。座席にはモニター画面が付いていたので、機内サービスのドイツビールを片手に映画鑑賞を楽しむことにした。そして、目的地のヴェネツィアに着いた頃には、現地時間で 23 時過ぎ。移動時間だけでおよそ 22 時間費やした。さすがに、徘徊できるだけの体力もなく、この日はおとなしく就寝した。

20 時とは感じさせない明るさ（フランクフルト空港の外）

イタリアに来たことを実感（0 時過ぎのヴェネツィア）

3. 二日目（ヴェネツィア観光）

二日目の朝は、前日遅かったこともあり寝足りない感はあったが、何とか起床し、朝食会場へ向かった。当然だが…白ご飯も味噌汁もない。しかし、ベーコンとクロワッサンが美味しかった。朝食後は少し時間があったためホテル周辺を散歩することに。どこを撮っても絵になる風景は、さすがヨーロッパと感じた。集合後は船に乗

りナポレオンが「世界一美しい広場」とも称賛したサン・マルコ広場に向かった。道中ずっと、右手に持った携帯をしまうことが出来ないほどあちこちを撮影。普段、あまり携帯を使わない私だが、この日は違う。電池の消耗が恐ろしい。

明らかに傾いている塔（サン・マルコ広場への道中）

サン・マルコ広場（朝早いので観光客はまだ少ない）

まず向かったのは、大鐘楼。多少の行列はあったものの、朝早い出発だったこともあり、10 分程の待ち時間で入ることが出来た。地上からエレベータで鐘室に上がると、目の前には、迷路のように入り組んだヴェネツィアの街並みが広がっていた(口絵写真 1)。地上に降りて、次に向かったのはサン・マルコ寺院。持ち物の制限があり、リュック類は持ち込めない。また、写真撮影は禁止で記憶に残すしかなかった。内装は重厚できらびやかな造りになっており、黄金のモザイク絵画が圧巻だった。ヴェネツィア共和国の政治の中枢があったとされるドゥカーレ宮には、壁画や天井画が描かれていた。特に、世界最大の油絵といわれる「天国」は見ごたえがあった。

次は、ヴェネツィアの名産品であるヴェネツィアングラスの工房に向かった。そこで、ほんの数分でガラス細工を作り上げてしまう職人さんの高度なテクニックを見せて頂いた。複雑な部分もあっという間に形にする光景はまさに芸術で、見とれてしまう。その後、少しだけ買い物の時間があり、店内を見て回ると、目を引くような工芸品ばかりだった。

サン・マルコ広場（昼間は観光客でいっぱい）

そしていよいよ、楽しみにしていたゴンドラクルーズ。ヴェネツィアの建物と建物の間を縫うようにゆっくりと揺られながら進むゴンドラは非常に気持ちよかった。また、後続のゴンドラには演奏者が一緒に乗っており、そこから聞こえてくる生演奏は、心地よく最高だった。

ゴンドラクルーズ（後続ゴンドラは生演奏付き）

クルーズを楽しんだ後は、イタリア料理への期待を胸に昼食会場へ向かった。ここで初めて、イタリアの料理事情を知ることになる。一番衝撃的だったのは、料理の盛り付けがかなり適当だったことだ。同じテーブル内に運ばれた料理でも、お皿によって量や具材の偏り方が大きく異なり、人によっては 1.5 倍近くの差があった。このレストランだけかと思ったが、旅行中に行った全てのレストランで同じことがいえた。味は基本的にどれも薄い。日本で食べるイタリア料理がいかに日本人の舌に合うように作られているか思い知った。また、イタリアにはコーヒーを冷たくして飲む習慣が無いらしく、アイスコーヒーを注文すると、ホットコーヒーと氷の入ったグラスを用意されることが多いようだ。

イカスミパスタ

ヒラメとサラダ

ティラミス

昼食後の自由行動時間には、ヴェネツィアの街を気ままに散策した。「迷ったらとりあえずサン・マルコ広場へ」と言われるほど小路が入り組んでおり、すぐ迷う。公衆トイレ(有料€1.5)を見つけるのも一苦労だった。ヴェネツィアの象徴的存在でもあるリアルト橋を観光し、買い物を楽しんだ後は、歩いてホテルへ戻った。

夕食は、海鮮コースであった。昼間の観光の疲れにより睡魔が襲ってきたが、冷たいビールで生き返り、その後は、赤ワインや白ワインと一緒に料理を楽しんだ。夕食後は、ホテル近くのスーパーで少しだけ買い物をした後、就寝した。

4. 三日目（フィレンツェ）

この日はホテルを出発後、高速鉄道(イタロ)に乗りヴェネツィアを後にした。車内は広々としておりフィレンツェ到着までの 2 時間を快適に過ごすことが出来た。列車を降りると、すぐバスでミケランジェロ広場に向かったが、あいにくの天気で感動が半減した。しかし、さすがは世界一の眺望。今回は残念だったが、ぜひ一度は天気のいい日にここからの夜景が見たいと思った。

次に向かったのは、アカデミア美術館。目玉と言える展示品はなんといってもミケランジェロの「ダヴィデ像」。誰もが知る有名な彫刻だろう。そのダヴィデ像を実際に目の当たりにしたとき、想像を遥かに超える大きさと迫力に圧倒された。

美術館の後は、再びバスに乗り、昼食会場に向かう。昼食はピザでありビールと一緒に頂いた。本場はナポリではあるが、ここでのピザも美味しかった。今度はぜひナポリのピザも食べてみたい。

昼食後は、歩いてサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に向かい、その最上部まで登った。昼食前のバス移動で説明を受けていたが、464 段の階段は非常に辛い。横幅も狭く降りてくる観光客とすれ違う際には、どちらかがバックせざるを得ない程だった。しかし、何とか登り切ると、達成感があり、そこにはフィレンツェの街を一望出来る絶景が広がっていた(口絵写真 6)。

フィレンツェでの最後の観光先は、ウフィツィ美術館だった。ここでの見どころは、美術の教科書で必ず一度は目にした事があるボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」。他にも、レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロなど著名な画家の作品が展示されており、思わず立ち止まり見入ってしまう。展示されている作品全てを鑑賞するには半日近くかかりそうだ(口絵写真 7)。

美術館を出ると、1 時間半程度の自由行動時間があった。行動を共にした同僚が革の手袋の購入に際し、事前にお店をリサーチしていたので、そこに向かった。さすがは、本場の革製品といった質感であった。しかし、物欲が乏しい私は、購入には至らなかった。

その後は、フィレンツェでは有名なヴェッキオ橋やフィレンツェの町並みを気ままに歩きながら、集合場所へと戻った。ヴェッキオ橋のその姿は建物が橋からはみ出しまくっており、独特な風景であった。

この日の夕食は、前日から期待していた T ボーンステーキ。はじめに、マリネが出てきたが普通に美味しい。期待が高まる。そして、サラダとともに T ボーンステーキが登場した。味は期待通りの味だが、わりかしビッグサイズだったため、最後の方は意地で食べきった。

5. 四日目（ローマ観光）

この日は、朝早くから高速鉄道(フレッチャアルジェント)に乗り、ローマに向かった。前日に乗ったイタロに比べると、座席はやや狭めで快適とは言えなかったが、むしろ、こちらが普通でイタロが良すぎたのかも知れない。ローマまでは約 1 時間半で到着し、早速バスに乗り込む。

最初に向かった先は、フォロ・ロマーノ(ローマ市民の広場)とコロッセオ(口絵写真 9)。フォロ・ロマーノは紀元前に構築された古代ローマ都市で、現在は世界文化遺産に登録されている遺跡である。他の観光地とは少し違った空気を感じた。フォロ・ロマーノから少し歩くと、コロッセオに到着。コロッセオは当時、剣闘士たちが命を懸けて戦っていた場所。年間数千人の剣闘士がここで命を落としたと言われている。皇帝がローマ市民に娯楽の場を提供することで反乱を抑える目的があったという。コロッセオのすぐそばには、コンスタンティヌスの凱旋門(口絵写真 10)が佇んでいた。ローマ最大の凱旋門でパリの凱旋門のモデルとなったとのこと。存在感があった。

コロッセオ内部（剣闘士たちが戦っていた）

次に向かったのは、映画『ローマの休日』で一躍有名になったサンタ・マリア・イン・コスメディン教会の「真実の口」。入場料は無料だが、「真実の口」の前にお賽銭箱があり寄附金を入れるしくみになっていた。到着した時には、すでに行列が出来ており「真実の口」で写真を撮るまでに 30 分近くかかった。

「真実の口」（映画「ローマの休日」で一躍有名

次に向かったのは、世界最小の独立国家「ヴァチカン市国」。その国土は東京ディズニーランドよりも小さいが、サン・ピエトロ大聖堂やヴァチカン美術館など歴史的にも重要な建造物がたくさん存在していた。まず驚いたのはイタリアからヴァチカンへの入国には、パスポートが必要なかったことだ。特に、イタリアとの国境もなかったため、あっけなく入国出来た。

ヴァチカン市国内では、サン・ピエトロ大聖堂、ヴァチカン美術館、システィーナ礼拝堂を観光した。その中でも特に印象に残っているのは、システィーナ礼拝堂の祭壇に描かれていた「最後の審判」の壁画であった。残念ながら礼拝堂内は写真撮影禁止で記録に残すことは出来なかったが、祭壇に描かれた大きな壁画はインパクトがあった。また、おしゃべりも禁止で観光客がざわざわしだすと警備の人に注意されるなど厳粛さが保たれていた。天井にもミケランジェロの「天地創造」が描かれており、その凄さに圧倒された。

礼拝堂を抜けると、次はサン・ピエトロ大聖堂に向かった。聖堂内はとにかく天井が高く、開放的な空間だった。また、壁だけでなく柱にも豪華な装飾が施されており、どこをみても素晴らしい。

この日の夕食は、ホテルからバスで 20 分程のところだった。外観はオシャレで豪華そうな場所であり、イタリアでの最後の晩餐ということで今まで以上に期待した。そして期待通り、そこでは素敵なピアノ演奏と店内に響き渡るほどのカンツォーネを聴くことが出来た。料理に関しての好みで言えば、前日の T ボーンステーキの方が私的には美味しかった。しかし、素敵な時間を過ごすことが出来、とても良い思い出となった。

イタリア料理店の外観（期待できそうな雰囲気）

6. 五日目（ローマ観光→帰国）

イタリア観光最終日は、前日に引き続きローマ観光であった。この日も朝早くに出発したわけだが、朝食は今までのホテルで一番豪華だった。ただ、ご飯はゆっくり派の私にとっては時間との勝負であり、焦りながら何とか食べ終え、急いで荷物を持ってロビーに集合した。最終日にもなると、長いようで短かったイタリア旅行も、もう終わりかと名残惜しい気持ちになった。バスに乗り、はじめに向かった場所は、スペイン広場。こちらも、映画『ローマの休日』で一躍有名になった場所である。朝早い観光であったため、観光客はまだ少ない。階段前の「バルカッチャの噴水」には何故かたくさんのコインが沈んでいた。

スペイン広場（噴水にたくさんのコインが沈んでいた）

次に向かったのは、トレヴィの泉。「肩越しにコインを投げると再びローマを訪れることが出来る」という言い伝えは有名である(口絵写真 14)。他にも、コイン 2 枚だと好きな人と結ばれる、3 枚だと腐れ縁が切れるという言い伝えがあるようだ。コインの種類は何でも良いそうで、私はローマへの再訪を願い、十円硬貨を 1 枚投げ入れた。その後は、トレヴィの泉近くのジェラート店で「ティラミス」と「バニラ」のジェラートを注文し、旅の最後を締めくくった。

ジェラート店の前（旅の最後にジェラートを堪能）

ここから少し歩いてバスに乗り、揺られること一時間。フィウミチーノ空港に到着。搭乗手続き、手荷物検査を済ませた上で少しの自由行動時間。最後にお土産を買い足し飛行機に乗り込んだが、再びイタリアが名残惜しくなった。フライト時間も一度 11 時間 40 分を経験すると、1 時間半はあっという間であった。乗り継ぎ先のミュンヘン空港に到着。ここで、2 時間程の自由時間があったため、ドイツビールとソーセージを頂いた。普通に美味しい。

最後にドイツを堪能したところで、飛行機に乗り込み、日本へ向かう。フライト中は長旅の疲れでほぼ寝ていた。座席の狭さは気にならず、あっという間のフライト時間であった。気になることと言えば、機内が異常に寒く、帰国後風邪を引いてしまったことだ。

7. 六日目（帰国）

無事、羽田空港に到着。日本の地に足を踏み入れた時、イタリアの名残惜しさとは裏腹に、日本語の案内板に安堵した。羽田空港では恋しくなっていた日本料理(寿司)を少しだけ食べ、久々の日本の味に感動した。「ただいま、日本!!」と心の中で呟き、羽田空港から高知龍馬空港へと向かう。そして、今回のイタリア旅行が何事もなく無事に終わった。

8. おわりに

今回、異国の地イタリアまで約一日かけて行き、ワインやパスタなどの食文化やラファエルやミケランジェロなどの著名人の美術品、大聖堂やコロッセオなどの歴史的建造物を実際に見ることができ、とても貴重な思い出となった。また、異文化に直接触れ、違いを知ることで海外にはない日本の良さを再認識することが出来た。

～心に刻まれる記念の旅～

設計部　河川砂防課　副技師長
村岡　志郎　(1999 年入社)

1. 出発

ヨーロッパは、芸術、グルメ、歴史的建造物、世界遺産など見どころが盛り沢山である。以前より憧れの地であったが、私の人生の中で一生立ち入ることのない領域と半ば諦めていた。しかし、今回の旅行でその夢が叶うこととなり、約 9,870km 離れたイタリアへ出発した。

2. 観光

2.1 ヴェネツィア観光(水の都)

ヴェネツィアは水の都と称され、街中に用水路が張り巡り、移動手段は水上バスと水上タクシーがメインである。私は、ここならではの手漕ぎのゴンドラクルーズを体験した。水上からの町並み観光、カンツォーネの生演奏、のんびりとした遊覧は、旅の醍醐味である非日常間を満喫するに十分であった。少し残念に感じたのは、民家の雑排水による悪臭が漂っていたことである。これは写真や雑誌では感じ取れない実体験による感覚であった。

写真 2-1　水上バスの運行状況

2.2 フィレンツェ観光(花の都)

イタリア 4 大都市で中世の美しい街並みを残す街、フィレンツェ。ヴェネツィアからフェラーリ特急の異名を持つ「イタロ」に揺られ、約 2 時間で到着する。駅周辺や民家の壁は、高度なデザインとも感じられる立派な落書き？で埋め尽くされている。その光景は、ルネッサンス発祥の地と言われ、古代文化を伝えるイタリア社会の歪みを強く感じた。アカデミア美術館の「ダヴィデ像」、ウフィツィ美術館の「ヴィーナスの誕生」など、教科書や紀行番組の世界を体感した。日頃から芸術への興味が薄く、触れる機会の少ない私は、「猫に小判」の状況であったが、その迫力は十分感じ得た。歴史的建造物が建ち並ぶ狭隘な道路事情から観光スポットへの移動は徒歩に頼らざるを得ず、フィレンツェでは万歩計が 17,000 歩を記録した。ドゥオモ・クーポラでは 464 段の急な螺旋階段をひたすら頂上を目指して登った。登り降りは分離されておらず、混雑していた。旅行の開放感か

らかすれ違いの際は、「Please」、「Thank You」、「Fight」など、外国人観光客とのコミュニケーションが自然と出来たことを新鮮に感じた。

写真 2-2　フィレンツェの町並

2.3 ローマ観光(永遠の都)

(1) ローマ

イタリアの首都で政治、経済、文化の中心地であるローマまでは、フィレンツェ駅から「フレッチャアツジェント」に乗車し約 1 時間 30 分で到着する。ここでは、世界遺産を巡る観光となった。

1)　世界遺産コロッセオ

コロッセオは、「ローマは一日にして成らず」ということわざを彷彿させ、ローマ帝国の威厳を保っている。この施設は、紀元 72 年にエルサレム遠征の捕虜 4 万人以上を動員して 8 年がかりで建設した剣闘場(周囲 527m、高さ 50m、収容 5 万人)である。この時代の日本文明は弥生時代にあたる。竪穴建物や高床建物であったことを考えると、西洋文明とのタイムラグを痛感するとともに、先進国として肩を並べている現状が偽りにさえ思える。

2)　サンタ・マリア・イン・コスメディン教会

ここでは、イタリア旅行紀でよく目にする「真実の口」を体験した。教会の正面柱廊の奥に飾られた海神トリトーネの彫刻の口に手を入れると偽りのある者は手が抜けなくなる伝説がある。もとは、下水道のマンホール蓋、古代ローマは巨大な下水施設が整備されていたことを想像させる。ローマ時代に湿地干拓の一環として下水道工事が行われ、水洗トイレがあったことに驚嘆する。スペイン広場に行く途中には、現存する水道橋も観ることが出来る。

写真 2-3　真実の口

3)　スペイン広場・トレヴィの泉

オードリーヘップバーン主演の歴史的な名作「ローマの休日」の撮影場所であるスペイン広場、泉にコインを投げ込むと願いが叶う伝説が有名なトレヴィの泉を観光した。撮影当時のロケ現場と変わりない風景に立つと映画の中にタイムスリップした感覚に陥る。トレヴィの泉では、投げ方やコインの枚数にルールがある。(1 枚：ローマに再来できる、2 枚：結婚できる、3 枚：離婚できる)カメラマンとのタイミングを計りながらコインを投げた(口絵写真 14)。

(2) ヴァチカン市国

ヴァチカン市国は、20 世紀にイタリアとローマ教皇の合意により誕生したイタリアに囲まれた世界最小の独立国である。国土面積(0.44km^2)は東京ディズニーランド(0.49km^2)よりも小さい。人口はわずか 800 人ほどで、そのほとんどはカトリックの修道者とスイス人衛兵である。ヴァチカン市独自のパスポートは存在せず、イタリアとの行き来は自由にできる。ヴァチカン市国は世界でも異例な場所として今回の旅行で楽しみにしていた場所の一つであった。聖書を描写した絵画が飾られたサン・ピエトロ大聖堂は、大規模でキリスト教信者でない私でも身が清められる思いがした。

写真 2-4　サン・ピエトロ大聖堂

(3) ローマの朝

最終日は早起きをしてローマの朝を散策した。イタリアはサマータイム期間中で(3～10 月)、昼間の明るい内に仕事を行い、夜時間を長くとり余暇を有意義に過ごす。地下鉄の駅内を足早に通勤する人や、街路で出店準備に追われる商売人の光景を目にした。

写真 2-5　露店の出店準備

3. グルメ

イタリア料理は、日本で「イタリアン」や「イタ飯」等の呼び名で親しまれている。今回の旅行では本場の味が楽しめると期待していた。

3.1 機内食

行き帰りの飛行機はルフトハンザドイツ航空であった。機内食は、味や臭いが強烈で、眉をしかめたが、ワインを注文し、眼下の景色を見ながらほろ酔い気分で機内を過ごした。帰りの乗り継ぎ空港ミュンヘンでは、本場のドイツビールとウインナー、プレッツェルを堪能した。ウエイターの口調は激しく早口であったが、同僚の活躍で無事、注文出来た。海外旅行は語学力が重要である！

写真 3-1　ミュンヘン空港内のレストラン

3.2 ランチ・ディナー

イタリアの食事は、オリーブオイルやチーズをふんだんに使った濃厚なものを想像していた。実際は、全般的に味は薄く、野菜や魚介類などの素材を生かした素朴な料理が出され、意外であった。ワイン生産量の世界一を誇るイタリアではビールが飲めないとの噂であったが、すっきりとしたキレのあるイタリアビールも飲むことが出来た。最終日は、ホテルから 30 分ほど離れた場所でフルコース・ディナーを堪能した。そこでは、カンツォーネ歌手による聞き覚えのあるイタリア民謡の歌声を聴きながら食事をとることができた。終了間際にオリジナル CD を販売する様子は、イタリア商人魂を感じた。

写真 3-2　カルボナーラパスタ

4. ショッピング

イタリアの通貨単位はユーロ(€)とユーロセント(Cent)、1 ユーロは日本円で約 130 円、消費税は品物によって変動する付加価値税で 4～20%である。外国人観光客に容赦ない店員の対応と慣れない通貨と格闘しながらのショッピング。イタリア旅行は日程が厳しく、土産は唯一自由時間が取れるヴェネツィアで購入することとした。若干、高額ではあったが、あまりに美しいガラスの魅力に負け、妻にワインを飲むヴェネツィアングラスを購入した。観光地では、イタリア風景をデザインした T シャツや帽子、キーフォルダーなどの小物を売る露店が建ち並び、賑わいを見せていた。チョコレートなどの食品関係は、土産物売り場より安価に手に入るホテル近くのスーパーで購入した。地元スーパーに入ると珍しい食品や、慣れない臭いを感じ、地元の生活感を感じることが出来た。

写真 4-1　ヴェネツィアングガラス展示場

5. イタリアのインフラ事情

(1) 道路

1) 交通状況

メイン道路は大型観光バスの交通量が多く、観光地周辺は渋滞が発生している。交差点付近を除き車線が引かれていない上、方向指示器を出さずに割り込みする車両が多い。よくこれでトラブルが起きないものと感心する。ロータリー式の交差点が多く、けたたましいクラクションが鳴り響いている。ここでの運転は慣れと度胸が必要である。また、街路は狭隘で障害物の多い通路走行に適したミニバイクが利用されており、イタリアオートバイメーカーの洒落たベスパが多く駐車されていた。

2) 舗装

観光地の道路は、石畳(約 30cm×30cm)又は石材(約 15cm×15cm)によるインターロッキング舗装である。歴史的な景観への配慮と考えられるが、損傷や凹凸が激しいため、乗り心地は悪く騒音が激しい。街の至る所で路面補修の光景をよく目にした。

3) 路上駐車

道路の両サイドは、駐車車両により 1 車線が潰れている。民間駐車場は少なく、路上の縦列駐車が当たり前の世界だ。前後の車両間隔は 50cm 程度のため、中央の車両は出られない状況である。その場合、バンパーを当てて前後の車を強制移動させて脱出する。愛車にキズがつくことを極度に嫌がる繊細な日本社会では考えられない習慣である。

写真 5-1　路上駐車状況

4)　ユニバーサルデザイン

ヨーロッパはユニバーサルデザインの先進国である。街中には色とりどりの超低床電車が走行し、バリアフリー化したプラットホームが設置されている。

5)　環境問題

イタリアの道路は悲しいことに路上のゴミが多く目立つ。公共の場所での美観に関する住民の罪の意識が低く、歩きタバコや吸い殻のポイ捨てが横行している。

写真 5-2　路上に散乱するゴミ

(2)　河川

ヨーロッパの河川は、日本と比べて延長が長く勾配が緩やかだ。飛行機の座席が運良く窓際で、いろんな川を鳥瞰できた。広く緩やかな流れが大きく蛇行を繰り返しながら流れる様子は、人の気持ちを穏やかにさせる。フィレンツェのアルノ川、ヴェッキオ橋、ローマのテヴェレ川をバスの車窓から眺めることが出来た。橋梁形式は石造アーチのものが多く、日本で見る落橋防止の付いた桁橋を目にすることはなかった。河道は、掘り込み二面張り構造で、洗掘対策として横工や根固めブロックが設置されている。川沿いに古い建造物が張り出すように立ち並ぶ様子は、水害に縁が薄いように見受けられた。しかし、約 52 年前に発生した 1966.11.4 フィレンツェ大洪水では、アルノ川が氾濫して中心街の 2 階まで浸水した記録が残っている。

写真 5-3　フランクフルト上空

(3)　世界遺産の維持管理

老朽化による外壁のひび割れや剥離などの損傷が顕著な建造物が多い。歴史的に古い建造物の点検、修繕などの維持管理が問題だ。現地ガイドによると、最新技術と職人による修繕工事が繰り返されているとのことであった。高さ約 84m のジェットの鐘楼は、外壁補修をクレーンで実施していた。コロッセオ周辺の建造物は PC 鋼線による補強や、自動計測装置による観測が行われている。

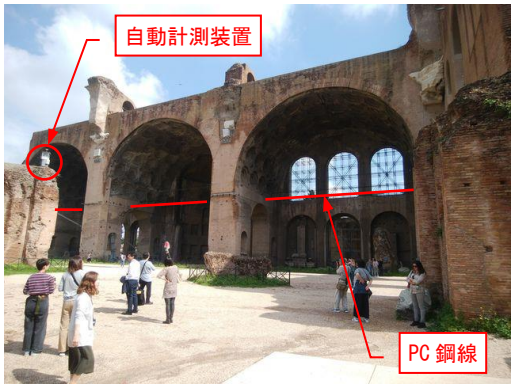


写真 5-4　PC 鋼線と自動計測装置(コロッセオ)

6. イタリアの気候

イタリアは、温暖で雨が少ない地中海性気候である。日本のように梅雨や台風の襲来はないが、冬に比較的雨が多い。ローマと東京の気温は年間を通じてほぼ同じである。朝、コートを着て出勤する人の光景を見たと思えば、日中、タンクトップ姿の観光客を目にするなど、一日の寒暖差が激しい。緯度が高く、夏場のサマータイム期間にあたるイタリアは、夜の 8 時半頃まで明るい。日中は日差しが強く、サングラスを掛けて観光した。

7. 世界遺産の現状と現存する理由

イタリア旅行中に、水没の危機に瀕するヴェネツィアの現状と多くの世界遺産が現存する理由に興味が沸いた。帰国後、そのことについて調べてみた。

(1)　世界遺産の現状

ヴェネツィアのサン・マルコ広場は、「アックア・アルタ」による浸水が発生する。この現象は、高潮と吹き荒れる風に起因する異常潮位である。昔は数年に一度程度であったが、近年は地球温暖化等の影響を受け、年間 60 日以上発生し、ヴェネツィア存亡の危機と叫ばれている。イタリアはその対策としておよそ 7000 億円をかけた「モーゼプロジェクト」を立ち上げている。計画内容は、アドリア海からヴェネツィアに入る海流の入口に、高潮の際に浮かび上がる可動式の水門を建設するものである(2018 年稼働予定)。プロジェクトには日本企業も参加しており、バイオクリンという塗料を水門に塗ることで貝など海洋生物がつくのを防ぎ水門の機能を保つ技術を提供している。

(2)　世界遺産が現存する理由

1)　地震の影響を受けなかったのか？

イタリアは日本と同様に地震国で、ヨーロッパ有数の災害多発国である。内陸部のフランスやドイツに地震は少ないが、地中海に面した地域は地震が多く発生している。ただし、その多くは活断層がある北部の山側に集中しており、ローマに大きな影響が及ばなかったものと考えられる。

〔イタリアの過去の主な地震〕

1908.12.28 メッシーナ地震 M7.1 犠牲者 82000～10000 人
1997.09.26 ウンブリア州・マルケ州の群発地震 M6.1
2009.04.06 ラクイラ地震 M6.3 犠牲者 309 人
2012.05.20 イタリア北部地震 M6.0
2016.08.24 イタリア中部地震 M6.2 犠牲者 294 人以上

2)　水害の影響を受けなかったのか？

先に記述したとおり、洪水による氾濫被害を過去に経験しているが、遺跡の多くは高台にある立地条件や、建造物が石材であったことから、水害による消失を避けられたものと考えられる。また、日本とイタリアは、「日伊土砂災害防止技術会議」を定期的に開催し、二国間で土砂災害防止技術に関して議論するなどの交流があることを知り、「河川、砂防」を専門とする私は親近感を覚えた。

3)　建築物の強度低下は？

コロッセオなどの大規模な建造物には、現代のコンクリート以上の強度を持つとも言われる古代コンクリートが使用されている。古代コンクリートにはカルサイトと呼ばれる難溶性の炭酸カルシウムが大量含まれている。こその成分により、大気中や土中の炭酸ガス(CO2)を吸収して材料を炭酸化したことで数千年という時を経て現存したと考えられている。

4)　総論

多くの遺跡が現存する理由として、自然災害を受けにくい立地条件であったことや、高度な土木技術と超長期耐久性の建築材料を使用していることが上げられる。コンクリートの配合や混和剤、綿密な防水層をつくるなどの技術をどのように修得したのか不思議である。ただ、先人の知恵と工夫に驚嘆する。日本に比べ降雨が少なく高温多湿な気候も理由として考えられる。なお、イタリア半島全てが、ローマ帝国の本国となっていた歴史的な背景から戦争に巻き込まれなかったことも大きな理由ではないだろうか。

8. 旅を終えて

日本から遠く離れたヨーロッパ旅行は、テレビや雑誌で得た知識を自分の目で見て、肌で感じられたことが何よりであった。これからの人生の中で貴重な経験として活かされることであろう。私にとって、大切な思い出として一生涯、心に刻まれる記念の旅となった。

私が見たイタリア

設計部　河川砂防課
小島　心平　(2014 年入社)

1. はじめに

平成 30 年 5 月 7 日から 5 月 12 日までの日程で、イタリアへ研修を主目的とした社員旅行に参加した。

イタリアに関する知識といえばゲームや漫画由来のものしか無かった。なぜイタリアを選択したかと言えばイタリアの自動車、特にアルファロメオが好きだからに尽きる。実際、日本では発売されていないモデルを見ることもできた。

ただ、イタリアへ旅行に行ったことのある知人からはスリが多いとか空港で預け入れ荷物が紛失するなど不安要素をかなり多く聞いていた。

実際には懸念していたアクシデントは無かったが、旅行に際しては過去最高レベルに細心の注意を払った。

それらを差し引いても、イタリアでの経験は得がたいものだった。

2. 一日目

イタリアへは羽田、ドイツのフランクフルトを経由して到着した。

最長区間である羽田-フランクフルト間は 11 時間 10 分のフライトで、ドイツのフラッグシップキャリアであるルフトハンザドイツ航空を利用した。

機内食が 2 回出る長距離便の飛行機は初めてなのだが、これがなかなかの狭さだった。ほぼ日本人平均体型の私の場合でも前席に膝が当たり、左右も肩が触れあうぐらいである。かなり窮屈で、疲労が溜まった。

しかし、到着すればその疲労はどこへやら、すっかり異国の地に舞い上がっていた。成り行きで入国審査にトップバッターで乗り込むことになり、入国審査官に色々質問されたが、なんとか聞き取ってクリアした。

フランクフルト空港ではもはや日本語は存在しない。ヨーロッパに来たのだと実感した。

未だ夕方の空模様を示すフランクフルトを 20 時に出発し、いよいよイタリア、ヴェネツィアである。空港に着くと、高知で預け入れた荷物とついに再会である。二度の乗り継ぎを経て外装に傷ができていたものの、無事に受け取ることができた。

その後、バス、水上バスを乗り継ぎホテルに到着した。ホテルに向かう道中、外灯に照らされた寺院、サン・シメオン・ピッコロが出迎えてくれた。

水際に立つ古い寺院。ここにヴェネツィアの玄関口ができたのは地理的な要因が大きいのだろうが、ここから始まるヴェネツィアの観光を予感させるにはこれ以上無い景観だと思った。

サン･シメオン･ピッコロ

3. 二日目

起床すると、朝食の時間まで余裕があったためホテルの近くを散策した。そもそも初のヨーロッパでそれはもう新鮮さしか無かった。道沿いに立ち並ぶ建物がみな美しい。写真写りは完璧である。ただ、路上のごみや歩きたばこなど不衛生であると感じる所は多々あった。

朝食はホテルの一階でビュッフェ形式であった。和食が無いこと以外日本のホテルで供されるものとそう変りは無かったが、ハムなどのバリエーションが豊富だった。

朝食を取り終えると本格的な観光に移行する。

ヴェネツィア島内は一部を除き全ての車の通行が認められていないため、ボートやゴンドラ、徒歩での移動が主となる。

まずはサン・マルコ広場に水上バスで向かう。サン・マルコ広場にはヴェネツィアの守護聖人である聖マルコを奉ったサン・マルコ寺院、かつてのヴェネツィアが一独立国家だった時代に法執行機関が設置されていたドゥカーレ宮など主要な観光スポットが隣接しており、有名なため息橋もすぐ近くにあった。1 つ観光を終えると次のスポットまですぐに到達できる。いずれも絵画や彫刻がくまなくちりばめられており、その全ての密度が高かった。まさに豪華絢爛である。

サン・マルコ寺院

ドゥカーレ宮内部

その他、ヴェネツィアングラスの工房を見学した。熱されたガラスの塊からいとも簡単に勇壮なユニコーンが形作られる様はまさしく職人、と言ったものである。やたら日本語の達者なセールスに商品の説明を受け、おのおのヴェネツィアングラスを購入していた。私は手頃な価格で勤務中のお茶飲み用のものがあればと思い探していたが、ちょうどよいものがあった。透明なコップで、白黒のラインが入っている。値段も比較的手頃だったため購入した。

その後ゴンドラにてクルーズを楽しんだ。これぞヴェネツィアという景色だったが、水路特有のにおいがあり少し気分が悪くなった。クルーズを終えると、昼食会場へ向かった。サラダ、イカスミパスタ、ヒラメのソテー、ティラミスのコースであったが、いずれもかなり薄味であった。昼食を終えると解散し、自由時間になった。私は総務課の高橋さんとともに歩いてホテルまで戻りながら散策することにした。道中、二人して体調を崩してしまった。建物の密度が高く気になっていなかったのだが、空を見ると雲がかかっており、風が冷たかった。やっとの思いで有料トイレにたどり着くと、体調はみるみるうちに戻っていった。そこからがヴェネツィア散策の始まりだったといえる。ヴェネツィア最大の運河カナル・グランデに架かる 4 橋の内の 1 橋、リアルト橋で写真をとり、たまたま見かけたディズニーストアで限定グッズを買い、街中に無数にある露店で小物入れやお皿を見て、細い細い小道を抜けてホテルへと辿りついた。道中では時々ストリートミュージシャンが演奏していた。これも町に彩りを添える重要なパーツの 1 つだと感じた。

夕食は海鮮コースであった。マリネ、ペスカトーレ、イカと海老のフリット、パンナコッタのコース。若干体調不良が後を引いていたのでフリットは残そうかと思ったが、私はせっかく出された料理を残すことはできない性分らしかった。完食した。

その後はホテルに戻り寝た。

4. 三日目

この日はホテルをチェックアウトした後、イタリアにおける高速鉄道『イタロ』にのり、フィレンツェへ向かった。旅程表には二等席と書かれていたが、搭乗した席はどう見ても一等席だった。座席は広々、飲み物と軽食のサービス付きである。車内も清潔で実に快適であった。フィレンツェまでは 2 時間程度で到着した。

フィレンツェでは町を一望できるミケランジェロ広場、ダヴィデ像の実物を展示するアカデミア美術館、高さ 114.5m を誇るサンタ･マリア･デル･フィオーレ大聖堂、ボッティチェリの春、ヴィーナスの誕生などを収蔵するウフィツィ美術館を見学した。

ミケランジェロ広場は世界一の眺望とのことだが、あいにく雨がぱらつく天気だったため、そこまで心奪われる景色では無かった。

その後、アカデミア美術館に移動した。特に彫刻が多く展示されている美術館であるが、ここでの目玉はなんと言ってもダヴィデ像である。メディアへの露出が多いので知らない人はいないといっても過言ではないのだろうが、それが実際にそこにあるとなると印象はひと味もふた味も違うものである。なにより大きかった。普通の人間サイズを想像していたので高さ 5m くらいの威容には驚いた。

また、その他の展示物においても特に布の造形に圧倒された。女性の彫刻を覆うそれはまごう事なきシルクの布であった。それが石でできている。

私の理解の範疇を超えていた。

ダヴィデ像

彫刻による薄布

アカデミア美術館を後にし、昼食になった。ここではピザだった。日本でも食べる機会が多いピザではあるが、本場の伝統的なピザを知ることには深い価値がある。大変美味だった。

食事をした後はサンタ･マリア･デル･フィオーレ大聖堂のドームの最上部に登った。464 段ある階段を駆け上がると、さわやかな風と共にフィレンツェの眺望が待ち受けていた。このときは晴れになっていて、景色も相当美しく見えた。次にウフィツィ美術館を観光した。ここでも実物の迫力を感じた。

観光を終えると少しだけ自由時間があった。

フィレンツェと言えば革製品である。かねてから買いたかった革手袋の店に行った。手を見せるとすぐにぴったりのサイズを出してくれると評判だったのだがその通りであった。

手になじみ、手袋をつけたままでも会計ができそうな程で、デザインもよくつくりもしっかりしている。さすが革製品の聖地である。迷わず購入した。また、手袋の裏地として使用するシルクやカシミヤについても一流である。それらを使用したネクタイやストールなども販売していた。ネクタイを父親に購入した。大満足である。

その後は街中を適当にぶらついた。革製品を売る露天が立ち並んでおり、どれも衝撃的な安さだった。さわらせて貰ったが特に粗も見つからない。日本で買うと 3 倍はしそうだった。荷物のスペースが満杯に近いことから購入はあきらめたが、後悔が尽きない。

夕食は名物ビステッカ･アッラ･フィオレンティーナであった。別名で T ボーンステーキ。フィレンツェ特有の牛であるキアーナ牛をレアで焼く郷土料理である。やや自分の理想が高すぎた所は否めないが、ボリュームたっぷりの赤身肉は食べ応え抜群だった。この日のホテルは普通のホテルかと思いきや部屋に入るとダブルベットであった。男二人でこれは厳しいと言わざるを得ない。食事中に JTB の添乗員さんが手配に奔走してくれたおかげですぐ近くのホテルに宿泊できた。後になってどのようなホテルに泊まったのか知りたかったのでグーグルマップで検索したが登録されていなかった。オープンしたてのホテルらしく、少し得をした気分になった。

5. 四日目

この日はイタロとは運営会社が別の高速鉄道『フレッチャアルジェント』にのり、首都であるローマへ向かった。所要時間は 1 時間 30 分である。

ローマもこれまでの都市と同様歩きたばこ、路上のごみが常態であった。

古代の統治機関が集積されていたフォロ・ロマーノ、民衆の娯楽の場として建造され、5 万人の収容が可能なコロッセオ、映画『ローマの休日』において一躍有名となった真実の口、世界最小の国家であるヴァチカン市国及びヴァチカン美術館、キリスト教総本山であるサン・ピエトロ寺院を見学した。

フォロ・ロマーノは他の観光客も少なくゆっくり見学ができた。コロッセオは日本でもサッカースタジアムなどでよく見る形状で少し親近感がわいた。これが紀元 100 年以前に建築されたことを除けば。

コロッセオ

ヴァチカン美術館では･･･もはや何も言えない。この旅行で名画や彫刻を見すぎた。そもそも私が美術に篤くないので数多ある彫刻それぞれに個別の感想が抱けない。有り難いものなのは理解できるが完全に食傷であった。

あまりなじみのないキリスト教ではあるが、サン・ピエトロ大聖堂は総本山ともあって建物の規模、風格共に

桁外れだった。

サン・ピエトロ大聖堂

一通り見学を終えると、買い物の時間としてローマ三越を訪れた。従業員は全員日本語が理解できるようで、安心して買い物ができた。

ここではおみやげ用にフィレンツェで買いそびれた革製品を買いあさった。

日本で買った場合と比較して半値以下で購入できた。これはお得である。

帰国してから近しい友人に分配したが、やはり made in Italy のブランドは尋常では無く、例外なく好評であった。

イタリア最後の夕食は歌を聴きながら食事をするカンツォーネディナーだった。

サラダ、パスタ、白身魚のソテーフライドポテト添え。音楽を添えた食事というのも乙なものである。完食した。

6. 五日目・六日目

またしても映画ローマの休日で有名なスペイン広場、後ろ向きにコインを投げ入れると願いが叶うというトレヴィの泉を観光した後、移動である。

朝早い時間に赴いたためいずれも比較的開放的に観光できた。スペイン広場の階段を上ると遠くに大きな寺院が見えた。すわあれがヴァチカン市国か？否、更に遠くに朝靄にぼけたサン・ピエトロ大聖堂が見える。太陽と月が見かけは同じ大きさに見えるように 2 つの寺院が並んでいた。キリスト教総本山、侮り難し。

朝靄のサン・ピエトロ大聖堂

トレヴィの泉は毎週金曜日に掃除を行うようである。ガイドが一言二言清掃員に話しかける。聞くに私たちの観光が終わるまで掃除を待って欲しい旨伝え、承諾を得たらしい。おおらかである。

投げ入れるコインは 1 枚でローマの再訪、2 枚で永遠の愛、3 枚で腐れ縁の切断が叶うそうだ。

とりあえず 2 枚投げ入れることにした。

トレヴィの泉

トレヴィの泉に隣接して賞を取ったこともあるというジェラート屋があった。ジェラートを売る店はイタリア中至る所で見かけたが、一度も食べていなかった。チョコレート、フルッティディボスコ(森の果実の意、野いちご等のミックスジャムらしい)の組み合わせで食べたがこれが絶品であった。賞を取るだけあり非常になめらかな口当たりと味わいだった。

その後はバスに乗りローマ郊外にあるフィウミチーノ空港からドイツのミュンヘンを経由し、羽田へと帰り着いた。またしても飛行機は狭かった。羽田に着くと同じく開放感。私感だが長距離便の中は時間が止まっているかのようで、到着すると機内の出来事が驚くほど印象に残っていない。不思議な体験だった。

羽田空港でさすがに小腹が空いたため立ち食い寿司を食べた。5 割増しで美味しく感じた。

高知空港へ到着すると、荷物を回収し、解散した。

7. 終わりに

これで私の海外渡航歴はグアムが 2 回、イタリアが 1 回となった。

数多くの美術品、建築物を実際に見ることができ、非常に貴重な体験だったと思う。

言語については翻訳アプリを用意するなどしたが、ジェスチャーや英語で話すと察してくれるので助かった。観光客慣れしているというのもあるだろうが、無視せず耳を傾けてくれるのは非常に有り難かった。もう一度行きたいと思わせてくれる。

食文化の違い、生活リズムの違い、仕事への取り組み方の違い等日本では考えられない光景をいくつも目の当たりにした。電車の遅れが日常茶飯事で社会もそれを当然としているそうなので日本の交通機関の律儀さには平伏するばかりである。

事前に聞いていた通り市街のごみや物乞い、露店等の強引な商売には警戒していないとかなり損害を被るポイントだと感じた。心構えと準備の大切さを身にしみて実感した。

イタリアの地形地質と建築材料

設計部　防災まちづくり課　技師長
須内　寿男　(2017 年入社)

1. はじめに

本報告書は、自分の興味の対象である地形や地質、古代コンクリート、石材などに着目して記した。

2. イタリアの地形地質概要

イタリアはヨーロッパ大陸から南東に突き出したイタリア半島とその西側のシチリア島などの島々からなる。イタリア半島はアペニン山脈により形成されている。アペニン山脈は、ユーラシアプレートの下にアフリカプレートが沈み込んだ結果生じたアルプス造山運動により、ユーラシアプレート上に形成された(石川、2011)。同山脈の地質は白亜系(およそ 1 億年前)と中新統(およそ 2 千万年から 1 千万年前)で(図 1)、半島の中央部が隆起したため、緩やかな起伏を示す丘陵山地である(写真 1)。山地の標高は 2000m 以下で 3000m 級の山地はない。

イタリア半島はプレート収束域であるため、日本と同様に活火山もあれば地震も頻繁に起きている。20 世紀以降の記録で見るとマグニチュード 6 以上の地震は 2 か月から 15 年の間隔で起きており、最近では 2016 年 10 月に中部のベルージャでマグニチュード 6.6 のイタリア中部地震により死者が 3 名出ている(ウィキペディア)。

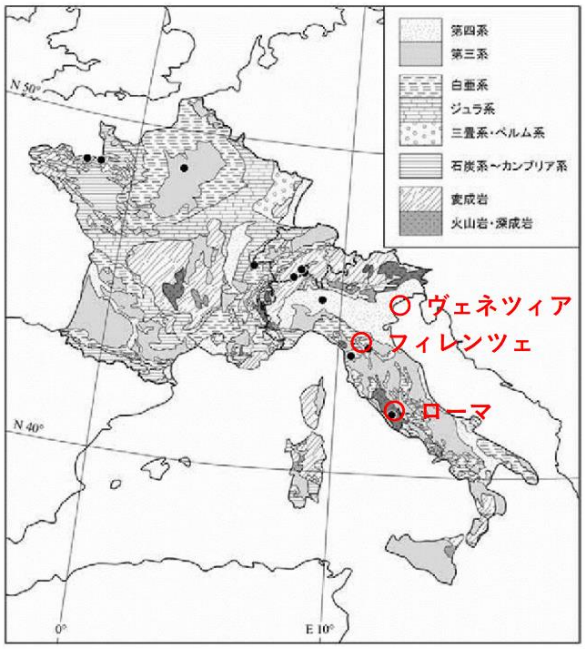


図 1　イタリア・スイス・フランスの地質図(山中(2017))

写真 1　列車でフィレンツェからローマに向かう途中の風景小麦畑が広がる。5 月 10 日。

3. ヴェネツィアのラグーン

－契約どおり肉を 1 ポンド取るが良い。ただし血は 1 滴も流してはならぬ－

ラグーンとは、浅海域の一部が沿岸州、砂嘴(さし)、サンゴ礁などの発達によって外海から切り離されて形成された水体を指す(地形の辞典)。ヴェネツィア(英語で Venice)は地中海最大のラグーン(Brambati ほか、2003)の中にある島々の一つである(図 2、写真 2)。ヴェネツィアは穏やかなラグーンの内にあり、周辺の大水路の水深が 10～14m と大型帆船の入港に十分な深さを有し、ドイツやオーストリアにも比較的近いため、中世は貿易港として繁栄した思われる。現在はいない(ガイドさん談)が、当時はユダヤ商人が多く住みつき、シェイクスピアの戯曲「ヴェニスの商人」の舞台ともなった。

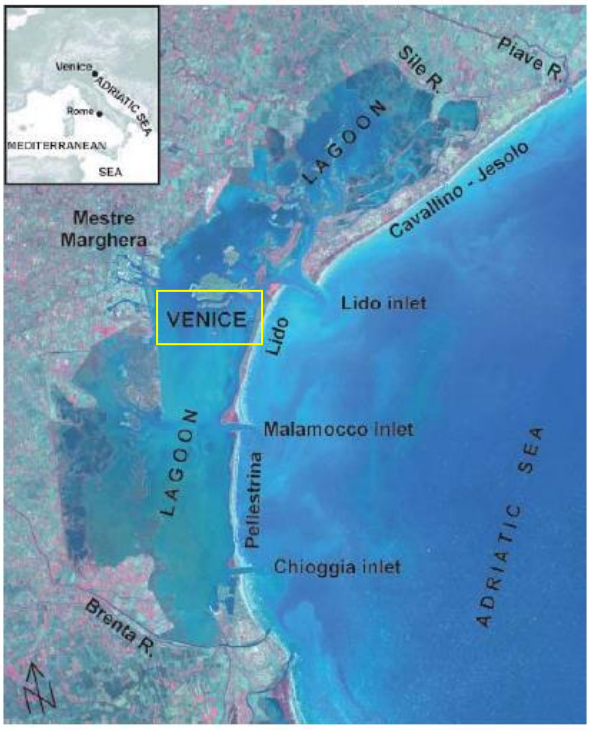


図 2　ヴェネツィア・ラグーンの ASTER 画像
(Brambati ほか、 2003)

写真 2　サン・マルコ大鐘楼より東方を望む
手前の細長い島はジュデッカ島。中世にはユダヤ商人が多く居住していた。現在は有名人の別荘地ともなっており、イギリスの歌手エルトン・ジョン氏の別荘もあるとのこと。はるか沖合にみえる陸地はラグーンを画するリド島。

このラグーンを構成するのは厚さ 1000m 以上にも及ぶ未固結堆積物であり粘性土や泥炭も含まれる、北西に広がるポー平野から運搬されてきた堆積物がデルタを形成し、それが沈下して現在のラグーンを形成している(図 3)。自然現象として第四紀の間に 0。5-3mm/年の速さで沈降した。ラグーンは 6-7 千年前から形成されていた。

ヴェネツィア市民を悩ませているのが地盤沈下に伴う浸水被害である。Brambati ほか(2003)によれば、1950 年から 1970 年にかけての過剰揚水により自然沈下の倍以上の速さで地盤沈下が進行して問題化した。その後揚水制限がなされて中央部では収まったが、北部や南部では現在も沈下が続いている。大潮時にはサン・マルコ広場も浸水し、現地では毎朝スマートフォンの浸水アプリで浸水情報を確認してから出勤するのが普通とのこと(現地ガイドのシルバーノさん)。サン・マルコ広場で不同沈下が見受けられたほか、船着き場で満潮時の水位を見ると 50 ㎝程度しか余裕がなく、大潮時には冠水すると推測された(写真 3)。

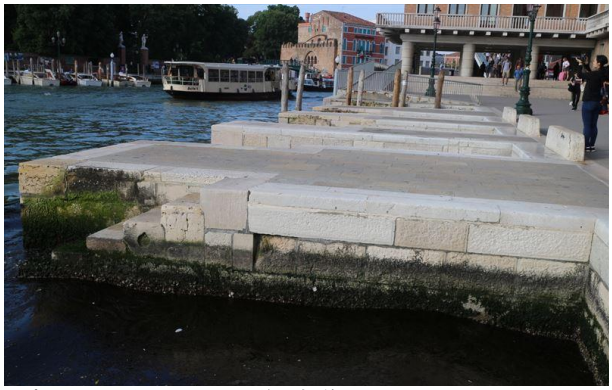


写真 3　サンタ・ルチア駅前の船着場
満潮時には 50 ㎝程度しか余裕がない。右端の人物は工藤さん。カメラガール。

4. ローマの古代コンクリート

ローマの建造物にコンクリートが使われていることは以前から学会誌やテレビ番組で観て知っていたが、実物を見ることができた(写真 4、5、6)。古代ローマ人は石灰岩の粉と火山灰(筆者注：凝灰岩であろう)を混ぜてモルタルを作り、さらにレンガ片や土器片、火山岩を骨材として使用していた(久田、2013)。現在のコンクリートはバインダーとしてカルシウムを使用しているが、古代ローマのそれはアルミニウムがバインダーとなっているために、2 千年もの長期にわたり耐久しているとされている(ウィキペディア)。

写真 4　フォロ・ロマーノ・パラティーノの丘のレンガ建築物
板状のレンガの間に古代のコンクリート（モルタル）が使用されている（写真 7）。奥に見える樹木は地中海松。

写真 5　古代コンクリート
黄土色の板状レンガの内側に、コンクリートが露出している。骨材として赤いレンガ片、緑色岩、黒色のガラス片（？）が見える。

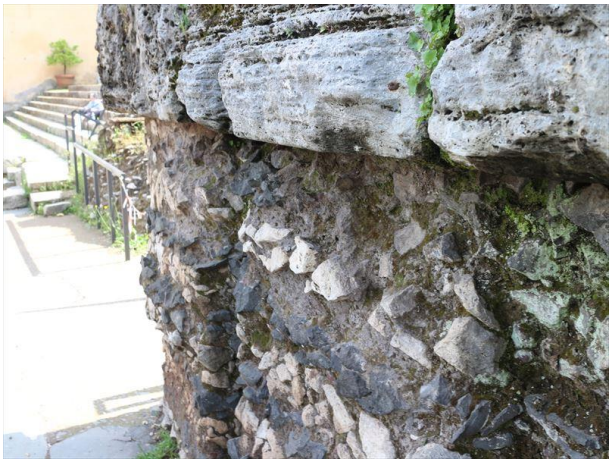


写真 6　フォロ・ロマーノ　ティトスの凱旋門の基礎部
古代コンクリートが露出している。もともと石積か何かで囲われていたと推測される。

5. 石材

石の文化と言われているヨーロッパの建造物に使用されている石材としてどのような石が使われているか興味があり、今回の訪問で各都市の歴史的建造物や宿泊したホテルの壁や床を気をつけて見た。その結果、建造物により異なるが多いのは石灰岩(写真 7)、大理石(写真 8)、砂岩(写真 9)で、火山岩(海底火山の溶岩や凝灰岩)や蛇紋岩も用いられていることがわかった。ローマのコロッセオではトラバーチン(石灰華)も多く使われている(写真 10)。ミケランジェロによるダヴィデ像など彫刻で石材を用いているものは、見たところすべて大理石であった(写真 11)。大理石は生物遺骸が堆積してできた石灰岩が変成作用を受けて再結晶したものであり、構成鉱物は両者とも方解石(化学式 $CaCO_3$)である。方解石は鉱物としては比較的柔らかい(モースの硬度 3)ので加工しやすく、またイタリアに豊富に産出することも多く使われている理由であろう。

石材の色としては、白(大理石)、赤・桃色(石灰岩、大理石)、緑(火山岩、蛇紋岩)、黄色(砂岩)、黒(泥岩、石灰岩)などの色を使用できる。これらを巧みに用いているヴェネツィアのドゥカーレ宮(写真 12)やフィレンツェのドゥオモ(写真 13)、サン・ピエトロ大聖堂(写真 14)がある。

写真 7　ヴェネツィアのホテル浴室壁面の石灰岩藻類とその間隙を埋める石灰泥からなる。赤茶色。

写真 8　ヴェネツィア　リアルト橋　　大理石からなるアーチ橋。橋の下を通過しているのは水上バス。当地では、しばしば橋の上に建物が構築されている。アーチは強い。

写真 9　フィレンツェ　　メディチ・リッカルディ宮殿の壁面砂岩。表面は黄色、削られた部分は暗灰色。

写真 10　ローマ、コロッセオ　かつて多数あった入り口の一つローマ数字で XXXV(35)の刻印。トラバーチン。内部はレンガ造りだが、外壁はトラバーチンで化粧されている。現在はこのように化粧板が残っているのは一部のみである。乳白色。

写真 11　フィレンツェ、アカデミア美術館ダヴィデ像の足元大理石。緑色の縞模様(矢印)は恐らく凝灰岩層であったと思われる。

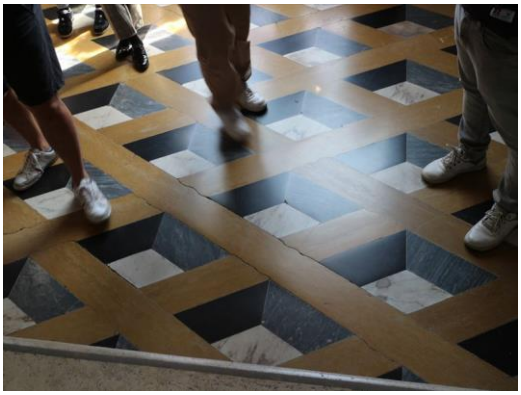


写真 12　ヴェネツィア　　ドゥカーレ宮の階段踊り場
見る角度により立体的に見える。黄色(天端に見える)は恐らく砂岩、緑(壁)は蛇紋岩、白(底)は大理石。

写真 13　フィレンツェ　ドゥオモ
白色の大理石、桃色の大理石、緑色の蛇紋岩（多分）が効果的に用いられている。屋根の赤色は素焼きの瓦。屋根の白色筋状の部分は大理石。皆で登楼した。

写真 14　ヴァチカン市国、サン・ピエトロ大聖堂の床
白（石灰岩またはトラバーチン）、赤（石灰岩）、緑（蛇紋岩）、黄（砂岩）。

6. おわりに

この研修旅行では、これまで見たことのない風景や建造物を間近に見ること、触れることができた。そして建物や生活様式など、文化が地形と地質に大きく影響されていることも確認できた。また古代、中世の建造物の大きさ、緻密さ、そして美しさには圧倒された。石材を利用するには木材よりもかなりの人手と高い測量技術、加工・建築技術が必要と思われる。日本では石器や鉄器を用いて原始的な生活をしていた同時期(縄文～弥生時代)に、イタリアでは道路、水道、浴場などの高い文明がすでに出来上がっていたことは、まことに驚きである。

一時「コンクリートから人へ」というフレーズが言われたが、当時、私はそのパロディとして「コンクリートから石へ」というフレーズを口にしたことがある。今回、石でできた耐久性の高い多くの建造物を目の当たりにし、自分の携わる斜面対策でもメンテナンス・フリーを意識した仕事をしていかねばと改めて感じた。

歴史と人々が織りなすイタリアの街並み

設計部　防災まちづくり課
安地　勝江　(2017 年入社)

1. はじめに

これまでも数回、海外へ旅行したことがあったが、ヨーロッパの国を訪ねるのは初めてだった。候補地の 3 ヶ国はどこも魅力的で行先を決めるのにとても苦労した。その中でも、一度はヴェネツィアを訪れたいという想いから希望したイタリアへ行くことができた。

今回の旅行では、3 都市の多くの観光名所を回ったためタイトなスケジュールだったが、それぞれの街の違った魅力を楽しむことができた。

2. ヴェネツィア

12 時間以上のフライトを経て最初にたどり付いたのはヴェネツィア。街全体が運河と入り組んだ路地で構成されている。車両の進入が規制されており主な交通手段は徒歩か水上タクシーなどの船となっている。

荷物の運送も船で行われていた

最初に訪れたサン・マルコ広場は、朝から大勢の観光客で賑わっていた。ヴェネツィアでは、秋から春にかけて「アクア・アルタ」と呼ばれる高潮現象により一体が水浸しになるそうだ。この現象は季節風等による水位上昇に満潮が重なることによって発生する。ガイドさんも潮位がすぐに分かるアプリを携帯に入れているそうで、アクア・アルタ発生時には通行のために踏み台が設置される。

広場にある鐘楼はもともと見張り台と灯台として建てられたが、1902 年に一度倒壊し、10 年後に見晴台として再建されている。鐘楼の頂上から見たヴェネツィアの色彩が統一された街並みと、運河や海の青色のコントラストはずっと眺めていたくなるような景色だった(口絵写真 1)。

サン・マルコ広場とドゥカーレ宮

ヴェネツィアでは、13 世紀頃から生産が始まったヴェネツィアングラスが特産品として有名である。火災による延焼と技術の流出を防ぐため、ガラス工房はすべてムラーノ島という島に集められたため「ムラーノグラス」とも呼ばれる。原料は、鉛を含まないソーダ石灰で、そこに様々な物を加えることによって様々な色合いを表現している。

ガラス工房で製作の様子を見学

午後からの自由時間はお土産を探しつつ、ヴェネツィアの街を散策した。路地を抜けた各所に広場では、飲食店のテラス席や階段などのちょっとした段差に座り込んでくつろいでいる人たちの姿が印象的だった。細い道が入り組んでいてすぐ迷ってしまう街並みにも関わらず、案内板はサン・マルコ広場など主要な場所の名前とその方向を示す矢印のみというシンプルなデザインだったことも興味深かった。

広場の様子

案内版は矢印と行先のみのシンプルなデザイン

また、店の看板は周りの景観に配慮された配色となっていた。建物の道路に面した窓のベランダには鉢植え等の植物が多く置かれていて、ゴンドラに乗る人や運河沿いを歩く観光客の目を楽しませてくれた。景観条例などの規制もあるだろうが、住民の意識の中にも街の雰囲気を大切にしている様子が伺えた。

景観に配慮された店の看板

ベランダに置かれた鉢植え

3. フィレンツェ

3 日目を過ごしたフィレンツェは「屋根のない美術館」と呼ばれており、イタリアの多くの美術品が集まっている。街の中心部は歴史地区として世界遺産に指定さており、多くの教会や美術館、聖堂などが集まっている。

アカデミア美術館のダヴィデ像やウフィツィ美術館の「春」、「ヴィーナス誕生」など誰でも一度は見たことがある作品を実際に鑑賞することができた。

アカデミア美術館のダヴィデ像
近くで見ると目がハートの形をしている

ボッティチェリの代表作「春」

ウフィツィ美術館はメディチ家所有の絵画や美術品を集めたことが始まりで 1765 年から一般公開が始まった。メディチ家が断絶した後もコレクションが残っているのは、アンナ・マリア・ルドヴィガという女性が「メディチ家がこれで収集した美術品をフィレンツェから持ち出さないこと」という条件で美術館を譲渡した経緯があるようだ。彼女のおかげで、今も数多くの美術品がフィレンツェに残っている。

フィレンツェで最も印象に残っているのは、何と言っても、414 段もの階段を上がった後のドゥオモからの景色。石の狭い螺旋階段は、いくら上っても景色が変わらず、閉塞感があった。頂上が近づくほど、勾配がきつくなったが、頂上から街並みを見ると一気に疲れがなくなった。見渡す限りのレンガ屋根の景色は圧巻だった。(口絵写真 6)一般の建物は高さが制限されているため、教会や聖堂の存在感が増し、統一感のある街並みになっていた。

ドゥオモは 1296 年に建築家カンビオが建築に着手し、ブルネッレスキらが約 140 年の月日をかけて完成した。屋根の部分は内側と外側にレンガを少しずつ積み上げていく足場のいらない二重構造方式が採用されている。しかし、7 年かけて制作された後、誰にも真似されないように設計図を燃やしたので、詳細は今も不明だそうだ。

フィレンツェや翌日訪れたローマでは、バイクや自転車がほとんど隙間なく停められている光景をよく目にした。車を出すときは、前後の車に当たりながら出していることに驚いた。

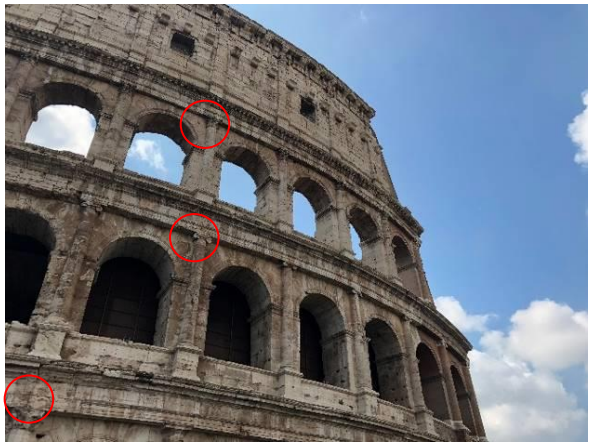
ほとんど隙間なく駐車されている車やバイク

4. ローマ

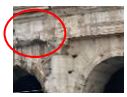
ローマで始めに訪れたのは、古代ローマの中枢として知られるフォロ・ロマーノ。バジリカと呼ばれる裁判所や商業取引に使われた公会堂や凱旋門、神殿などの建物が遺跡として残っている。

紀元 80 年に完成したコロッセオは格技場として完成した。コロッセオで行われていた催し物はすべての市民が無料で見られたそうだが、その背景には皇帝が市民からの人気を獲得し、社会問題から目をそらさせるためだったという説もある。

コロッセオの柱は階層によってその様式が異なっており、それぞれのアーチの中には一体ずつローマの英雄や神々の像が飾られている。



コロッセオと凱旋門

		
【1 段目】 装飾がほとんどなく、上の方に向かって徐々に細くなるドーリア式。	【2 段目】 柱頭に渦巻き模様の彫刻がついたイオニア式。	【3 段目】 柱頭にアンカサスの葉をモチーフにした彫刻のあるコリント式。

カトリック教会の総本山であり、世界一小さい独立国家としても知られるヴァチカン市国での観光のメインは、ミケランジェロが 5 年の歳月をかけ一人で完成させた、「最後の審判」の天井画。礼拝堂では撮影も私語も許されていないということで身構えながら入ったが、中は大勢の人のささやき声で意外と賑わっていた。

広場にある最後の審判の解説

大学生の頃に、海外の学生に日本文化を紹介する講義の一環として、高知県の土佐和紙について発表したことがある。その際に、土佐和紙の一種である典具帖紙がサスティーナ礼拝堂の「最後の審判」の修復作業に使用されたという話を思い出した。薄くて軽いにも関わらず丈夫な紙質と、本来使用する塩素を使わない製法で経年劣化を防ぐことができるという特性が、イタリアのみならず世界中の美術品の修復に重宝されているようだ。

最後の観光スポットとして訪れたトレヴィの泉では、またローマに来られることを願ってコインを投げた。(口絵写真 14)連日、足が棒になるほど歩き回ったイタリア旅行だったが、振り返ってみるとあっという間の 6 日間だった。

5. イタリアの街を見て

今回の旅行でイタリアの 3 つの街を訪ね、印象に残った点がいくつかある。

一つは、歴史的建造物や古くからの建物を活用し機能を加えることで、街並みを保存している様子が見受けられることである。また、世界的にも有名な観光地でありながら、地元住民の生活の場としても確立している。建物の改築に関する法規制などはもちろんあるだろうが、人々の意識の中にも文化や歴史を保存・修復するという思想が浸透しているように感じた。

また、帰国後に調べたところ、歴史的公園の再整備の際には、まちづくり関するコンペ案を街角に掲示し、市民だけでなく観光客が吟味するなどの手法をとっていることも分かった。より多くの人にまちづくりに関わってもらうことで、市民のみならず観光客にも愛着を持ってもらえるような街になるのではないだろうか。

もう一点は、どの町も車両の出入りが規制されていても、各観光名所を回れるようなコンパクトな街であることである。それぞれの街が小さなコミュニティの集まりで成り立っているような印象を受けた。特に、街の中の教会等を中心として広場が整備され、人々の滞留場所や商業活動の場としての役割を果たしているように感じた。歩いて回れる範囲に様々な機能が集約していることで、人々がコミュニケーションの場がそれぞれの街の様子に馴染んだ形で確保されているのではないかと思った。

6. おわりに

昨年に引き続き 2 回目の社員旅行への参加であったが、旅行を楽しむことはもちろん、街の様子などから自分が携わる業務に関連することに目が向くようになったと感じる。今後も、日頃の体験からも情報を収集することを心がけていきたい。

芸術を堪能する国イタリア

設計部　橋梁構造課
大和田　菊代　(1998 年入社)

1. はじめに

「創立 55 周年にヨーロッパ旅行に」とは右城社長が 5 年ほどにわたり私たち社員に語っていたことである。旅費や日程も国内旅行の比ではないのは当然である。本当に決行されるのかと半信半疑であったが、本年になり渡航先アンケートが始まった事をうけ突然現実味が沸いた。

数ある国の中からイタリアを選択したのは、聞きなじみのある観光地が多かったこととメディアで目にする美しい街並みを見たかったからである。

行程はヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ及びヴァチカン市国を一日ずつ訪れるというハードなものだった。

本報告では感動した各地の様子と芸術について少し触れてみようと思う。

2. 水と修復の都ヴェネツィア

まず到着したのが水の都ヴェネツィアである。早速憧れであったオレンジ色のレンガ屋根の街並みを堪能できた。

ヴェネツィアはアドリア海の奥に位置する島々からなる運河都市であり、共和国時代の建造物が数多く残っており至る所で修復が行われている。

車も鉄道も、本土から繋がる 3850 メートルもの橋長のリベルタ橋のたもと、サンタ・ルチア駅付近までしか走行できず、その先の移動は船か徒歩である。移動手段である船も、波による歴史的建築物の劣化を防ぐため時速 5～7 キロ以内という制限がある。そのためか人通りは多いものの早く動くものが無く、街中がゆったりとした雰囲気であった。

石畳の街路も船が行き交う水路も大小様々で、入り組んでは分かれ迷路の様になっており、地図を確認しながら歩いているにも関わらず現在地がわからなくなる。

以前「ベニスに死す」という映画を観たことがあったが、その舞台は砂浜が美しいホテルであった。今回は砂浜を目にしなかったので確認してみると、その舞台は映画祭で有名なリド島という南に位置する大きめの島で、リゾートホテルが立ち並び観光者も比較的少なくゆったり出来る所だという。将来もう一度ヴェネツィアに訪れることができるならリド島に滞在してみたい。

サン・マルコ寺院は聖マルコに捧げられた聖堂であり、外壁にも聖マルコに関するモザイク画が並ぶ。内部は金のモザイクで飾られており薄暗い教会内で静かに光っていた。モザイクのひとつひとつは 5 ミリメートル四方という小さなサイズであり、補修をするとなると膨大な日数と手間と根気が必要だそうだ。

共和国時代の総督邸兼政庁であったドゥカーレ宮殿内は美術館として公開されており、大評議会の間の壁一面を使った「天国」は世界最大の油絵である。絵画だけでなく壁や天井の装飾の煌びやかな細工と豪華さに圧倒される。このような日本の芸術ではあまり馴染みのない豪奢な作品の連続に、この後の行程も常に驚かされ続けることとなる。

写真 2-1 ドゥカーレ宮殿　大評議会の間　油絵「天国」

3. ルネッサンスの芸術の街フィレンツェ

赤い電車に乗りヴェネツィアからフィレンツェへ。線路沿いには大きな町も無くのどかな風景が続いた。

フィレンツェの中心部は歴史地区として世界遺産登録されており、そこかしこに彫刻や大理石積の建造物が見られ圧巻だった。石畳の町中には馬車が走りすぐ横をすれ違う。芸術の街とはこのような事かと感慨をうけた。

最も有名な彫刻作品の一つであるミケランジェロ作の「ダヴィデ像」は美術学校所有のアカデミア美術館にあった。高さは台座を含めると 5.17 メートルもあり、広い展示室の端からでもかなりの存在感である。足元まで近づくと真上を見上げる事になる。360 度閲覧できるので初めて背中側から見たダヴィデ像を知ることができた。

ウッフィッツィ美術館は、フィレンツェの支配者であったメディチ家の美術コレクションを収蔵した美術館であり、誰もが知るような名画の宝庫だ。

入館して早々にボッティチェッリの「春」や「ヴィーナスの誕生」が現れて度肝を抜かれた。両作とも横 3 メートルほどもある大作であったことを知った。かなり近くで見ることもでき、そこにある存在感に私はおそらく今までの人生で一番感動した。

ある程度絵画が好きな人なら一日中鑑賞できる美術品ばかりかと思うが、残念な事に駆け足になってしまった。ピッティ宮殿からこの美術館に繋がるベッキオ橋の上に作られたヴァザーリの回廊の中も見てみたい。

4. 古代帝国が覗く首都ローマ

フィレンツェから電車に乗り首都のローマへ。観光地の色が濃かった先の 2 都市と比べ、生活の雑踏に溢れている。中型トラックやバイクも多い。そして壁の落書きも多い。歴史を感じる建物だけでなく、少し落ち着いた外観のマンションも立ち並んでいた。

写真 4-1 テルミニ駅周辺の雑踏

そうかと思うと車で数分の距離に、古代ローマ時代の遺跡である闘技場「コロッセオ」や政治や宗教の中心地であった遺跡「フォロ・ロマーノ」が出現する。これは東京でいう明治神宮や皇居のような都会の中に一線を画す存在と同じかもしれない。

写真 4-2 は発掘された遺跡フォロ・ロマーノであるが、写っている建造物はすべて地中に埋まっていたものである。遺跡は崩れた姿のものが多いが、中にはアンカーのようなもので補強されているものもあった。

コロッセオは無筋コンクリート作りである。地震も起こるこの地で崩れずに残っているのは不思議であるが、円形の構造全体が上手く設計されて強い建造物となっているようだ。コロッセオのように 1900 年以上前の建築物が現在も健在し、直接触れる事が出来るとは凄いことである。

写真 4-2 ローマ帝国の遺跡フォロ・ロマーノ

さて、イタリアでは石畳の道路面が多く見られ、車も走っている。表面が瓦のようにツルツルした正方形の石が敷き詰められているようだが、割れていたり陥没してうねっている箇所もよく見られた。写真 4-3 の様に清掃車での掃除や敷直しが頻繁に必要なのかもしれない。トンネルの中ではライトが反射して少しまぶしい(写真 4-4)。景観と合っており石畳文化ではあるが、少し危険かもしれないと思った。

写真 4-3 フロントでブラシが回転している清掃車、左のほうでは石畳を剥がして工事中

写真 4-4　トンネル内

5. 独立国家ヴァチカン市国

カトリック教会の中心地であるヴァチカン市国に入った。サン・ピエトロ広場とその回廊、それに連なる大聖堂とヴァチカン宮殿、システィーナ礼拝堂、それらすべてが美しく整えられていると感じた。

美術品の量も膨大で天井も壁も全てに装飾が施されており、その情報量の中で溺れてしまう様な錯覚を覚えたほどである。

システィーナ礼拝堂のフレスコ画、天井画の「創世記」と壁画の「最後の審判」はただただ圧巻であった。

ヴァチカン市国周辺にはテヴェレ川が流れ、川に沿って今は博物館のサンタンジェロ城や最高裁判所が並んでいる。その建物へ続く橋はどれもデザインが細かく、高欄には大きな彫刻が配置されていた。設計には彫刻部分も含んでいるのだからとても贅沢な橋である。

写真 5-1 テヴェレ川に架かる橋

6. ミケランジェロという万能人

道中ミケランジェロ・ブオナローティの作品と名前に触れる事が多かった。彼はフィレンツェでのダヴィデ像に始まり、壁画の最後の審判やサン・ピエトロ大聖堂の設計等様々な分野に優れた作品を残しており「万能の人」と呼ばれている。

13 歳で弟子入りをしたミケランジェロはすぐに師匠に認められ、20 歳代には「ピエタ」や「ダヴィデ像」を生み出し彫刻家としての評価を揺るがないものにしている。

30 歳代に 4 年かけてシスティーナ礼拝堂の天井画を、晩年の 60 歳代には同壁画を 6 年以上費やし作成する。何年もかけ同じ場所に一つのものを描き続ける精神力も凄いが、天井画は足場に上がり直接彩色するのだから描く体勢も辛そうである。

建設部門では 40 歳代にサン・ロレンツォ教会のファサード(建物の正面)の設計を受けたのが最初だと言われているが、設計はしたものの現在も完成していない。メディチ家礼拝堂も完成を見ずにミケランジェロはフィレンツェを去っており、不安定な政治状況に振り回されながら拠点をローマ等に移したようである。そして常に時の有力者から発注があり、沢山の作品を作り続けながら 88 歳で亡くなっている。

彼の作品で私が最も目を奪われたのは、サン・ピエトロ大聖堂の「ピエタ」である。彫刻に詳しくはないが、とても石とは思えない滑らかな質感や細密な造形はとてつもなく凄いものだと感じ、何より美しい。ミケランジェロは 23 歳から 25 歳の 2 年間ほどでこの作品を生み出したという。

写真 6-1 ミケランジェロ作　「ピエタ」

7. さいごに

ここまで書いてきたが、実際の感動をうまく言葉にすることが出来ず大変歯がゆく思う。

この短期間に芸術界の傑作や古代の遺跡、歴史が詰まった土地や建造物に沢山ふれた。習っただけだった異文化は、直接出会うと考えていたよりも凄かった。どれも凄いので私の脳内は完全に容量超過してしまっている。帰国から 1 週間過ぎた今もどこか夢うつつな日常を過ごしているが、今回の旅は私の心に大きな影響力を与えたと思う。

Ciao！イタリア

設計部道路交通課　係長
齋藤　啓太　(2004 年入社)

1. はじめに

今回のイタリア旅行が、ハワイ、グアムに続く 3 度目の海外旅行である。

イタリアへの旅立ちが日に日に近づくにつれ、期待のあまり胃痛がした。まるで遠足前日の小学生になった気分である。

過去の海外旅行での反省を踏まえて、大きなスーツケースを準備した。中には衣類と溢れんばかりの期待を詰め込んだ。

2. 1 日目　～いざイタリアへ～

高知龍馬空港から羽田、フランクフルトを経由してヴェネツィアへと向かった。

羽田からフランクフルトまでは、シベリア上空を通過した。眼下には白銀の世界が広がっていた。

フランクフルト近郊になると、民家、農地、道路が見えた。上空から同じような様式の民家が並ぶ風景を眺めると、おもちゃのようであった。高速道路のインターチェンジを上空から一望すると、やはり美しいものである。

現地時間の深夜 1 時にヴェネツィアのホテルに到着した。イタリアに着いたばかりだが、帰路のことを考えると気が重かった。

夕食は機内食を食べていたが空腹であった。チェックイン後、数人でホテル近くの飲食店に行った。ここでは、片言の英語でビールとピザを注文した。本場イタリアのピザを食べ、翌日からのイタリア観光に備えた。

写真 2-1 白銀の世界シベリア

写真 2-2 美しい形状のインターチェンジ

写真 2-3 ピザとビールと仲間と

3. 2 日目　～水の都ヴェネツィア～

時差ぼけのためか予定より早く目覚めたため、早朝のヴェネツィアを散歩した。6 時頃であり、通行人はまばらであったが、船の往来はすでに始まっていた。

ヴェネツィアの通行手段は、徒歩と船だけである。車や自転車は利用が禁止されており、船が最も身近な乗り物である。救急車の代わりに救急船がある。

写真 3-1 早朝のヴェネツィア

大鐘楼の展望デッキからは、ヴェネツィアの街並みが一望できた。海・川・街そして綺麗な青空の眺望は、一見の価値がある(口絵写真 1)。

ドゥカーレ宮殿の天井にある油絵のいくつかはオリジナルのものではない。ガイドさんによると、過去にフランス人に盗まれたようである。イタリアとフランスは美術品等について、盗った盗られたの関係があり、仲が悪いそうである。2006 年のサッカーW杯決勝戦はイタリア対フランスであった。激闘の末、イタリアが優勝した時は、いつにもまして国中が盛り上がったそうである。

ゴンドラクルーズは生演奏つきであった。目の前で数曲を歌っていただき、疲れた体に活力がみなぎった。歌い手、演奏者ともに、イタリアの伊達男という雰囲気であった。年を重ねる度に男性としての魅力が増していくように感じた。私もこのようになれるだろうか…。

昼食後は自由行動であった。水上タクシーのフリーパスがあったが、散策もかねて、徒歩でホテルまで帰ることにした。地元の方が利用されるスーパーで、チョコやパスタ等のお土産を購入した。なかでもパスタ等の乾麺類は格安であり、500g で約 70 円と日本の 1/4 程度の価格であった。この程度の金額でないと、主食として成り立たないのであろう。

散策中、工事現場を見かけた。工事車両も通行禁止であるため、人力によるものであった。石畳を外してからの作業となるため、時間を要しそうである。日本と比べると、随分軽装であった。

写真 3-2 ドゥカーレ宮殿の天井

写真 3-3 伊達男と共にゴンドラクルーズ

写真 3-4 国内最大のスーパーマーケットチェーン COOP

写真 3-5 オレンジが映える工事現場

4. 3 日目　～花の都フィレンツェ～

フィレンツェは町全体がユネスコ世界遺産に登録されている。

アカデミア美術館の代表作といえば、ダヴィデ像である。等身大程度の大きさかと思っていたが、実物は 5m 以上あった。百聞は一見にしかずである。1500 年代に制作されたもので、男性の肉体美が見て感じ取れた。活発に運動していた頃の私を彷彿させる。これから夏に向けて、もう一度このような肉体美を取り戻そうか…。

写真 4-1 意外と大きいダヴィデ像

ドゥオモは高さ 92m で 464 段の階段を登って展望デッキへ行く。登るにつれて勾配がきつくなり、運動不足の私にとっては非常に酷であった。しかし、展望デッキでの眺望と時折吹く心地よい風を体に受けると、登った甲斐がある。

ドゥオモの横には、高さ 82m のジョットの鐘楼がある。これは 1387 年に完成している。見学中は真横に高所作業車が停まっていた。維持点検のためであろうか。年齢差が 600 歳以上はある建築物と車両のツーショットは、なんだか不思議なマッチングである。

ウフィツィ美術館の代表作といえば、ヴィーナスの誕生や春である。学校の教科書でよく拝見した。これらの絵画は非常に緻密に描かれていた。また、一枚の絵の中に多くの意味をもって描かれているとのことであり、意味を理解したうえで絵を見ると、一段とこの絵のすばらしさを実感する(口絵写真 7)。

美術館の見学後は少しの自由時間があった。この時間は妻に頼まれていた IL BISONTE(イルビゾンテ)の革財布を買いに走った。帰国日の 5 月 12 日は結婚 10 周年にあたるため、妻への良いプレゼントが買えて安堵した。店舗には日本人スタッフもいることから安心である。

写真 4-2 ドゥオモの展望デッキにて

写真 4-3 ドゥオモと高所作業車

写真 4-4 店内に革の匂いがするイルビゾンテ

5. 4日目　～永遠の都ローマ～

ローマに入って、まず感じたことは意外にも汚いことである。道路にはゴミが散乱しており、建物の壁には落書きが多い。私には落書きに見えても、ローマの人からするとアートなのであろうか。

ヨーロッパ諸国は無電柱化率が100%に近く、このローマでも電柱を見かけることはなかった。古き良き建造物が多いため、景観保全を重視しているようである。驚いたことに、電柱の代替として、路面電車の架線は近隣の建物に直接固定されていた。景観に配慮してか、車道や歩道は石畳が多く用いられていた。確かに美しいが、その反面、車椅子利用者等の身体障害者にとっては、支障が大きいと感じた。

コロッセオの見学は、人気スポットであるため、入場するのに1時間以上を要した。コロッセオは西暦80年に完成している。日本ではヤマトタケルが活躍していた時代である。あまりにも古い時代であるため、現実味がない。タイムスリップに陥ったようになる。これほどの規模の建築物を造った古代ローマ人の技術力はすごいの一言である。1900年以上前の建造物が、このように現存していることに驚いた。所々で見受けられた維持補修工事のおかげであろう。

世界最小の国家であるヴァチカン市国には、カトリックの総本山であるサン・ピエトロ大聖堂がある。聖堂内は豪華絢爛であるが、どこか落ち着く雰囲気もあった。この柱の形状や天井の高さ、太陽光の差し込みなど調和がとれた構造となっているためであろうか。今回の旅行でいくつかの聖堂を見て回ったが、サン・ピエトロ大聖堂が一番神秘的であった。

夕食後、数人でホテル近くの飲食店に行った。ここでは念願であったカルボナーラを食べることができた。今夜がイタリア最後の夜かと思うと寂しくなった。

写真 5-1 路面電車の架線状況

写真 5-2 圧巻のコロッセオ

写真 5-3 神秘的なサン・ピエトロ大聖堂

写真 5-4 イタリア最後の晩餐

6. 5、6 日目～ふるさと高知へ～

昨日に引き続きローマ観光をした後、日本 高知への帰路となる。

トレヴィの泉は、コインを噴水の中に投げると願いが叶うという伝説は有名である。願いの内容は 3 つあり、その願いに応じて、投げるコインの枚数が異なる。私は、ローマに再び来ることができるという願いを込めて、コイン 1 枚を投げた。慣れない投げ方で、泉を越えるくらい力一杯投げたため、首、肩、背中を痛めた。やり過ぎはよくないと痛感した。

トレヴィの泉の近くにはジェラート店があった。イタリアのジェラートは美味しいと聞いていたため、最後に食べることができた。確かに美味しい。早い・安い・美味いと三拍子揃った店であった(口絵写真 15)。

ローマからミュンヘン、羽田を経由して高知龍馬空港へ帰った。往路と同程度の所要時間であったが、機内ではイタリアでの思い出を夢見ながら熟睡していた。参加者全員がスリの被害に遭わなかったことは幸いである。

写真 6-1 トレヴィの泉を背に山本親睦会長と

7. おわりに

イタリアに到着した時は、その所要時間から金輪際行くことはないと思っていたが、旅行を終えてみるともう一度行きたいと思わさせてくれる国であった。

イタリア語で一つだけ確実に覚えた単語がる。おはよう・こんにちは・さようならを意味する「Ciao(チャオ)」である。いつかまたこのイタリアで「Ciao！」と言える日が来ることを夢見る。

また明日から高知 日本のインフラ整備のために尽力しよう。

初めてづくしの海外旅行

設計部　道路交通課
澤田　亜由美　(2018 年入社)

8. はじめに

旅行の一番の目的は観光でした。私は海外旅行の経験がなく、歴史的建造物や美術館を巡ることで文化の違い等を感じることを楽しみにしていました。

本レポートでは、この観光地を巡り、触れた文化への感想と、その過程で気づいた日本との交通事情の違いについて述べていきます。

9. ヴェネツィア

観光 1 日目は水の都と呼ばれるヴェネツィアでした。その名の通り水に囲まれた街でホテルに向かう時にも水上タクシーでした。その街並はとても美しく、初めて見る光景に始終圧倒されました。全ての建物は高くて大きく、色は主に白や薄茶色で統一されたような感じです。街というより、テーマパークに来ているような感覚で、ここで生活している人々の暮らしが見えにくいくらい私にとっては非日常的な空間に感じました。

初めての海外の街並

名所にも数カ所回り、特に印象的だったのは大鐘楼です。エレベータで昇ったのですがドアが開いた瞬間の感動は忘れられません。そこにはヴェネツィアの街並が一望できる景色が広がっていました。屋根の色はレンガで統一され、運河も見えました。高い場所でよく風が通ってとても気持ちよかったです(口絵写真 1)。

ドゥカーレ宮では外観ももちろんですが中に入ったときの天井画の迫力に驚きました。天井一面に絵が描かれ、まるで宝石箱の中にいるようでした(口絵写真 3)。

ヴェネツィアで一番楽しく印象に残っているのはゴンドラクルーズです。かつては市場からそれぞれの館へ品物を運ぶ手段だったというゴンドラですが、現在は移動手段ではなく、旅行客が船上からの眺めを楽しむアトラクションの一種となっているそうです。黒いボディのゴンドラに 6 人で乗り込んでクルージング開始。乗り込む

際、ゴンドラを漕いでくれる男性に「バランスが大事だから座っている場所から動かないでね」と英語で言われました。座っている位置が少しでもずれるとバランスが乱れ、操縦しにくいようです。

ゴンドラからの景色

ゴンドラに乗り込むと水との距離が思ったより近く驚きました。ヴェネツィアの街中をゆったりとしたスピードで建物の間をすり抜けるというような感じで進んで行きました。途中、前後のゴンドラと一緒に歌を歌ってくれたりしてとても楽しく、とても贅沢な時間でした。イタリア旅行の中で一番の思い出です。移動や運搬手段が全て船やボートなのでとても多くの数が停泊していて、その光景も圧巻でした。

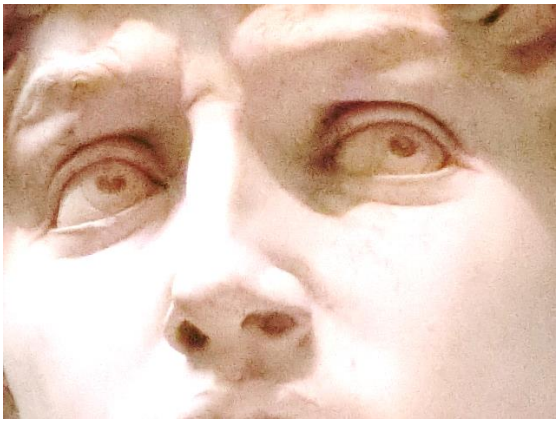
街中を走る沢山のボート

10. フィレンツェ

観光 2 日目は、シンクの列車「イタロ」で約 2 時間かけてフィレンツェに向かいました。フィレンツェに到着して一番始めに感じたことは車が多いことです。それと同時にヴェネツィアには車が一切いなかったことにようやく気づきました。車やバイクは禁止されているようです。車がいるかいないかで街の印象がだいぶ違って見えます。

ヴェネツィアにはいない大型バス

アカデミア美術館では、かの有名な「ダヴィデ像」を見ることができました。想像していたものよりも大きく、高さは台座を含めると 5m 以上あるそうです。作ったのは彫刻家で画家のミケランジェロ・ブオナローティ。1504 年に 29 歳という若さで作品を完成させたそうです。まるで石とは思えないくらいで、特に感動したのは筋肉、血管などの細部まで表現されているところです。また、像をグルッと一周して見られたのも感動しました。石なのに人間の体の柔らかみも感じられる、その技術に驚きました。現地のガイドさんに教えて頂いたのですが、ダヴィデ像の瞳はハートに掘られているそうです。しかし私には少し違和感がありました。勇ましい姿、表情をしているのになぜ瞳がハートマークなのか。気になったので調べてみると、この当時はまだハートが愛を表すマークとしては使われておらず、それは戦いに向かう、みなぎる闘志を表現するために瞳に差し込む光を彫り込んだものだそうです。瞳の中にまで感情や情景を表していることに驚き、とても感動しました。



ダヴィデ像のハートの瞳

この日の夕食は T ボーンステーキでした。イタリアで食べた料理の中で一番インパクトがあっておいしかったです。お肉の味がしっかりしていて感動しました。ナイフとフォークで切り分けて食べたのですが、日本ではなかなか食べることができないのではないでしょうか。

大きく食べ応えがあったＴボーンステーキ

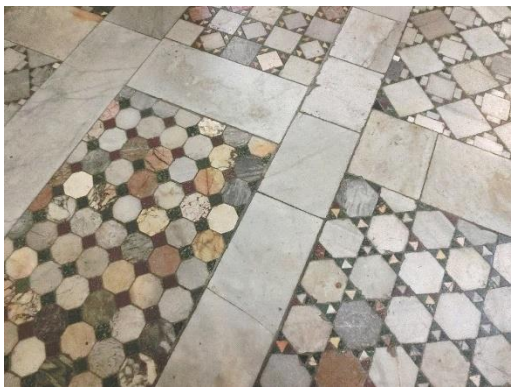
11. ローマ

観光 3 日目は、フレッチャアルジェントという列車に乗り、約 1 時間半かけてローマへ。コロッセオを見学に行きましたが大迫力でした。今から約 2000 年前に造られたなんて驚きです。しかしここでは年間数千人もの剣闘士が命を落としていたとのことです。当時のローマ市民にとって一番の娯楽はコロッセオでの刺激的な見世物、つまりそこで起こる流血や死だったそうです。その事実を知り衝撃を受け、ただその建造物を目で見るだけではなくその歴史とともに学ばなくてはいけないと感じました(口絵写真 9)。

サンタ・マリア・イン・コスメディアン教会にある真実の口。これは元々、マンホールだったと現地のガイドさんがおっしゃっていて驚きでした(口絵写真 11)。

教会の中に入ると大きな絵画とともに奉られていた骸骨があり驚きました。この方は日本でもおなじみの「バレンタイン」さんだそうです。しかしそれと同じくらい驚いたのは床の美しさです。これは大理石のモザイクで造られており、様々な形や色、配置が繊細で、とても美しかったです。しかも凹凸などもなく、滑らかで歩きやすかったです。この教会に限らず、他に見学した教会の床もこのようなモザイクの大理石で施されているのが多く、私は天井などよりも床を見ていることが楽しかったです。

バレンタインの骸骨



色合いが美しい教会の床

帰国日の午前中にはトレヴィの泉にも行きました。コインを投げ入れるとローマ再訪が叶うという言い伝えは事前に知っていましたが、コイン枚数によって意味が違ってくるというのは初めて知りました。ちなみに 2 枚では好きな人に気持ちが伝わる(一緒にいられる)、3 枚では腐れ縁が切れるのだそうです。投げ方は泉を背にし、右手にコインを持ち、左の肩越しに投げると教わりました。実際に私も投げてきて、すぐに振り返ったのできれいに泉に入っていくところを見られたのでよかったです(口絵写真 14)。

トレヴィの泉の隣にあった、BAR TREVI というお店で念願のジェラートを食べました。沢山の種類がありかなり迷いましたが、ピスタチオ・チョコレート・ラムレーズンの 3 つを選びました。ねっとりとなめらかな食感で味が濃くとてもおいしかったです。旅行の目的の一つだったので良い旅の締めくくりになりました。

多種類の本場ジェラート

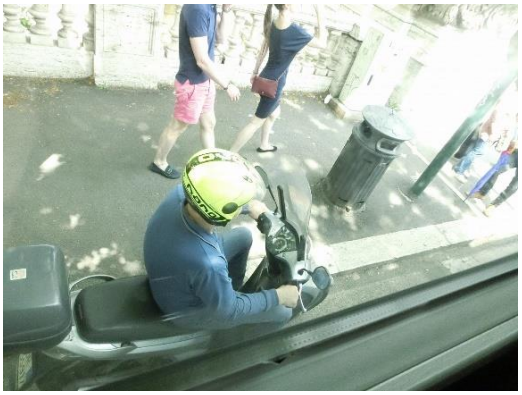
12. イタリアの交通事情

イタリアを旅していてフィレンツェ・ローマでは車やバイクが多く、交通事情がいくつか気になりました。一番驚いたことは路上での縦列駐車の多さです。しかも車同士の前後の間隔がほぼないのです。調べてみると、歴史的建造物が多い国なので駐車スペースの為に建物を壊すということができず、その結果このような路上での駐車が多いとのことでした。ではどのように狭いスペースに駐車するかというと、なんと前後の車にぶつけながら入れるそうです。日本では考えられませんが、向こうではこの光景が至る所で見られました。

10 センチほども隙間がない縦列駐車

初めて見た馬車

また、ローマなどでは歩行者信号がないところを行き交う車に注意しながら渡ったり、私達が乗っているバスの横スレスレを通っているバイクがいたりなどヒヤリとする場面も多々ありました。



バスの窓のすぐそこにバイクが

これらを見ると、日本の交通ルールやマナー、道路はしっかりしていて安全なのだと感じました。

また、このようなものも見かけました。車両進入禁止の標識ですがアートにされてしまっているようです。おしゃれな街には馴染んでいましたが、標識とは認識しづらかったです。

イタズラされた標識

街中では馬車が走っていました。観光に使用するようです。馬が興奮しないように目にカバーがされており、あまり周りの状況が見えないようにしていました。

道路は石畳が多く、ガタガタしていたり所々で穴が開いていたりと歩きにくいところもありました。女性はハイヒールなどではうまく歩けないのではないでしょうか。

13. 最後に

今回はいろいろと初めてづくしの旅でした。旅行自体普段あまり行く機会がなく、しかも初海外ということで緊張と不安が入り交じった気持ちの方が強かったのですが、集合の龍馬空港で皆さんの顔を見たときに気持ちがスッと楽になり安心し、心強い気持ちで旅行に出発することができました。

旅行期間中は一日一日がとても刺激的で充実していました。同じ地球上なのにこんなにも文化や特徴、構造物が違っていて驚き、イタリアと日本で同じだったことは空が青かったことしか分からないくらいでした。

そしてなにより大きなトラブルや事故に遭うこともなく、参加者全員が無事に帰国できたことが良かったです。私の人生の中でこんなにも素敵で貴重な体験ができると思っていなかったので、今回受けた刺激や経験を忘れず、もっといろいろなことに視野を広げ、チャレンジし、仕事にも励んでいきたいと思います。

ヴェネツィアでの記念撮影

2018 年 5 月 14 日(月)～19 日(土)

フランス

初めてのフランス旅行

設計部　統括部長
西川　徹　(2011 年入社)

1. はじめに

今年のヨーロッパ社内研修旅行の行き先であるが、私は迷わずフランスを選んだ。その理由は、長男が昨年数ヶ月にわたりフランスで料理研修に行っていたこともあり、彼がどのような地で過ごしていたのかを肌で感じたいと思ったからである。

公私共々、ハワイや東南アジアを主体とした国々はよく旅行するのであるが、ヨーロッパは初めてであり、今回のフランス旅行はとても楽しみにしていた。

本文は、この旅行での出来事や感想について、①パリ市街地、②フランス北西部地方、③芸術文化、④食文化についてとりまとめた旅行記である。

写真 1　パリの町並みと車の渋滞

2. パリ市街地

(1)　パリ市街地の劣悪な道路事情

フランスの地勢は、国土面積 55 万 km2、人口 6,600 万人、GDP25,830 億ドルである。この値を日本と比較すると、国土面積 1.45 倍、人口 0.51 倍、GDP0.53 倍となる。したがって、広大な国土でのんびりと生活するフランス人をイメージしていた。

しかし、パリ市街地は、古い建物が密集し、多くの渋滞と路上駐車で溢れかえっており、劣悪な道路事情となっていた。街中も地元住民と観光客で混雑しており、お世辞にも「住みたい！」とは言える街ではなかった。

(2)　エッフェル塔

エッフェル塔は、パリ万博に合わして 1889 年に完成した高さ 324m の鉄塔であり、現在も多くの観光客で賑わっている。建設当時は、その奇抜な外観から批判を受けていたようであるが、現在は鉄の貴婦人と呼ばれラジオ・テレビの電波塔としても利用されている。

エッフェル塔の 3 階(高さ 276m)からのパリの街並みは素晴らしいのであろうが、今回は時間が無く見れなかったことが悔やまれる。

(3)　エトワール凱旋門

この凱旋門は、「偉業をたたえ世界最大の門をつくれ」というナポレオンの命により、1806 年に着工し 1840 年に完成した高さ 50m の門である。

門の下にはフランス兵をまつった墓があり、多くの献花と追悼の炎が見られた。したがって、この凱旋門は日本の靖国神社的な役割も果たしているようである。

凱旋門回りのラウンドアバウト交差点内の交通状況は、インドネシアのような無法状態であり、もし私が運転して交差点内に入り込んでしまったら、抜け出せないほどであった。しかし、地元の方は慣れたもので、強引であるが阿吽の呼吸で譲り合いながら運転しており、不思議とクラクションの音は聞こえなかった。

写真 2　凱旋門の下にあるフランス兵の墓

3. フランス北西部地方

(1)　シャルトルのノートルダム大聖堂

この大聖堂は、1145 年から建て始め 1220 年に完成したものであり、ステンドグラスの美しさや堂内の荘厳さも素晴らしいものであった。

この尖塔の高さは 113m であるが、このような大規模な建築物を、日本の鎌倉時代に建築したその技術力の高

さは凄いものと思う。その原動力は、天にいる神に近づこうとする信仰心からなのであろうか。

しかし、大聖堂の回りや堂内は多くの観光客で賑わっており、このような環境下でミサなど祈りを行わなければいけない敬虔な信者が少し気の毒に思えた。

写真 3　多くの観光客の中でお祈りをする敬虔な信者

(2)　モン・サン・ミッシェルの修道院

パリからモン・サン・ミッシェルへのバスでの移動距離は 370km あり、その間は EU 最大の農業大国らしく小麦畑と酪農地が延々と続く単調な景色が続いた。

モン・サン・ミッシェルの修道院は、966 年に建築が始まり、増改築を重ねて 13 世紀にはほぼ現在の形になったそうである。

修道院からイギリス海峡を望むと、遙かかなたに地平線が広がる絶景に驚いた。しかし、これが満潮時には水平性に変わると思うと、まだまだ世界には凄い絶景があるのものだと思った。

修道院の内部は、長年の増改築により礼拝堂、食堂、回廊など様々な部屋が迷路のように配置されていた。

今回は、この絶景を望めるホテルに宿泊することができたので、夜間にライトアップされた荘厳な姿と、早朝の霧に隠れた幽玄な姿を望むことができたのは貴重な体験であった。

写真 4　満潮時には+15m の潮位となり海が押し寄せる

4. 文化芸術

(1)　ルーヴル美術館

ルーヴル美術館は、歴代フランス王の王宮殿を利用した世界最大の美術館であり博物館でもある。

今回、有名なモナ・リザ、ミロのヴィーナスをはじめとして全てのフロアの作品を見ることができた。しかし、あまりの作品数と広大な展示室のため、5 時間もの時間を要してしまった。しかも、観覧途中で現在位置が判らなくなり、恥ずかしくも迷子状態となってしまった。

もし、この建物が戦争の空襲などにより焼失してしまったら、人類の大損失になると確信できる貴重な遺産とその展示数であった。

また、館内は本物の美術作品を前に校外学習や模写の場としても利用されており、質の高い美術の学習を受けられることは羨ましく思えた。

写真 5　名画を前にした子供達の校外学習

(2)　オルセー美術館

オルセー美術館は、1900 年に鉄道の終着駅として建てられた駅舎をそのまま美術館として利用しているものである。ここでは、ルノワール、ミレー、ゴッホ、ピカソなどの絵画を鑑賞することができた。

ここも 0 階から 5 階まで、多くの絵画と彫像の展示数があり、鑑賞には 3 時間程度の時間を要した。

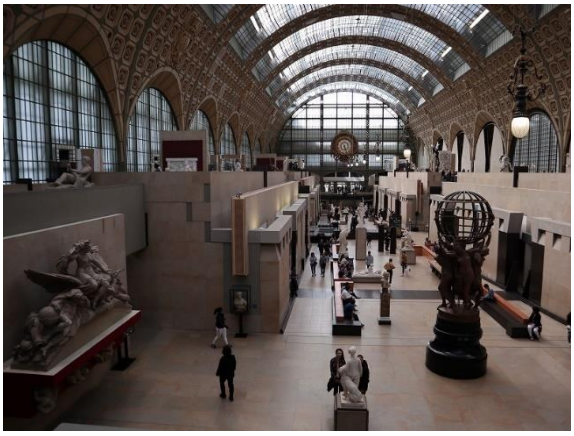


写真 6　鉄道の駅舎であったオルセー美術館

(3) オランジュリー美術館

オランジュリー美術館は、もともとはオレンジの温室だったが、1927 年モネの「睡蓮」の連作を収めるために美術館として整備されたものである。ここでは、モネの作品の他に、セザンヌ、ピカソ、ルノワールなどの有名な絵画を鑑賞することができた。

特にモネの作品は、事前にジヴェルニーのモネの庭園を訪れていたことから、実際の庭園と絵画が一致し、楽しく鑑賞できた。

ルーヴルやオルセーと比較するとコンパクトな美術館であるが、少ないながらも所蔵している絵画は著名なものが多いと感じた。鑑賞時間は 2 時間程度であった。

写真 7　クロード・モネの睡蓮の一作品

(4) ジャンヌ・ダルク

フランスの国民的英雄であるジャンヌ・ダルクの人生を知ったのは、1999 年に公開された映画「ジャンヌ・ダルク」である。この映画により彼女がその生涯で成し遂げたことに驚嘆し、憧れの思いを持ったものである。

今回、ルーヴル美術館でドミニク・アングルが描いたシャルル 7 世戴冠式のジャンヌ・ダルクと、ピラミッド広場でエマニュエル・フレミエの作のジャンヌ・ダルク騎馬像を拝見することができたことは、少年時代の憧れの女性に久しぶりの会うことができたような気持ちになれとても嬉しかった。騎馬像の前には今もなお多くの献花があり、フランスでのその人気の高さが伺えた。

写真 8　献花が絶えないジャンヌ・ダルク騎馬像

5. 食文化

今回の旅行では、いわゆる高級なフランス料理を食べることはなかったが、パリ近郊のレストランで一般的な料理を食べることができた。いずれも日本人である私の口に合うもので、美味しくいただくことができた。パリでいただいた牛肉とポテトの料理は、日本の肉ジャガの味にどこか似ていた。そして、見た目が可哀想なエスカルゴは、巻き貝のニンニクソース和えといったもので、美味しくいただいた。しかし、サーモン料理だけは、素材自体が良くないのか、少し残念な味であった。

なお、どこの店でもフランスパンをおかわり自由で食べることができ、それぞれの店で味や風味は異なるものの全て美味しかった。さすが、本場といった感じである。

フランスはワインのイメージが大きいが、自国をはじめとして近隣諸国であるベルビー、オランダ、ドイツなどの多くのビールがスーパーで売られていた。ビール党の私は、スーパーで様々なビールを買って夜な夜な試飲していた。この内、今回の旅行では、軽い飲み味のブラッスリー・クローネンブルグ社の 1664(通称：セーズ)に大変お世話になった。

写真 9　パリでの昼食（肉じゃがに似た料理）

6. おわりに

今回の旅行を通じて、フランス人の自国の伝統と文化に誇りを持ち、大切にする国民性に触れることができた。

このようなフランス人の愛国心を見てみると、様々な情報が溢れている世の中であるが、私自身が自分の住む国や地域の歴史・伝統・文化をどれだけ知り、愛着を持っているのか疑ってしまった。やはり、それを十分に理解し知識として蓄え、他人や他国の人々に自信と愛着を持って説明できるようになるべきであると思った。それが出来て初めて海外でのコミュニケーションや文化交流がとれるのであろうと理解することができた。

また、建物や車など古いものを大切にメインテナンスしながら利用し続けている様子を見ると、環境保全の観点からも大量生産・大量消費が当たり前となっている日本そして自分の意識改革が必要と感じた。まずは、自分の家、車、持ち物は適切に維持管理をし、長年利用できるようにしたいものである。

美しい街並みを大切にする街

設計部　部長
濱田　拓也　(1994 年入社)

1. はじめに

私が海外を訪れるのは 2013 年の台湾以来で、ヨーロッパへ行くのは初めてである。

一生に一度は行ってみたいと思っていたヨーロッパ。

私の班の行き先はフランスである。テレビでよく見るが、いったいどんな国なのだろう。

初めてのフランス旅行に胸を膨らませながら高知龍馬空港を出発した。

2. ノートルダム大聖堂

シャルトルのノートルダム大聖堂は異なる建築様式が使われている二つの塔、世界で最も美しいといわれる青いステンドグラス(シャルトルブルー)が有名である。

実際に見てみると、800 年前紀に建設されたものとは思えないくらい大規模でびっしりと彫刻が施された建物の外観に圧倒された(口絵写真 17)。

建物の中に入って見るとさらに驚きである。

目を見張るほど広い空間に、彫刻の施された柱と壁、壁には美しいステンドグラスが張り巡らされ(口絵写真 18)、非常に手の込んだ彫刻が並べられている。神々しく、天へ吸い寄せられるような錯覚さえ起こさせる。

当時の人々の技術の高さと、物作りへの強い思いに感心した。

3. モン・サン・ミッシェル

モン・サン・ミッシェルは、フランス北西部のブルターニュ半島とコタンタン半島に挟まれた湾の奥にある小島に、島を覆うように建てられた修道院。13 世紀ごろに現在の形になったとのこと。ここも世界遺産に登録されている。

近くで見るとまるで要塞。圧巻の姿である(口絵写真 19)。百年戦争の時に要塞として使われたというのもうなずける。さらにシャルトル大聖堂と同様に建物の内外に手の込んだ彫刻が施されている。物のない時代にこんな建物を作る昔の人の技術に本当に感心させられる。

見学を終えるとホテルに戻り夕食をとり、翌朝の写真撮影に備える。一泊でここに来た目的は、朝焼けのモン・サン・ミッシェルを見ることである。

朝目覚めて外に出るとあいにくの曇り空。太陽の照りつけるモン・サン・ミッシェルを見ることはできなかったものの、霧に包まれながら柔らかい太陽の光に照らされる幻想的な姿を見ることができた。

太陽が出て、数分するとモン・サン・ミッシェルは霧の中に隠れてしまった。

幻想的な姿のモン・サン・ミッシェル

4. クロード・モネの家と庭園

前日まで見た景色と全く違い、自然が多く豊かな緑に包まれておりとても美しい。

庭園に入ると、色とりどりの花が咲き乱れる庭園と、太鼓橋がある蓮池の庭園がある。この池がモネの代表作である「睡蓮」のモチーフになっているとのことである。

庭園内にある淡いピンクの建物はモネが暮らした家とのこと。中に入ると、当時のままのダイニング、キッチン、家具や、アトリエやモネの膨大な浮世絵コレクションを見学することができた。

モネが浮世絵に興味を持っていることは知らなかったため、ここで膨大な浮世絵コレクションを見たのは意外であった。

モネの暮らした家は当時のままの姿で残されていた

5. エトワール凱旋門

エトワール凱旋門はパリのシャルル・ド・ゴール広場(旧称エトワール広場)にある古代ローマの様式を模した凱旋門。高さ 50 メートル、幅 45 メートルの巨大な新古典主義建築の代表作である(口絵写真 27)。

凱旋門に着くと、まず周りの道路に唖然。横断歩道がないどころか、周りを凄い数の車が縦横無尽に走っている。どうやって道路を渡るか迷っていると、地下道を通って渡るようになっていた。本当に車が多く、走り方もめちゃくちゃで、日本人にはここでの運転は無理だと思った。

凱旋門を近くで見ると、大きくやはり細かな彫刻が施されていたが、前日までにシャトル大聖堂やモン・サン・ミッシェルの修道院を見ていたため思ったほどの感動はなかった。

6. エッフェル塔

エッフェル塔は 1889 年にパリ万博のために、建築技師のギュスターヴ・エッフェルにより建設された鉄塔で、パリ随一のランドマークとして有名。驚きなのが、2 年 2 ヵ月という驚異的に短い建設期間でつくられ、建設中に一人の死者もでていないということ。高さは 324m で東京タワーより少し低い。エッフェル塔を含むセーヌ川周辺は、世界遺産に登録されている。

エッフェル塔周辺も凱旋門周辺と同様に凄い賑わいである。観光客も多いと思われるがとにかく人で溢れかえっている。

エッフェル塔の構造はトラス構造。大小の鉄骨が緻密に細かく組み上げられているのが印象的だ。ただ、イメージしていた色と少し違う。シルバー系の色と思っていたが、実はブラウン系でパリの街並み合うように「エッフェルタワーブラウン」特別な色で塗られているようである。街並み非常にマッチしたいい色である(口絵写真 28)。

7. 地下鉄

エッフェル塔の見学を終え、ホテル帰ることにしたが、ホテルまでの距離がかなりあったため、地下鉄で帰ることにした。乗り換えなしでホテル近辺まで行けるようである。切符を買うときに言葉が通じるのか不安であったが、切符売り場の方が優しく、すんなり切符を買うことができた。

列車を待ちながらふと他のホームに入ってきた列車を見ると、ドアの開閉方法が列車によって違うことに気づいた。日本では自動ドアが当たり前であるが、手動のドアが多いようである。さらにレバー式、ボタン式など色々あるようである。レバー式の列車が来たらどうしようと思っていたら、自動ドアの列車が来てくれたのでホッとした。

自動ドアの列車にホッとした

8. ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユ宮殿は、フランス王ルイ 14 世が 1682 年に建設したバロック様式の宮殿ある。約 50 年の歳月と莫大な費用を投じてつくられ、フランス絶対王政の最盛期に建てられた宮殿は、その豪華さと完成度の高さから、各国の宮殿建築大きな影響を与えたとのことである。

宮殿に着くとまず驚いたのが式地の広さと派手な建物。建物の入り口(門)付近が異常に広く、門は金ピカで門の両脇には巨大な宮殿が建てられている。さらに驚いたのが観光客の多さ。朝一にもかかわらず、入り口には大行列ができている。我々の団体は予約をしていたようだが、他の団体客もかなり多く、入場までにかなりの時間を要した。

宮殿の入場口付近の大行列

宮殿内に入っても人だらけ。さらにガイドさんの説明も人だかりを避けながら早足で移動しての説明であったため、気が散って何も頭に入らない。もう少し勉強してから来るべきだった。終わってみるとまともに説明がわかったのが鏡の間。宮殿中央に広がる回廊で 17 枚の巨大な鏡が窓の反対側に設置されており、シャンデリアと燈台をおいて光の空間を演出しているとのことであった。

当時の王朝は派手で目立ちたがり屋というイメージだけが残った。

唯一説明を理解できた鏡の間

建物の見学を終えると、庭園の見学。手入れの行き届いた美しく巨大な庭園にまた驚いた。建物が小さく見えるし、美しい庭園が地平線まで続くようなイメージである(口絵写真 25)。

人が多く滞在時間も短かったため、落ち着いて見学することはできなかったが、派手さと広さが強烈に記憶に残る場所であった。

9. セーヌ川クルーズ

旅行最後のイベントであるセーヌ川クルーズ。昨日まで見てきたパリ市内をクルーズ船に乗って見学するという贅沢なものである。天気も良く風が気持ちいい。

セーヌ川沿いにはノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった世界的にも有名なパリの観光スポットや歴史的建造物が凝縮されている。旅行の最後に貴重な体験することができた(口絵写真 29)。

10. 道路と街並み

仕事柄移動中ずっと道路を観察していた。フランスの高速道路、国道は広く贅沢に整備され、線形も良好で利便性に富んでいる。山があまりなく地形が平坦であるため、路側構造物がほとんどない。つまり、日本に比べ非常に安価な道路整備が可能である。安価であるがゆえに、郊外の交通量の少ない地域でも十分な道路整備が行われているため、観光を含め、地域間の流通が盛んに行われているのではないかと感じた。

日本では必要最小限、低コスト、メンテナンスフリーという考え方が一般的で、利便性という観点で道路を作ることはない。利便性がよい広域な道路整備が国を豊かにするのではないかだろうか。

贅沢に整備されたパリ郊外の高速道路

もう一つ気づいたのは、ラウンドアバウトの交差点がかなり多いこと。凱旋門の周りの大規模なものから、高速道路のランプ部、郊外の小さな交差点など様々な箇所で見かけた。信号機を付けなくてよく、速度抑制の効果も高いため、日本でも最近注目されているが、整備実績はほとんどないし、実際に見たこともない。貴重なものを見ることができた。

バスで通過して感じたが、安全性は高いものの、走行方法にかなり慣れがいるのと、方向を見失う人がいそうである。凱旋門の周りのように大規模になると、どこをどうやって走ったらいいかわからなくなると感じた。

高齢者ドライバーの多い日本では、あまり受け入れられないのではないだろうか。

車で溢れかえる凱旋門のラウンドアバウト

フランスの街並みは公園、植樹、歩道空間などがとても広く、景観優先で街づくりが行われているため、緑が多く街が美しい。

特に、パリのメインストリートであるシャンゼリゼ通り周辺は、広い車道と歩道、大きな並木が一直線に植えられており、歩道脇には高級ブランドの店舗が建ち並んでいるものの、周りに大きな建物はなく、歴史ある街並みを大切にした街づくりが徹底されている。凱旋門までまっすぐ延びるシャンゼリゼ通りとその周辺の街並みの景色姿は本当に美しかった。

日本ではこういった発想は皆無で、公園や歩道空間は必要最小限、景観に配慮した植樹すら嫌う。日本とヨーロッパのまちづくりに対する考え方の違いに驚いた。

凱旋門へとまっすぐ延びるシャンゼリゼ通り

11. おわりに

人生初のフランス旅行は、歴史、文化をとても大切にした美しい街並みとそれを邪魔することのない芸術的な道路に魅せられた旅行であった。

日本とヨーロッパでの常識や価値観、考え方の違いを感じ、今まで道路事業に関わってきた自分の視野の狭さを痛感した。

今回の旅行で見たこと、感じたことを参考にし、今後の仕事に生かすことできるよう色々と工夫してみようと思う。

フランス 6 日間の旅

総務部　総務課
明神　怜佳　(2012 年入社)

1. はじめに

私はオシャレな町というイメージがあるフランスを希望した。とはいえ、フランスには有名な建造物がたくさんあるという知識しかない。行くからには少しは知識がないと面白くないだろうと思い、「パリ・ルーヴル美術館の秘密」「ダ・ヴィンチコード」「パリよ　永遠に」の映画 3 作をレンタルした。少し知識がついたところで飛行機の中で読むための「フランス　世界遺産と歴史の旅」という書籍を 1 冊抱えてフランスに旅立った。

2. 1 日目

12 時間のフライトを終えパリに到着。この日の気温は 12 度。日本より少し肌寒い。時差は 7 時間とのこと。空港でバスに乗り換え一時間ほどかけてオペラ座の近くの「ミレニアムホテルパリオペラ」に到着し、すぐに食事に出かけることにした。

ホテルの近くの「SOFA」という店の入り口に日本語メニューを貼っていたため迷うことなくこの店に決めた。料理は一品の量が多く食べきれそうにない。皆で頑張ってフランスパンを食べて終えると、店員さんが間髪入れずに追加を持ってきた。実はフランスパンはサービスだった。お腹も張り自然と皆の手が止まっていたところ、店員さんが「Finish?」と聞いてきてくれたので私はすかさず「Yes」と答え、店を出た。

今日は疲れていたため早めにホテルに戻りすぐに就寝。

パリでの食事

3. 2 日目

2 日目はノートルダム大聖堂を経由し、モン・サン・ミッシェルへ行く行程。5 時間 350 ㎞ほどの大移動。モン・サン・ミッシェルで一泊するため、宿泊の用意をして出発だ。

(1) シャルトルのノートルダム大聖堂

ノートルダム大聖堂はパリというイメージが強いが後から調べてみると、フランスにはノートルダムという名前の教会があちらこちらにあるようだ。

ノートルダムの意味は「私たちの女性」、つまり聖母マリア様のことを表している。

ノートルダム大聖堂の見所はなんといっても建物内に張り巡らされたステンドグラス。青色のステンドグラスは本当に素晴らしかった(口絵写真 18)。この大聖堂のステンドグラスは美しいだけではなく、窓一つ一つに時代背景や物語が描かれているので面白い。ステンドグラスに物語を描くという発想の素晴らしさ。また、それが現在まで伝えられていること自体が奇跡なのではないかと感じた。

(2) トイレ事情

大聖堂を出て近くの公共のトイレを利用した。入ると鍵はボタンを押すようになっていた。ボタンを押すと外に赤色のランプが光り中に人がいるのが分かる仕組みになっている。トイレを見ると便座がびしょ濡れ。ポケットティッシュで拭いてから済ませたが、今度は流すボタンが見当たらない。悩みながらドアを締めたボタンを押すとドアの鍵が開き、水がすごい勢いで流れた。便座が濡れていたのは洗浄水の勢いだったようだ。

フランスのトイレは便座がないので非常に座りにくい。

(3) モン・サン・ミッシェル

ノートルダム大聖堂を後にし、フランス北西部ブルターニュ半島の付け根にあるモン・サン・ミッシェルへ。フランスに行くからには是非見てみたいと思っていた。

モン・サン・ミッシェルとは、「聖ミカエルの山」という意味。ある日、一人の司教の夢に大天使ミカエルが現れ、岩山に礼拝堂を建てるよう告げたという伝説が残っている。

ホテルに着くと、近くのバス停で専用のバスに乗り替え 5 分ほどで到着。

まるで海にお城が浮かんでいるようで、非常に素晴らしい景色。5 時間かけて来た甲斐があった(口絵写真 19)。

しかし、これはお城ではなく修道院ということである。

いざ、修道院の中へ。坂道を登り終え、300 段ほどの階段を経て修道院の入り口にたどり着く。3 階から 2 階に降りる途中の壁に大天使ミカエルの浮彫石膏がある。オベール司教の夢枕に大天使ミカエルが現れ 3 回目の時にオベールの頭に穴をあけたという伝説のシーンがあり、テンションが上がった。

修道院を出で登ってきた階段を降りていくと、行きは開いていたお土産屋さんが 18 時というのに店は閉まり始めていた。通常は 19 時閉店だ。人通りが少なかったため一人が店を閉め出すと次から次へと締めていったということだ。日本では考えられない。

ホテルに帰ってみると、なんとモン・サン・ミッシェ

ルが目の前に見える部屋。素晴らしいところに宿泊することができた。

ホテルのベランダから見るモン・サン・ミッシェル

モン・サン・ミッシェルには、名物グルメ「オムレツ」がある。工程を見て食べる時間がないと残念に思っていたが、夕食にオムレツが出てくると聞き大興奮。さらにホテルの中でモン・サン・ミッシェルを眺めて食べるという贅沢さ。徐々に食事が運ばれいよいよお待ちかねのオムレツの登場。期待しすぎたのか、オムレツは確かにふわふわではあるけど、味が付いているのか。薄味でコメントに困った(口絵写真 20)。

部屋に戻り、夜は部屋のカーテンを開けてモン・サン・ミッシェルを眺めて幸せに浸っていた。10:00 から 1 時間ほどライトアップがあり、ここにずっと住みたいと思うほど美しく幻想的な景色を堪能することができた。携帯しか持っていなかったので綺麗な写真は撮れなかったが、誰か撮ってくれていることを期待して就寝。

4. 3 日目

早朝 6:20 朝焼けのモン・サン・ミッシェルを見るために外に出た。曇り空のため残念ながら朝焼けが見られず、雲が晴れ朝日が見えた頃には今度は霧でモン・サン・ミッシェルは姿を消した。

昨日の夜の点灯を誰か写真撮っていないか確認したところまさかの誰も撮っておらず。残念。

気持ちを切替え再びバス移動。モネの暮らした村ジヴェルニーを経由し、パリを目指す。

(1) モネの暮らした村

クロード・モネの名画、「睡蓮」とそっくりな風景。ここはモネが 43 歳からの半生を過ごし、多くの名作を生み出した場所であるそうで、庭園は、今も花が咲き乱れ、絵画の世界にいるような気持ちになった(口絵写真 21)。

(2) ムーラン・ルージュ

長いバス移動を終え、ようやくパリへ戻ってきた。

ホテルに戻りすぐにドレスコードに反しない服装に着替えるとパリのキャバレー「ムーラン・ルージュ」に出かけた。ドレスコードということもあり、皆昨日までとは違う雰囲気だ。

ムーラン・ルージュとは「赤い風車」という意味のようで、本当に建物の正面に赤い風車が屋根の上に乗っていた(口絵写真 22)。

店に入るとまず荷物検査があり、そこを抜けるとレッドカーペットがひかれていた。その上を歩くだけで気分が盛り上がってきた。

音楽を聞きながら食事をし、その後ショーを見た。あまりの迫力に圧倒された。踊り子はトップレスだがいやらしい感じはなく、歌・ダンス・大芸道などどれも素晴らしいものだった。中でも、長いニシキヘビが 5 匹ほど入った水槽が下から出てきた場面。どうするのかと思っていたら、水槽の中に女性が飛び込み、蛇を体に巻き付け泳ぎだした。ヒヤヒヤしながらも見入ってしまった。

ただ、移動の連続で疲れのピークがきていたのか、後半は記憶が飛んでしまったのが心残りでならない。

店内の様子

5. 4 日目

(1) ルーヴル美術館

4 日目は終日自由行動。朝 8 時過ぎからホテルを出発し、ルーヴル美術館に向かった。ルーヴル美術館は入り口が何カ所かあるが、寒かったため室内で並べるリヴァリ通り 99 番入口から入ることにした。

建物の中には映画「ダ・ヴィンチ・コード」で有名になった逆さピラミッドがあった。

開館 15 分前の 8:45 に手荷物検査場に到着すると、すでに 30 人ほどの列ができていた。手荷物検査を終え、チケット売り場へ。朝だったお陰か全く並んでなく、すんなりとチケットとオーディオガイドの交換チケットを購入することができた。

リシュリー翼の入場入口付近で 3D のオーディオガイドを借りるためパスポートと交換。オーディオガイドの返却時にパスポートを返してくれるようだ。オーディオガイドは使いこなせると便利なものであったが、最初の 30 分ほどは使いこなすのに苦戦した。

オーディオガイドに苦戦中の 3 人

有名処は見ておきたいということで「モナ・リザ」「ミロのヴィーナス」「サモトラケのニケ」等を回れるところはすべて回った。

有名な作品の周りは人だかりができているので分かりやすい。モナ・リザは想像していたよりも小さかった。触られないようにガードされていたが、意外にも他の作品は手の届くところにありカバーも何もないのに驚いた。

色々な作品を見ているうちに、気がつくとすでに 4 時間が過ぎていた。まだまだ見たい作品はあったが、後の予定を考えしかたなく美術館見学を切り上げることにした。

ルーヴル美術館は想像以上に広く迷路のようだった。

逆さピラミッド

モナ・リザと一緒に

(2)　昼食

美術館を後にし、コンコルド広場を通り凱旋門を目指した。コンコルド広場には黒人の方が露店でいろいろなものを売っていた。私は 2 日目にサングラスを落とした。日差しを浴びる前に一刻も早く欲しかったためここで購入。値段交渉の結果 20 ユーロのサングラスを 5 ユーロでゲット。交渉の甲斐があった。

コンコルド広場を抜け、シャンゼリゼ通りのピザ屋さんで昼食を取ることにした。あまりお腹が空いていなかったので 3 人で 1 枚のピザを頼むと、2 回ダメと断られ、3 回目でなんとかオーダーが通った。フランスではマナーとして一人一皿が基本のようだ。風習の違いとはいえ、なんとも理解しがたい。

オーダーに苦しんだピザ

(3)　凱旋門

パリには凱旋門がいくつかあるが、一番有名なのはナポレオン 1 世の戦勝記念碑であるエトワール凱旋門だ(口絵写真 27)。

凱旋門の周りの道路には 360 度横断歩道がないため、シャンゼリゼ通りから地下道を通って向こうに渡った。凱旋門のそばに来てみると、想像以上にでかい！！展望台に登ることも考えたが、途中でショッピングもしながらだったこともあり、すでに夕方になっていたため下から眺めるだけにした。

露店のクレープを食べながら次の目的地エッフェル塔に向かった。

(4)　エッフェル塔

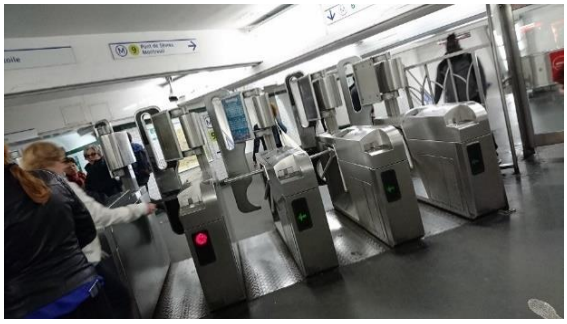
フランスの首都パリのランドマークの一つとなっている鉄塔。1889 年に、フランス革命 100 周年を記念してパリで行われた第 4 回万国博覧会のために、建築技師のギュスターヴ・エッフェル率いるエッフェル社により建設された塔である。万国博覧会の開催日に合わせるため、2 年 2 ヵ月という短い建設期間でつくられたというから驚きだ。それに建設中は一人も死者が出なかったというからさらに驚きだ。

エッフェル塔はもっとスカスカなイメージがあったが、近くで見ると無数の鉄骨が縦横無尽に絡み合って複雑な幾何学模様を作り出していた(口絵写真 28)。

エッフェル塔を後にし、一旦ホテルにかえることに。ホテルからかなり離れたところまで来ていたため地下鉄で帰ることにした。

駅に着くと、自動販売機で切符の購入を試みたかったが、人がたくさん並んでおり、迷惑をかけそうだったので窓口で購入した。パリ市内のメトロの料金は何回乗り換えても 1.7 ユーロとリーズナブル。物価の高いフランスで珍しく安いと感じた。

駅、電車の中の案内も非常に見やすく親切。地下鉄の路線図も持っていたためスムーズにホテルまで帰ることができた。こんなことなら途中の移動をもっと地下鉄を使えば時間を有効に使えたかもと少し後悔した。



地下鉄の改札口

ホテルに戻るとすぐにタクシーに乗り食事へ。店の名前は忘れたが、セーヌ河を南に渡り、少し遠くまで足を伸ばした。

この店の店員さんはとても感じがよく、4 人で 3 皿でもすんなりとオーダーを通してくれた。

料理のオーダーは英語のメニューを見てなんとなくこんなのかなと想像しながら注文。肉料理から一品。魚料理から一品。後はサンドイッチに飲み物を注文。魚料理はエビがメインの焼きそばで久しぶりの麺は特に美味しく感じた。

食事を終えると、行きのタクシー代が 20 ユーロと以外に高かったため、帰りは地下鉄で帰ることにした。2 回の乗り換えがあったため少し不安もあったが、優しいフランス人が案内してくれ無事にホテルに着くことがでた。

帰り着いたのは 22 時。フランスは 22 時でもとても明るく時間の感覚がおかしくなりそうだが間違いなく夜だ。

夕食

6. 5 日目

(1) ヴェルサイユ宮殿

682 年にフランス王ルイ 14 世によって建てられたヴェルサイユ宮殿。

ヴェサイユは大きく分けて、宮殿と庭園に分かれている。敷地の広さは約 1000 ヘクタール、東京ディズニーランドとシー合わせた広さの約 10 倍とのことだ。ヴェサイユの広大な敷地のほとんどはこの庭園でできている。ヴェルサイユ周辺にはそもそも水源がなく、約 10km 離れたセーヌ川から水を引いているそうだ(口絵写真 25)。

(2) セーヌ川リバークルーズ

セーヌ川沿いにはノートルダム大聖堂、ルーヴル美術館、オルセー美術館といった世界的にも有名なパリの観光スポットや歴史的建造物がいっぱいある。これらの世界遺産やパリで最も美しい橋と塔を一度に見られるのは魅力的だ。

セーヌ川クルーズで必見の名橋「アレキサンドル 3 世橋」は、パリで最も美しいと言われる橋で、橋の四隅には芸術、農業、闘争、戦争を意味する女神像がペガサスに乗って輝いている。橋一つとっても絵になる美しさだ。

日差しが強いが風がとても心地よい。セーヌ川リバークルーズを終え、パリの町並みとももうすぐお別れだ。

船を下りるとすぐ近くのエッフェル塔前で集合写真を撮った後、飛行機までの時間があったため、凱旋門に向かった。

昨日は展望台に登れなかったためこの機会に登ることにした。屋上まで螺旋階段の高さは 50 メートル。日本のビルで 12 階分。息切れしながら何とか屋上にたどり着いた。

テラスに出ると、パリの絶景が 360 度パノラマで広がる。眼下には直径 250 メートルの円形の広場で周囲に 12 本の大通りが放射状に伸びている。

星のように広がる道路構成からエトワール広場＝星の広場と呼ばれているそうだ。それぞれの通りにある見所は違うが統一感があり、色・形が揃った建物・木のラインはとても美しい(口絵写真 16)。

7. おわりに

これまでの私の旅行は行き当たりばったりが多かった。今回はフランスの歴史・文化に触れるということもあり、少し勉強していったことでより楽しむことができた。聞いたこと・見たことがあるものに出会うと親しみや興味を持つことができる。特にフランスの建物は歴史とモダンの融合でとても素晴らしかった。

旅行へ行く前に周りからフランス人は冷たいと聞いていたが、道に迷っていたときは向こうから声をかけてくれ、またこちらが訪ねた時も優しく教えてくれた。他人の話を鵜呑みにするのではなく、自分が実際に見て感じることの大切さを感じた。

今の時代は携帯があれば道に迷うこともなければ、分からないことがあればすぐに調べることができる。しかし旅の醍醐味は現地の方と触れあいコミュニケーションを取ることだと思う。

今回は社員旅行ということで普段交流があまりない社員の方とも交流ができ、より素晴らしい旅になった。

パリのまちと歴史・文化・芸術に触れた旅

設計部　防災まちづくり課　技師長
横山　成郎　(2016 年入社)

1. はじめに

私は、芸術の都というよりはプライドの高いフランス特にパリへの旅行を希望した。

近代都市の先駆として位置付けられている、パリ、シテ島を中心とした都市構造は、皇居を中心とした東京市区改正に影響を及ぼしている、とされる。そのような背景がありながら、全く違った都市構造が形成されているパリは、果たして現代の社会構造とマッチしているのだろうか、という疑問を解決してみたくなったのである。

私は、都市計画を専門としている技術士として、今回のパリという都市を自分の目で見て、都市計画的な見地から考察を述べてみようと思う。ただし、実際パリ市の一部しか見ていないので確信的な考察とはならないことをご承知いただきたい。

そして、一日自由行動で触れた生活者の視点でのパリの感想、最後に観光地で記憶に残った情景等、についても述べようと思う。

2. パリの都市構造

パリ市は、20 の区で構成されており、最も古い 1 区から時計周りに渦巻き状に番号が配置されていて、その形から「エスカルゴ(カタツムリ)」と呼ばれる。面積は、105km2。

なぜ、このような構造になったかというと、パリは、もともとシテ島から発展していってその周りを城壁で囲みながら、成長していった都市であり、成長するカタツムリがそのからを大きくするように、6 度にわたって、更に広がった城壁を築いてきたからだそうである。

このように、カタツムリ状の城壁の中に形成されていた都市は、複雑な道路に囲まれた小区画で形成されている。その中に、道路事業により土地を収用したことから、幹線道路は整備され、道路幅員は一定確保されたものの、縦横無尽な道路の存する街となってしまった、ということである。

まさに、私は、そのことを実感した。私は、ホテル到着早々に街中を散策途中、すぐに道に迷い、スマートフォンがなかったら、ホテルに無事帰ることができなかった。

3. 現在のパリ市の道路利用状況

パリ市も人口のピーク時は 1920 年代で約 290 万人いたそうである。人口密度は 320 人/ha を超えていたそうだ。その後は、郊外へ人口が拡散したことから、パリ市の人口は減少して、今が底で、再び微増状況にあるようだ。

ここで、高知市とも少し比較してみる。大津・介良を除いたいわゆる旧高知市が約 133km2 で、人口が約 25 万人なのである。この状態で、中心市街地の車道幅員は、パリ市とあまり変わらない。当然、パリ市の朝は写真 1 のとおり郊外から流入する車両で大渋滞となっている。

写真 1　流入する車両の渋滞状況

そして、パリ市の中心市街地の主要幹線道路以外の道路利用状況はというと、写真 2～4 のとおり慢性的に混雑というか縦横無尽な状況となっている。

写真 2　車がひしめき合っている 7 差路

写真 3　路上駐車による交通阻害

写真 4　広幅員の歩道を占有しているカフェテラス

さて、街はというと、写真 5 のようにゴミが道路のいたるところに散乱している。

写真 5　散乱しているゴミ

しかし、写真 6 のように毎日ではないかもしれないが、清掃作業が行われているのである。

写真 6　ジェット水流による清掃

4. 自由さを感じるパリジャン・パリジェンヌ

このレポートを記述するに当たって、少し基礎知識として情報収集した中に、パリ市内に居住する人間活動を見て、フランス人が全てそうである、とは思わないで欲しい、というコメントがあった。

前段で私は、道路インフラの主体を車や流れという視点で街を観察していた。一方、主体がパリジャン・パリジェンヌと考えたら、街の見方が変わるのではないかと考え、改めて観察した。

すると、環境整備が十分されている街を目指す以前に、スクラップ＆ビルドを不可能としている街で、精一杯のゆとりや賑やかさを大事にした人重視の街を目指していることが写真 7～9 でも理解できることが改めて分かった。

写真 7　自由気ままな交通島

写真 8　駐輪が障害にならない歩道

写真 9　補修中の建物や歩道

生活者と旅行者の利便性という視点で街をながめると、様々な取組がユニバーサルデザインではないものの、一定整備されている施設が写真 10～13 のとおり目に入ってきた。

写真 10　情報掲示板

写真 11　ストリート表示板

写真 12　地下鉄から上がるエスカレータ

写真 13　バイク占用駐輪場

5. 私が感じたパリ市の将来像

今、パリ市は道路空間の再整備事業に取り組んでおり、街中にあるロータリー状の広場やセーヌ川沿いの道路、幹線道路の歩道空間、などは今後一層ゆとりと安らぎ、憩いの空間として、人重視の道路空間が創造される。写真 14 のように高台から望むパリ市の建造物は、全く変わらない姿で歴史の時間軸を刻むことだろう。また、シャンゼリゼ通り(口絵写真 16)は毎月第 1 日曜日、自動車通行を禁止しているということである。

そして、一旦街中に入ると、広々とした人重視の空間と変わらない狭隘な石畳の歩行空間のコラボレーション、が生活者と観光客を引きつけ、世界有数の観光都市として成長し続けることが想像できる。

写真 14　モンマルトルの丘からパリ市を望む

6. その他特に印象に残った歴史・文化・芸術

(1) 幻想的なモン・サン・ミッシェル

快晴のモン・サン・ミッシェルに夕方到着、修道院から見た遙か広がる地平線は絶景であった。そして、21 時半過ぎの日の入は、宴会後のうつろな頭脳をスキッとさせてくれた。

翌朝、6 時半すぎに拝めた日の出に感激、そしてその後これまで見えていた修道院がみるみるうちに靄の中、最後は存在すら感じさせない風景が創出され、幻想的なひとときを味わうことができ(写真 15～19)、今回の旅行で一番感激した出来事であった。

写真 15　遙か彼方に見える快晴の中の修道院

写真 16　ホテル前から見た日の入

写真 17　翌朝遙か彼方に見えた修道院

写真 18　ホテル前から見た日の出

写真 19　靄の中に隠れてしまった修道院

(2)　華やかな夜のひととき

パリはスリやひったくりが多いので気をつけないといけない、と言われ、夜のとばりなどもってのほか。私は、団体で行くムーラン・ルージュを楽しみにしていた。

明るいうちに入ったそこは、赤い照明が社交場の絵画を思わせるような雰囲気であった。シャンパン付きのディナータイムが終わった後、お待ちかねのショー「フェリ」が始まった。羽飾りをまとったダンサーのスタイルの良さに見とれてしまった。最後はドーリス・ガールズのフレンチカンカン、これは見どころで圧倒され満足した。

しかし、ショーよりも私は、店の前に出たときの夜の街の華やかさと賑やかさ、遠い昔に味わった感覚を思い出した(口絵写真 22)。

(3)　オルセー美術館の印象派とモネ

ジヴェルニーにあるモネの庭園は、本当に北川村の拡大版であった。しかし、花の多さと美しさはとても比較できない情景だった(写真 20)。

写真 20　ヤナギが脇役の色とりどりのモネの庭

そして、翌日の自由行動で行ったオルセー美術館で見た印象派は、モネだけでなくマネ、特にルノワールの「ムーラン・ド・ギャレットの舞踏会」は、前日のショーの印象が残っているのか、前面の姉妹に強く惹かれるものがあった。そして、セザンヌ・ゴッホ、ゴーギャンと淡い色調から大胆な色彩やタッチに変化したポスト印象派といわれる画風にも何か人間の内面が映し出されているような気持ちを感じさせられた。

彫刻や絵画をゆっくり鑑賞してしまい、エッフェル塔に登る時間が無くなってしまったのは、少し残念であったけど、歴史的建造物があって、その中に収蔵されているというところにも、その価値という日本で鑑賞するスケール感とは又違った記憶として、一生の宝となったと感じたことだった。

7. おわりに

今回、55 周年記念旅行に参加することができ、本当に感謝したい。

日本特に高知は、おもてなし文化が根付いている。私は、その利点を活かして、歴史・文化・伝統を残しつつ、環境に配慮したゆとりと安らぎのある人重視のまちづくりを目指していきたい。

そしてまた、60 周年にもぜひ参加することができるよう、益々㈱第一コンサルタンツの発展に「情熱・謙虚・誠実」を持って尽くしていきたいと思う。

フランスでの思い出

調査部　調査測量課
小島　由佳　(2015 年入社)

1. はじめに

出発 6 日前になって、急にパリでの宿泊先のホテルが変更になった。しかも、変更後のホテル近くで、出発前日に小規模なテロが起こったというニュースがあり、不安が 8 割・わくわく 2 割といった気持ちになる。

2. Day1

朝 6 時 15 分に高知空港に集合。高知から羽田まではあっという間の 1 時間と 15 分くらいで到着。しかし、羽田からパリが飛行機で 12 時間と 35 分。遠い…。長時間座りっぱなしで、腰が砕けそうに痛い。

海外旅行に行った際に到着して思うのは、着いた国ごとに特有のにおいがあることだ。フランスにはなかった。「あれ？」と思いながらイミグレーションを通る。ちなみに台湾に着いた時はかすかに八角のにおいがしたし、ベトナムに着いた時にはニョクマムのにおいがした。

パリの空港からホテルのあるパリ市街までは車で 40 分ほどの距離があった。高速でも下道でも全席シートベルト着用の義務があるそうだ。ついに初フランスということで、車窓からの景色に釘付けになる。どこを見てもオシャレで絵になる。道路沿いには必ずといって良いほど街路樹が植えられている。木の背が高く、よく育っていた。

ホテルに着いた後、まだ夕方だったので、スーツケースを置いてからホテル周辺の散策にでかけた。歩いてみて感じたのは、パリの市街は見分けがつかない。右も左も同じようなベージュ色の古い様式の建物で、高さも大体同じくらいだった。景観を守るために看板も控えめで、観光客からすると、道を覚えづらいことこの上ない。目印が少なすぎるのだ。道路を挟んで、ものすごくシンメトリーな街の作りになっていた(口絵写真 16)。

3. Day2

バスでモン・サン・ミッシェルへと向かう。日本なら、信号のある交差点や立体交差で車の流れをコントロールしているが、パリは大きな幹線道路でも平面的に交わる。普通に横から強引に車線変更して突っ込んでくるし、まず、ロータリーに信号がない。車の流れを見て進入し、車線すらない中を、行きたい方向に出る。事故が起きないわけがない。自分は絶対にフランスで運転出来ないと思った。

途中、シャルトルにある世界遺産のノートルダム大聖堂に寄った。ノートルダム大聖堂のステンドグラスは「シャルトルブルー」と言われ、より細かく美しいことで有名らしい。天井が高い。ステンドグラスが色彩豊かですごくキレイだった。確かに青が際立っていた。

私は今までステンドグラスは、キレイなただの装飾品だと思っていた。ガイドさんの説明では、昔はヨーロッパでの識字率が低く、文字を読めない人々へキリスト教を普及させるために、神の教えを伝える手段として教会にステンドグラスが使われていたというのだ。ただキレイだと思っていたものが、そんな宗教的側面も持っていたとは思わなかった(口絵写真 18)。

ランチを食べたあと、バスでモン・サン・ミッシェルまでひたすら向かう。パリ市街はどちらかといえば、建物がぎゅうぎゅうに詰まっていて薄暗い印象だが、郊外に出れば一気に景色が変わる。明るく広々としている。ここは北海道かニュージーランドだろうかと思ってしまうほど地平線の向こうまで麦畑だったり、牛やひつじが放牧されていたりする。のどかな景色に癒やされながらバスの揺れもあいまって、うとうとしていた。

モン・サン・ミッシェルは、モン・サン・ミッシェルの単語に分かれており、モンは Mount(山)、サンは Saint(聖人)、ミッシェルは Michael(ミカエル)で、直訳すると「大天使ミカエルの山」という意味になる。島の中央にある教会堂の 1 番上には大天使ミカエルが空に飛び立つように飾られていた。また、カトリックの巡礼地の 1 つである。修道院がメインだが、地理的な要因のために要塞として軍事的な役目もあったらしい(口絵写真 19)。

フランス本土と島をつなぐ橋をバスで渡る。バスを降りた瞬間に台風かと思うほどの風にあおられた。顔をあげて気付いたが、島の上を通過する雲の流れが速すぎる。そこだけタイムラプスの空の映像が流れているみたいに、雲が見たことがない速さで流れていた。

モン・サン・ミッシェルのあるノルマンディー地方には、りんごで作ったシードルとカルバドスというお酒が名物である。泊まったホテルで夕食の時に飲んでみた。シードルはりんご風味のビールのような感じで美味しかった。モン・サン・ミッシェルの地ビールもある。まったりした感じだった。個人的には日本の炭酸の効いたビールの方が爽やかで好きだ。

左：シードル　　右：地ビール

このショートトリップで泊まったホテルからの眺望が素晴らしかった。ベランダからモン・サン・ミッシェルがどーんと見えるのだ。景色をさえぎるものがない。ベランダがものすごく贅沢な空間だった。「風邪をひくかもなー。」と思いながらも、ベランダのイスに座り、夜1時間ほど景色を堪能した。寒くてもずっと見ていられた。

ベランダからの眺め

4. Day3

モン・サン・ミッシェルからパリ市街へ帰る途中、印象派のモネの邸宅と庭を訪れた。

何種類の植物が手入れされているんだろうか。スケールが違う。日本の庭という概念とは規模が違う。色とりどりの花々が咲き乱れながら、睡蓮の池を囲んでいた。池の周りの遊歩道のどこから見てもキレイだった。所々にベンチがあった。座ってぼんやりと景色を堪能したかったが、タイトなスケジュールの都合で足早な観賞になったのが心残りだ。モネもそこいらのベンチに座りながら、庭の景色を描いていたのだろうか(口絵写真21)。

パリ市街に着き、ホテルに到着する。すぐにドレスコード用の服に着替え、ムーラン・ルージュへ向かう。120年の歴史を持つキャバレー。ドレスコードがあるということで、お客さんみんなが華やかにオシャレをしている。薄暗い店内はステージを正面に扇形に、遠くなるにつれ高くなるように造られていた。ショーを鑑賞する前に夕食が出てきた。前菜で出てきたモッツァレラチーズが美味しかった。フランスのトマトは果肉が少し固く、モッツァレラチーズと一緒になったカプレーゼが絶品だった。

初めてキャバレーというものを鑑賞した。圧巻だった。キレのあるダンスとダンサーの締まった身体、華やかな衣装。日本人とは骨格が違うと分かっているが、なぜあんなにも外国の人は足が長いのだろう。羨ましい限りだ。帰りの道中、ショーで使われていた曲がずっと耳に残っていた(口絵写真22)。

5. Day4

朝イチに徒歩でルーヴル美術館に行く。ホテルから迷うこともなく、すんなりと到着した。元々、王様の住むパレスとして建築された建物だけあり、広い。本当に広い。「こんなに歩いたのに地図上ではまだここなの？！」といった具合だ。散々迷いながらも、見てみたかったモナ・リザやミロのヴィーナスを見ることができた(口絵写真23)。教科書で見てきたものが目の前にあるという不思議。有名な絵画や銅像の前では人があふれていた。モナ・リザは一体今まで何万人の人に微笑みかけてきたのだろう。

芸術鑑賞もそこそこに、お昼ごはんを食べにセーヌ川左岸のサンジェルマン地区にある老舗のカフェ「Café de Flore」に向かった。サルトル、カミュ、ヘミングウェイ、ピカソ、ダリなど様々な哲学者、作家、画家が集まったというこのお店。運良くテラス席が空いていたので、そこに陣取りながらメニューを見る。高い。しかし老舗、もしくは高級店の店員さんはもれなく愛想が良い。このカフェの私たちのテーブル担当のギャルソンの人も、すごくお茶目な感じの良い人だった。

ランチとして、アイスコーヒーとクラブサンドウィッチを注文。サンドウィッチの間のスペースにチップスが盛られているというこのボリューム。このお店の外観から、ギャルソンから、メニューから、ザ・王道のパリのカフェという雰囲気を充分に楽しむことができた。

次はカトリックの礼拝堂、奇跡のメダイユ教会へ向かう。この教会は名前の通り、奇跡のメダイユまたは不思議のメダイユと言われるメダルが有名。メダルを手にした人に奇跡が起こる、幸福が訪れるといった話がある。日本で言うお守りみたいなものなのだろう。

ちょうどこの教会に着くと、ミサが始まるようだった。礼拝堂の中に入ると、観光客はほとんどいなかった。敬虔な信者やシスターだけの真面目なミサ。大聖堂などとは違い、観光地化されていない本気の祈りの場所だった。誰も私語を発していない。しかし礼拝堂の中は、温かみがあり、落ち着く。何が、とは言えないが、何か優しい感じがする。

無事にメダルをゲットした後は、メトロを乗り継ぎ、シャンゼリゼ通りで買い物をした。ルイ・ヴィトンの本店やハイブランドのお店がひしめくこの通りは、スリが多いらしい。歩いていると、斜め掛けにしたカバンを後ろにしていた自分が悪いのだが、「ジャッ」とファスナーを開ける音がした。カバンを見るとファスナーが開けられていた。荷物は何も盗られていなかった。ファスナーを開けるとペットボトルの水がカバンの幅パンパンに詰まっていたことと、ファスナーを開けられてすぐ反応したのが幸いだったようだ。油断も隙もないとはこのことだった。

6. Day5

フランス最終日は朝からヴェルサイユ宮殿へ向かう。もう豪華絢爛という単語しか思い浮かばない。細部に至るまで、贅を尽くした装飾の建物でパーティ三昧だった

らしい。郊外に残る民家と、この宮殿で過ごしていた貴族や王族との較差を考えるとコンコルド広場で処刑されても仕方ないかな、とすら感じるほどだった。

パーティをしていたホール

ランチでエスカルゴを初めて食べた。バジル、にんにく、オリーブオイルのソースがかかっていた。エスカルゴ自体に味は感じず、食感は貝のニナのようだった。バゲットとバジルソースの相性は抜群だった。(口絵写真26)

そしてなぜか出国の際の保安検査で2回もゲートに引っかかり「マダムこっちへ」と言われ、人生初のボディチェック。「めっちゃ触るやか。」と思うくらいしっかりチェックされた。もちろん何もでない。こういう人たちのおかげで航空の安全が守られているのだから、喜んで協力する。ある意味で貴重な体験が出来た。

7. まとめ

フランスを旅行中に本当に実感したのは、中世の雰囲気を色濃く残した国だということです。伝統と文化を重んじる国だということは知っていました。近代的なセンスを感じるパリコレが開催される場所であると同時に、伝統的なヨーロッパの中世の雰囲気を残す街並み。とても魅力的な五日間でした。

フランス文化に触れて

調査部　調査補償課
西森　尚人　(2006年入社)

1. はじめに

私の初めての海外旅行は、2008年のハワイ旅行でした。日本人の観光客も多く、言葉の不安も少ないという理由で選んだことを覚えています。当時は、たどたどしい英単語とジェスチャーでなんとかなるもんだと開き直っていました。今回はフランスということで、下調べを十分に・・と考えていましたが、気がつけば最低限の準備と共に、出発日を迎えることとなりました。

2. 1日目

「移動日」、避けては通れない1日です。国際線は11時間程度の飛行時間でした。「国際線では出来るだけ寝ないで下さい」の添乗員さんの一言が頭にあったこと、慣れない長時間の飛行機ということもあり、ほとんど寝ずにフランスへ到着することになりました。気候は20度前後でほぼ高知の気温と変わりがなく、過ごしやすく感じました。

シャルル・ド・ゴール空港にて

その日の夕食は、機内で摂りましたが、ホテルに着いたのは17時頃でしたので、お土産品を探すのを兼ねて、二度目の夕飯へと出掛けました。外はまだ明るく、後から知ったのですが21時頃まではずっと夕方のような明るさでした。

お土産品を求めて散策

スーパーマーケットでおいしいお菓子が安く買えるという情報があり、フランスでは大手のスーパーであるモノプリ(Monoprix)へ向かいました。確かにネット上で見たものがずらりと並んでいたので、迷わず選ぶまでは良かったのですが、レジのシステムが分からずしばらく眺めていました。レジは日本にあるようなセルフレジも並んでいました。私はなんとか通常のレジで購入し、初のユーロ硬貨も取得しました。

軽食をと皆でレストランらしき店に入りましたが、ここでもシステムやメニュー内容が分からず、妥協のビールを一杯のみホテルへ帰りました。ただ、どうしても空腹感があり、同部屋の芝田さんと夜の町を散策し、比較的入りやすいと感じた店でお腹を十分に満たし、ホテルで眠りにつくまではあっという間でした。今思えばふらっと入ったこの店の料理が上位に入るぐらい美味しかったと思います。

ギリシャ風サンドイッチ（ケバブサンド）

3. 2日目

2日目、フランス班の半分ぐらいの人は同感してもらえると思いますが、ホテルの朝食は美味しかったという印象が強いです。種類も思っていたより豊富で朝から色々と楽しめることができました。

はずれ無しの朝食

この日最初に訪れたのがノートルダム大聖堂です。車窓から教会はいくつか目にしていましたが、実際に目の前に立つと圧倒的な存在感に感動しました。特に感じたことは「空間の広さ」です。ゴシック建築の特徴でもありますが、壁自体の負担を少なく設計されているので、天井が高く、大きなステンドグラスが取り付けられているので、神秘的な空間となっていました。細かい作業が丁寧にされていて、無駄と言えば無駄なのかもしれませんが、それが大規模建築物となると、とてつもない存在感になると感じました(口絵写真 18)。

この日は昼食を食べレンヌを訪れる流れでしたが、添乗員さんの提案により予定より早くモン・サン・ミッシェルを訪れることとなりました。後から思ったことですが、この添乗員さんの機転がなければ、壮大な島の全貌が見られなかったので、本当にありがたいことだったと感じています。(朝焼けのモン・サン・ミッシェルは雲が多かったので・・。)

映像では何度か見たことがありましたが、実物を見るとなると、現地に近づくにつれ、気持ちが高まりました。「西洋の驚異」と称される景観は本当に神秘的でずっと見ていても飽きないような存在感でした。もう訪れることは出来ないだろうなという思いがあり、何度も振り返って目に焼き付けておきました(口絵写真 19)。

今回旅先にフランスを選んだ理由のひとつにフランス料理が食べたいと思ったこともあります。ただこの日の夕食のオムレツは想像以上に味付けがなく驚きました。素材の味という感じではないと思いますが、周りは皆塩こしょうを振っていたように思います(口絵写真 20)。

4. 3日目

3日目のスタートは、朝焼けのモン・サン・ミッシェルを観賞の予定でしたが、残念ながら雲が多く期待通りの姿は見られませんでした。ただ雲隠れのモン・サン・ミッシェルもとても幻想的で、深く印象に残っています。朝焼けはまた訪れることがあれば・・ということで次回の楽しみにしておきます。

雲隠れモン・サン・ミッシェル

次の目的地、ジヴェルニーに向かいました。道中気になっていた看板をやっと撮影することができました。ロータリー交差点です。主要道路が交差する大きな交差点はロータリー式になっています。見ていてとても危なっかしく、クラクションの音がよく聞こえていました。ガ

イドさんの話にもありましたが、気後れしていては免許を取らしてもらえないという、こちらの気質には合っているのかもしれません。日本でいう「かもしれない運転」はとても通用しないような気がしました。

ロータリー交差点の案内板

「北川村のモネの庭」高知県人なら皆が比較したと思います。人それぞれと思いますが高知も北川村もなかなか負けてないと感じました。ただ、春から初夏にかけて、ジヴェルニー村は一年で最も美しい季節を迎えることもあり、鮮やかな景観で歩いていてとても気持ちの良い空間でした。人工的な感じがせず、自然の中にそのまま身をおいているように感じました。他にも庭園だけでなく、アンティークショップやおみやげ物屋が数件と、芸術家ゆかりの村だけに、小さなギャラリーもいくつかあり、時間があればゆっくり楽しめる場所でした。

3 日目となると、少し疲れも出始めてバスでもふと寝ていたりしていました。この日の晩の目的地であるムーラン・ルージュのある繁華街は、今までとガラッと印象が変わり、入り口でのセキュリティチェックといい、なにか物々しい雰囲気に変に気を張っていたように思います(口絵写真 22)。

店内はテーブルがぎっしりと並べられていて本当に座れるのか心配したぐらいでした。飛行機でも窮屈な思いをし、ここでもかと思っていましたが、いざショーが始まると雰囲気に飲み込まれ、気にもしなくなっていました。ショーの方はさすがプロのエンターテイナーという感じで、お客さんを楽しませることがとても上手く、自然と引き込まれていきます。ダンスだけではなく、マジックショーもとても印象的でした。

5. 4 日目

4 日目は終日自由行動でした。午前中はオプショナルツアーを利用し、モンマルトルの散策に出掛けました。モンマルトルは少し小高い丘にあるので、そこから見下ろすパリの町並みがとても綺麗でした。散策中に目にする建物やバス、喫茶店などひとつひとつがお洒落で、気付けばシャッターを押していましたに。その他、ルーヴル美術館や、シャンゼリゼ通りなどに訪れ、残りの時間はお土産品を求めてとにかくよく歩きました。特にルーヴル美術館は、建物が広くガイド付きのポータブル機を持って移動しましたが、なかなか目的地に着くことができず苦労しました。移動といえば、タクシーも利用をしましたが、とにかくスピードが速く、割り込みの繰り返しで、助手席に座っていた私はずいぶん怖い思いをしました(口絵写真 23、24)。

6. 5 日目

最終日、まずヴェルサイユ宮殿に訪れました。建物が一部改修中でしたが、仮設シートひとつとってもお洒落で、費用をかける着目点が、本当に面白いなと思いました。建物はバロック建築代表作で、豪華で雄大な佇まいでした。広大な庭園と合わせて美しいという言葉がぴったりな場所でした。

最後のイベントであるセーヌ川のクルーズは、地元の学生の団体が一緒に乗船していたので、賑やかな雰囲気の中、景観を楽しむことができました。

ヴェルサイユ宮殿　一部改修中

パリのシンボル

7. おわりに

仕事を離れ異国の情緒に触れることで、心身共にずいぶんとリフレッシュすることができました。滞在期間は短く感じましたが、非日常の世界に身を置き、色々なものを眺めて、感じて、楽しく過ごせた 5 日間でした。

パリだけじゃない、田舎の魅力を体感

調査部　調査補償課
谷　加奈　(2013 年入社)

1. はじめに

私にとっては 12 年ぶり 2 回目のフランス。前回は専門学校の研修旅行。ヨーロッパの建築物やデザインを学びに行った。不精者の私は旅の計画などは友人にまかせきりであった。今回も海外に詳しい人がいるので自由日に行くところなどはまかせておこうと気楽に構えていたのだが、彼女が旅をとりやめたことで自由日の計画やお土産は何がいいだろうなどと大慌てでフランスのことを調べ始めたのであった。

2. 5 月 14 日(月)－日本からパリへ－

午前 4 時、外がうっすら明るくなった頃起床。昨夜は久々の海外旅行だと思うと緊張してなかなか眠れなかった。睡眠時間 3 時間程で、ぼーっとした頭で空港へ到着した。空港の入り口が開くと同時に一気に人がなだれ込み、慌ただしくチェックインを済ませ、始発便で羽田空港へ向かった。国際線ターミナルへは予定より少し早く到着し、免税店で買い物をする余裕もあった。約 12 時間半かけてシャルル・ド・ゴール空港へ到着し、バスでパリへ向かった。いよいよ旅の始まりである。

午後 5 時、ホテルへ到着した。12 時間半かけて来たのだから当然体はくたくたのはずだが気分は軽く、さっそく街へくり出した。行先は「MONOPRIX」。パリッ子御用達のスーパーマーケットである。

フランスのスーパー　モノプリ

調べてあったホテル近くの店へ行ってみるとすでに閉店していたため、携帯の地図アプリを使い、歩くこと 30 分。なんとか到着することができた。12 年前は携帯が使えず地図を見るのに苦労して目的地にたどり着けなかったこともあった。今回携帯が使えて本当によかった。

モノプリでは、モノプリオリジナルのエコバッグ、モンサンのお菓子やマカロンで有名なラデュレの紅茶、フランスでは有名な KUSMI TEA、クノール(フランス限定味)、エッフェル塔の形のパスタ、カマルグの塩などを購入した。事前に調べておいたのが功を奏し、何を買おうかと迷わず買うことが出来た。

モノプリでの購入品

帰りに何か食べようと店を探して歩いていると、おしゃれなオープンカフェが目に入った。パリではこのようなオープンカフェをよく見かけた。会話を楽しみくつろいでいるだけなのに絵になる。私たちも店に入ってみたもののメニューが読めず、言葉もわからない。食べ物の注文をあきらめ、ドリンクを一杯だけ飲んで、やっとホテルへ戻ってきた。この時、日本時間では朝 6 時のはずである。朝 4 時起きだった訳だから徹夜したことになる。パリは夜 9 時でもまだ明るく、時間がたつのを忘れてしまう。明日の準備を済ませるとベッドへもぐり込んだ。

3. 5 月 15 日(火)－パリからモン・サン・ミッシェルへ－

午前 8 時半、モン・サン・ミッシェルへ向けて出発だ。バスの中から見る景色は、ほとんどが高原が広がり牛や羊がのんびりしている姿だった。どことなく北海道に似ている。ガイドによるとフランスは農業大国で自給率は約 120%だという。朝食のバイキングに出たパンやバター、チーズがおいしかったのもうなずける。

それから広大な牧草地の間にいくつかの小さな町を通った。どの町の建物も伝統的な石造りやれんが造りの家が多く、沢山密集して建てられている所などは、日本のドイツ村のようなメルヘンなテーマパークに迷い込んでしまったかのようだった。パリの立派な建物もいいがどこかよそ行きの顔である。地方の一軒家もフランスの庶民的な日常が垣間見られてとても興味深かった。

フランスの田舎町

午後 4 時、モン・サン・ミッシェルへ到着した。今回の旅で私が一番楽しみにしていた憧れの場所である。映画ハリーポッターのホグワーツ魔法学校やルパン三世のカリオストロの城のモデルの一つで、テレビでも世界の絶景として放送されているのを見て、「美しいな。でも実際にこの目で見ることはないだろうな。」とため息をついていた。そんな憧れのモン・サン・ミッシェルをこんな間近で見ることができて本当に嬉しかった(口絵写真 19)。

ただ残念なことに余韻に浸る暇はなく、閉館時間が迫っていたため急ぎ足で頂上の修道院を目指した。

午後 6 時、修道院を出て階段を下りると、行きは賑わっていた街がしんっと静まりかえっていた。あれ、と更に下りていくと 1 軒だけ店が開いていたのでお土産を購入した。添乗員さんによると「いつもは 8 時位までやっているが今日はあまり人がいなかったので早めに閉めたのだろう。」とのこと。どうやらフランス人はその時の気分で動くことも多いらしい。

夕食はモン・サン・ミッシェルを眺めながら食事ができるホテルのレストラン。プラールおばさんのオムレツを食べ、シードル(リンゴ酒)を味わった。

オムレツはメレンゲ状でふわっとふくらんで大きく見える。お味は、、、素材の味が楽しめる一品だ。一緒に添えてあるポテトが絶品だった(口絵写真 20)。

修道院へ続くお土産通り

4. 5 月 16 日(水)ーモン・サン・ミッシェルからパリへー

午前 5 時、朝日に照らされるモン・サン・ミッシェルを一目見ようと早起きした。しかし、あいにくの霧に覆われ、あっという間に見えなくなってしまった。

幻想的な朝霧のモン・サン・ミッシェル

午前 8 時半、名残惜しいがパリへ出発だ。

途中ジヴェルニーで昼食をとり、モネの庭を見学した。とてもきれいに手入れされており、どこを切り取っても美しい絵になる場所だった。小鳥のさえずりに耳を傾けたり、花の香りを楽しみながら、モネがこの庭で絵を描いている姿やモネの子供達が庭で追いかけっこをして笑っているところを想像した(口絵写真 21)。

夜はパリのキャバレー「ムーラン・ルージュ」。ドレスコードがあり、普段よりおしゃれをしてドキドキしながら中へ入った。かつての文化人も虜にした老舗ということもあり、世界中から訪れた観光客で埋め尽くされていた。おいしいコース料理を頂いた後、ショーを鑑賞した。「宝塚」のようなど派手な羽根や、宝石みたいにきらきらした装飾を身にまとって歌い、踊る姿は自信に満ちあふれ、女性の私から見てもうっとりするくらい美しかった(口絵写真 22)。

5. 5 月 17 日(木)ー自由行動ー

この日のために色々計画してきた。少し遅めの朝食を済ませ、まずはルーヴル美術館へ向かった。

私がルーヴルで一番好きな美術品は、勝利の女神「サモトラケのニケ像」だ。ナイキの由来にもなっている。彫刻とは思えないほど軽やかで圧倒的存在感がある。

勝利の女神サモトラケのニケ像

ルーヴルの中はとにかく広い。目当ての美術品だけ見てあとはさらっと通ろうと思っていたが、それでも道に迷ってしまった。外に出ると時刻は午後 1 時半。予定では 11 時半には出るつもりだったのでランチのお店探しはパスしてルーヴルの地下入口にあるパン屋でサンドイッチを購入した。近くに公園を見つけ、芝生へ座ってピクニック。エッフェル塔を眺めながらのランチは、それはそれで最高である。

公園の芝生からエッフェル塔を望む

午後はメトロで移動。入口を見つけチケットを窓口で購入した。凱旋門を目指す。ところが乗り間違えて反対の方向へ行ってしまったので、次の駅で降りてまたチケットを買う羽目になった。

付近の駅に到着して、真下まで行こうと思ったが凱旋門の周りは円形状の交差点になっており、信号も横断歩道も見当たらない。どうやって渡るのかと他の観光客らしき人たちについて行ってみると、地下へ下りる階段を発見。どうやらここから真下まで行けるらしい。よく見ないとメトロの入り口と間違えそうだ。地下道を通って凱旋門の真下まで行ってみると、すごく大きい。その迫力に圧倒された(口絵写真 27)。

次にエッフェル塔の見える橋まで行き、写真撮影。そこで午後 3 時を過ぎていたので足早にシャンゼリゼ通りに戻り、色々店を見ながらホテルへ戻った。

夕食は事前に調べておいた鴨料理のお店。今度は日本語のメニューがちゃんとあり、店主らしき男性も気さくなおじさんでとても雰囲気のいいお店だった。鴨のフォアグラ、鴨の生ハムのサラダ、鴨のコンフィと鴨づくし。どれもすごくおいしかった。デザートにクリームブリュレを頂き大満足。楽しい時間を過ごすことが出来た。おいしかったのでお店で売られていた鴨のコンフィの缶詰をお土産に買った。おじさんが「鴨を漬けている油でじゃがいもを料理するとおいしいですよ。」と教えてくれた。これはいいことを教えてもらった。日本に帰ってもう一度フランス料理を味わうのが今からとても楽しみだ。

ホテルへ帰宅する頃には、歩きすぎて足が棒になってしまった。全て計画通りにはいかなかったが、ハプニングも含め楽しかった。

鴨料理

6. 5 月 18 日(金)ー帰国ー

今日で旅も最終日だ。ホテルをチェックアウトしバスでヴェルサイユ宮殿へ向かった。

ヴェルサイユ宮殿は、有名なマリー・アントワネットとルイ 16 世も暮らした場所だ。広い庭園、大理石の床や至る所金色でとても豪華だった(口絵写真 25)。

昼食にはエスカルゴが出た。専用のフォークでくるっと取り出して食べる。食べ方が似ている貝だと思えば見た目はなんとかクリアできたが、少し土臭さを感じた。味はオリーブ油とガーリックと塩加減がとても良くバケットにのせて食べるとおいしかった(口絵写真 26)。

午後からはセーヌ川クルーズを体験した。エッフェル塔からスタートしノートルダム大聖堂を通り過ぎたところで U ターンしエッフェル塔へ戻ってくるコースだ。天気にも恵まれ、風が気持ちいい絶好のクルーズ日和である。船から見るパリの眺めはとても美しかった。橋の上にいる人や河岸で日光浴している人たちが手をふってくれた。街中から見るのとはまた違った景色を見られて楽しかった(口絵写真 29)。

あっという間に時間は過ぎ、私たちはパリを後にした。また飛行機に乗り 12 時間半かけてゆっくりと現実に戻っていく。高知空港に着くとゲートで家族が出迎えてくれた。家族の顔を見て旅で疲れていた体がまた元気を取り戻した。

7. おわりに

今回旅を通して感じたのは、フランスはエコな国だ。スーパーではレジ袋がなく、皆自分の買い物袋をさげていた。古い建物を修理しながら住み、自転車専用道路が整備され、信号がない円形交差点を沢山見かけた。

それから、フランス人はおおらかだ。時間もあまり気にしないように感じたし、縦列駐車から車を出すときは少しずつ前の車にぶつけながら出すと聞いたときは驚いた。

日本とは文化や性格が全然違う人たちと片言の英語や翻訳アプリで会話し、意思が通じ合い、相手が笑顔になると私も嬉しかった。

全てが新鮮で今回の旅行で仕事や日常のストレスをリセットすることができた。「またがんばろう」と思える良いリフレッシュの機会になった。

パリと世界遺産の旅

幡多支店
小野　裕正　(1986 年入社)

1. はじめに

平成 30 年は当社にとって 55 周年となる節目の年である。その記念で 5 月 14 日から 19 日までの 6 日間、社員研修旅行第 2 班でフランス世界遺産を巡った。

海外旅行は何度か経験しているがヨーロッパは初で、期待と興奮があった。日本との時差は－7 時間。パリ市内からノルマンディー地方へ移動時間も長く、少し不安もあった。そんな気持ちで高知龍馬空港へ到着。

出発前に右城社長の激励の言葉で、元気よく旅立った。

2. パリ市内

パリ市内は北海道より、北に位置する。

到着した一日目の夕方は曇り空。薄着のせいか肌寒い。四日目、五日目は天気が良くなった。街中でダウンを着ている人、半袖の人をチラホラ見かけた。

日本に衣替えの文化が定着しているが、フランスにはない。自由な風潮である。

日本でよくあるコンビニがパリには無く市民は買い物で、スーパーマーケットを利用している。コンビニなれしている日本人には不便な気がした。

社員数人で、スーパーマーケット・モノプリに入った。テロ対策で入店の際には、手荷物検査があった。夕方であったため、買い物客が多かった。食品、お酒、雑貨、生活用品など日本のスーパー同様に、豊富に陳列されていた。

日本食コーナーを発見した。よく見てみると焼き鳥(Yakitori)と書かれて売られていたのは、どう見ても餃子である。フランスには、日本の食文化が間違って伝わっている。

日本食コーナーの Yakitori

パリの喫煙者の多さにびっくりした。

屋内はほぼ禁煙だが、路上では市民が平気で歩き煙草をする。煙草のポイ捨ては禁止されているが、吸い殻がよく路上に落ちている。私も喫煙するが、日本から携帯灰皿を持参しており、ポイ捨てはしていない。

車やバイクの多さにも驚いた。

駐車場が少ないため、路上駐車が多い。縦列駐車である。ギアがミッション形式の車が多く、サイドブレーキもかけずに駐車する。

駐車出来る余裕があれば、平気でバンパーに当てながら駐車する。実際ギリギリに止まった車両を、よく見かけた。

縦列駐車の間隔

旅行の楽しみの一つは食事だか、想像以上に口に合う料理が多い。

一日目、三日目で 2 泊したミレニウムホテルパリオペラの朝食では、特にクロワッサンが美味しかった。他の料理も日本人に合う味付けで、少し遅い時間に行くと、残っていないメニューもあった。

四日目夕食は西村夫妻のお誘いで、タクシーでわざわざ人気のレストランへ。そこで牡蠣を食べた。珍しいこともないが、フランスには牡蠣の世界的名産地があるそうで、これも美味しかった。

さらに、五日目昼食で、初めてエスカルゴを食した(口絵写真 26)。ガーリックな感じで、意外とビールに合う味付けで、美味であった。

三日目の夜はドレスコードがある 120 年の歴史のキャバレー、ムーラン・ルージュへ(口絵写真 22)。

戦争下でも営業を続けたことで有名だが、唯一ダンサーが太ったと言ってそのダンサーを辞めさせたオーナーに対して、他のダンサー達が立腹、ストを起こし休業に追い込まれたことがあるらしい。

前座の生バンドの歌と演奏の間にディナーを済まし、気分が良くなった頃から大道芸の様なパフォーマンスも織り交ぜ、ダンサーがフレンチカンカンショーで満員の客席を魅了した。アジア系の客でドレスコードを守らず、ダウンジャケットやジーンズで入店してくる客もいた。

金にものを言わせてなのか、同じアジア人として恥ずかしいと感じた。

自由行動の四日目は、モンマルトルの丘(口絵写真24)。

パリに併合されるまではモンマルトル村。

市内で一番高い丘。前夜楽しんだムーラン・ルージュもここにある。石畳の道がそのまま残っており、どこか日本の宿場町にも似ている。昔から画家が多く集まる場所。

日本で言えば有名な漫画家が若い頃集まって漫画を書いていたトキワ荘的なところ。今も多くの芸術家が集まり、サクレ・クール寺院を夢中でスケッチする少女や、路上で絵を描き売る画家がいた。

路上で絵を描き売る画家

3. 世界遺産

世界遺産巡りは二日目から。

まず、パリの南西へおよそ100㎞のところにあるシャルトルのノートルダム大聖堂を訪れた(口絵写真17)。

火事により破壊され修復したため左右の塔の高さ、建築様式や年代が違う。シャルトルブルーと名高い青いステンドグラス(口絵写真18)。戦時中も無事で、よく現存しているものだ。遠足で訪れた子供達も多かった。

長いバス移動で、フランス北西部ノルマンディー地方のモン・サン・ミッシェルへ到着(口絵写真19)。

島を覆うように修道院が建てられていて、テレビなどで見た光景が目の前にある。世界中から年間およそ350万人が訪れる、フランスでもっとも有名な世界遺産の一つである。宿泊するホテル近くからシャトルバスで島に入ると、修道院までの道の両側に土産物売り場やホテルがあった。まるで香川県の金比羅さんの参道のようで、親近感があった。翌日の朝焼けを期待していたが、曇っていて見えなかったのが残念だった。

土産物売り場

パリ市内ではセーヌ川とその周辺の建物を含むエリアが、世界遺産として登録されている。特に印象に残ったのが、四日目に行った夜のルーヴル美術館と五日目に登った凱旋門展望台からの景色。ルーヴル美術館は夜なので入館は出来なかった。中庭にあるガラスで出来たモニュメントのライトアップは、幻想的な雰囲気だった。

凱旋門(口絵写真27)は二日目にバスから見ていたが、五日目に展望台に登るとは思わなかった。展望台は地上約50mの高さで約200段のらせん階段を時間の都合で、短時間で上り下りしたので結構疲れた。パリの街並みが360度一望でき新凱旋門も見られて達成感はあった。

五日目午前中、パリ南西にある世界遺産ヴェルサイユ宮殿を見学(口絵写真25)。

王妃の部屋が何年間も改装工事中で、見学することは出来なかった。その他の部屋や庭園を見て廻ったが、贅沢極まりない宮殿だ。

昼食後パリの世界遺産を川から一周するパリセーヌ河岸遊覧クルーズに乗船。

この日までバスや徒歩で巡ったパリ市内の世界遺産をセーヌ川の船上から見学。建物だけでなく歴史的公共施設、多くの橋の下を航行するたび、日本の橋梁とは違った構造が多いと感じた。世界遺産を目に焼き付けて帰ろうと、熱心に見入っている社員の姿が印象的だった。

4. おわりに

フランスは第二次世界大戦当時ドイツ軍の侵攻にも破壊されなかった街。特にパリは、ヒトラーによる「パリを燃やせ、パリは燃えているか」の命令にも部下の将軍が背き、爆破しなかったほど美しく、歴史的・文化的に価値のある街であった。

移民が多く、最近はテロが多発しているが、この多くの世界遺産を今後も戦争やテロの犠牲にせず、後世へ引き継いで欲しい。

移動が大変だったが、気軽に行けない国であり、良い思い出となった。

2018 年 5 月 21 日(月)～26 日(土)

ドイツ

伝統・文化を大切にする国ドイツ

代表取締役　社長
右城　猛　(1986 年入社)

1. はじめに

私と妻にとってミュンヘン、シュヴァンガウは 2006 年以来2度目であるが、ベルリンとポツダムは初めてである。

ポツダムは、アメリカ、イギリス、ソ連の三国首脳が日本とドイツの戦後処理を話し合った「ポツダム会談」の場所である。

ベルリンは、1961 年から 28 年間にわたってコンクリートの壁によって東西ドイツが分断されていた場所である。

このような歴史的場所を一目見たい、敗戦国でありながら日本と同じように経済成長を遂げてきたドイツが、近年はどのような状態にあるのかを確認したいという思いでドイツに行くことにした。

私がドイツに決めたのは、スケジュールの都合から選択の余地はなかったということもあるが、イタリアやフランスに比べてスケジュールにゆとりがあり、病後の妻と同伴できることが大きな理由であった。

2. 機内有料 Wi-Fi

ルフトハンザ航空 LH717 便で羽田からフランクフルトへ向かう間、Wi-Fi でインターネットを楽しんだ。

長時間のフライトは辛いものであるが、メールをしたり Web サイトを閲覧したりしていると、フランクフルトまでの 11 時間 40 分があっという間に過ぎた。

Wi-Fi は有料で、フランクフルト到着まで使用できるフライトプランが 17€(約 2200 円)であった。

ルフトハンザ航空 LH717 便

3. 自動車専用道路アウス

ベルリンからポツダムへ向かう際に、1913～21 年に建設されたヨーロッパ最古の自動車専用道路アウスを通行した。アウスは当初、ドイツ自動車産業の競争力向上を目的に自動車レース用のサーキットとして造られたが、その一部を有料道路として開放したところベルリン・ポツダム間の移動時間が著しく短縮されたことから、アウトバーン建設の切っ掛けになったとされている。

道路脇には今も観戦席が残っており、当時の面影を偲ぶことができた。

ヨーロッパ最古の自動車専用道路アウス

4. ツェツィーリエンホーフ宮殿

世界文化遺産にもなっているツェツィーリエンホーフ宮殿は、アメリカ、イギリス、ソビエトの 3 カ国の首脳が集まって第二次世界大戦の戦後処理を話し合った「ポツダム会談」の場所である。会談が行われた部屋には、円卓と椅子が置かれ三カ国の国旗が立てられていた。ここでトルーマン米大統領、チャーチル英首相、スターリンソ連首相が激論を交わし、戦後のドイツや日本の運命を決めたことを想像すると空恐ろしく感じた。

ポツダム会談が行われた円卓

会議室の壁に貼られていたポツダム会談の様子を示す写真

チャーチル、トルーマン、スターリンが椅子に座って会談をした場所。私が手に持っているのがその時の写真。

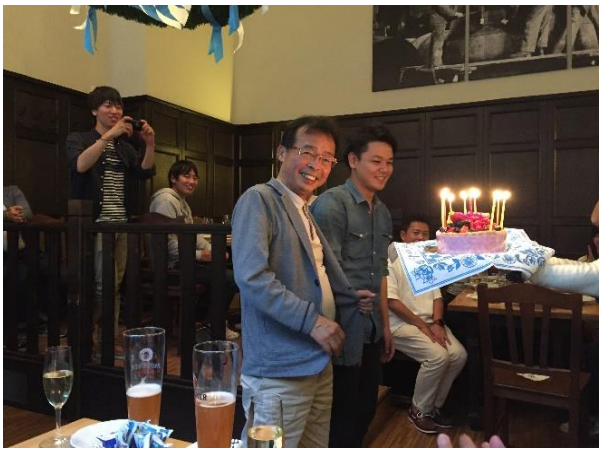
5. バースデーケーキ

夕食は、ベルリン中心部にあるレストラン「マキシミリアンス Maximilians」でバイエルン料理であった。ベルリンに来て南ドイツ・バイエルン州の料理を食べることに違和感があったが、東京で高知の皿鉢料理を食べるようなものかと自分勝手に納得した。

食後、全員にシャンパンが配られ、小さなバースデーケーキが 1 個出てきた。すっかり忘れていたが今日は 5 月 22 日。私と井上敬士君の誕生日である。そのお祝いに JTB が用意してくれたものであった。すでに満腹であったが、一口食べるとメチャクチャ美味しかった。これまで口にしたことがない甘みを抑えた上品な味であった。

ツアーコンダクターの安達さんが、パリの有名なケーキ店に注文し、それを私たちのためにベルリンまでわざわざ届けてもらったようである。JTB のサービスに感動させられた。

5 月 24 日は中平隆文君の誕生日。ミュンヘン新市庁舎の地下レストラン「ラーツケラーRatskeller」で食事をしたときに四角い形をしたバースデーケーキが出てきた。ここでは全員に行き渡るだけのビッグサイズが用意されていた。パリの有名店と比べるのは酷であるが、まずかった。これがドイツの味なのだと納得した。



ベルリンのレストランで私たちの誕生祝い

6. ベルリンの壁

終戦後、東ドイツはソ連が占領したが、東ドイツの中にあった首都ベルリンはさらに東西に分割された。

当初、東西ベルリンの行き来は自由だったので、自由で良い暮らしを求めてたくさんの東ベルリン市民が西ベルリンへ脱出した。これを止めるため東ドイツは西ベルリンの周りを有刺鉄線付きのコンクリート壁で囲った。これがベルリンの壁である。

1990 年に東西ドイツが統一され、ベルリンの壁は撤去されたが、シュプレー川隣のミューレン通りに約 1.3km の壁がイーストサイド・ギャラリーとして残されている。ここはオープンギャラリーとして開放され、21 カ国 118 名のアーティストが壁面にアート作品を描いている。

終戦から 73 年が経った今でも、朝鮮半島は北朝鮮と韓国に分断されている。

日本も一歩間違えたら 4 つの国に分断されていた。北海道と東北地方をソ連、本州中央、関東、信越、東海、北陸、近畿をアメリカ、中国と九州をイギリス、四国を中華民国がそれぞれ統治し、東京は四カ国共同占領という日本分割統治計画が存在していたのである。もしも分断されていれば東京にもベルリンの壁ができ、日本の発展は大きく遅れ今日のような豊かな国にはなっていなかったに違いない。それだけに敗戦国ドイツの東西分断の象徴である「ベルリンの壁」を一度この目で見たいと思っていた。

ベルリンの壁イーストサイド・ギャラリー

ベルリンの壁があった位置には石が埋め込まれている

7. クラインガルテン

ミュンヘンへ移動するためベルリン・テーゲル空港に向かう途中、庭付きの小さな家をたくさん見かけた。クラインガルテンである。「小さな庭」の意味であるが、現地ガイドは「一坪農園」と説明していた。

ドイツでは利用者が 50 万人を超えている。利用者一人当りの平均面積は 100 坪。貸借期間は 30 年。ラウベと呼ばれる小さな小屋が併設されていて、ここに住みながら野菜や果樹が育てられる。老後の生き甲斐や余暇の楽しみだけでなく、都市部での緑地保全や子供たちの自然教育の場としても大きな役割を果たしているようである。

高知にもドイツのクラインガルテンを真似た滞在型市民農園がある。「クラインガルテン四万十」と、第一コンサルタンツが設計・監理を担当した「クラインガルテンもとやま」である。

近年、県外から高知県に移住する人が増えているが、市街地からあまり遠くない場所にクラインガルテンを整備すれば、県外からの移住をさらに促進できるだろう

ベルリンのクライカガルデン

8. 水平ジブクレーン

ベルリンの国会議事堂の展望台に上がったとき、旧東ベルリンのあちらこちらでビルの建設工事に水平ジブクレーンが使われているのを見た。ノイシュヴァンシュタイン城が建っている山の麓でも水平ジブクレーンが設置されていた。

日本ではビルの建築工事にタワークレーンが使用されるが、水平ジブクレーンは見かけない。

日本に帰ってから、高知工科大学の國島正彦教授が土木工事の作業効率のために水平ジブクレーンを用いる研究をしていることを知った。

全くの偶然であるが、この 9 月に第一コンサルタンツが国土技術総合研究所から「建設現場における労働生産性データ取得及び施工効率化要件整理業務」を受注した。橋梁工事を対象に、従来工法による施工と水平ジブクレーンを使用した施工の両方でデータを取得分析し、労働生産性や施工の効率化を比較検討する業務である。

今回のドイツ旅行で何度も見ていたので、水平ジブクレーンに親しみを覚えるようになった。

ノイシュヴァンシュタイン城の麓の水平ジブクレーン

9. ミュンヘン新市庁舎とその周辺

ミュンヘン新市庁舎は、1867～1909 年に建てられたネオ・ゴシック様式の建物で、ドイツ最大の仕掛け時計がある庁舎として有名である。

庁舎には高さ 85m の塔があって、エレベーターで展望台へ上がるとミュンヘンの街を一望できる。

ミュンヘンは第二次世界大戦で焦土と化したが、戦前の伝統的な建築物を復元している。日本をはじめとする東南アジアの国々では、高層ビルをどんどん建設しているのとは対照的である。現地ガイドよりドイツ人は伝統・文化を大事にしているという説明があった。

市庁舎があるマリエン広場から南に少し行った所に、野菜や果 物、花、チーズ、ワイン、鮮魚などを売る店がたくさん並ぶヴィクトアーリエンマーケットがある。マーケットの中には、ビアガーデンもあり、多くの市民が大ジョッキでビールを飲んでいた。

市場の中央には、マイバウムが立てられていた。マイバウムとは「五月の樹」の意味。ドイツでは春の訪れを祝い、5 月になると町や村の広場に飾り付けをした一本の高い柱を立てる風習がある。ここにはマイバウムが一年中立てられている。

広場や街の様子もマイバウムも 12 年前に来たときのままである。何も変わっていない。中国や東南アジアの国々が猛スピードで変化しているのと対照的である。

新市庁舎から眺めたミュンヘン市街

ヴィクトアーリエンマーケット

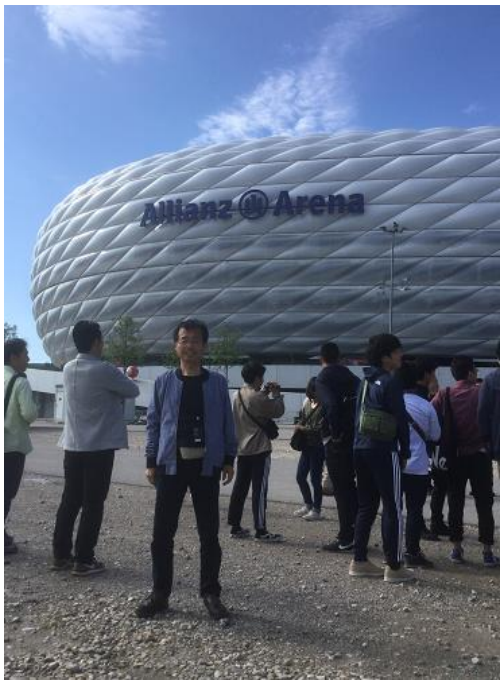
ヴィクトアーリエンマーケットのマイバウム

10. アリアンツ・アレーナ

アリアンツ・アレーナは 2005 年に 370 億円かけて建設された収容人員 75,000 人のサッカー専用のスタジアムである。

このスタジアムの側面と屋根部分に使われているのは、旭硝子が作った高機能フッ素樹脂フィルム「アフレックス」である。フィルムを重ねて、中にエアーを送り込むことで菱形の座布団のような状態にしたものが 2,800 個使用されている。菱形をしたフィルムの寸法は、目測であるが 5m×15m と大きい。

私たちが見学したときのスタジアムは白色をしていたが、バイエルン・ミュンヘンの試合日は赤、TSV1860 ミュンヘンの試合日は青、サッカードイツ代表の試合日は白に色を変える。技術先進国ドイツで、日本の技術が生かされていることを知り、嬉しく誇らしく感じた。



旭硝子の「アフレック」で作られたアリアンツ・アレーナ

11. あとがき

ドイツにはヨーロッパの他の国と同じように古い建物が残されている。古い文化や歴史を大切にする風土がある。

国や民族への帰属意識を高める上では重要であるが、日常生活には不便である。高層ビルのマンションや立体駐車場を作ることができないので、マイカーは路上駐車が当たり前である。隙間がないほどの間隔で縦列駐車をしなければならない。

技研製作所の北村精男社長が、「ヨーロッパに技研の地下駐車場「エコパーク」を作れば路上駐車を一掃できる。ヨーロッパには 5 兆円の市場がある」と話されていたが、その可能性は十分ある。

親睦会役員と JTB 添乗員による事前の準備や現地での気配り、そして社員の協力のお陰で誰一人被害に遭遇することなく、体調を崩すこともなく無事に帰ってこられた。

社員にとって生涯の想い出に残る楽しい旅になったことと思う。

戦争と冷戦の世紀を象徴するベルリンの壁とポツダム会談の会場

取締役　相談役
矢田部　龍一　(2017 年入社)

1. 20 世紀を象徴する国・ドイツ

今回、第一コンサルタンツ創立 5 5 周年を記念しての社員ヨーロッパ旅行に参加した。第一陣の旅行先はイタリア、第二陣はフランス、第三陣はドイツである。

イタリアは、2000 年以上も前に、数百年に渡ってヨーロッパを支配したローマ文明発祥の地である。ローマは広大なヨーロッパを支配するにあたって、29 万 km にも及ぶ道路整備や水道橋に代表される社会インフラ整備を推し進めた。古代ローマの物質文明は、古代ギリシャ文明とユダヤ・キリスト教文明という精神文明と並んで、今日の世界をリードしているヨーロッパ文明の源流をなしている。

私は第 3 陣のドイツ旅行に参加した。ドイツはイタリアと並んで関心がある国である。それは以下の理由による。20 世紀を政治面から概観すると前半は 2 度の世界大戦に代表される戦争の時代、後半は米ソ冷戦に象徴されると共産主義が猛威を振った時代である。ドイツには、東西冷戦終結の象徴であるベルリンの壁の遺構や日本の無条件降伏を含むポツダム宣言が討議されたポツダム会談の開催地があるなど 20 世紀を代表する国と言える。また、ドイツは中世カトリック社会から近世への転機となったルターの宗教革命の舞台でもある。それと供にドイツの自動車産業の発展を下支えしたアウトバーンが整備されている。これらを垣間見ることが出来れば、この上ない収穫である。

2. ドイツの首都ベルリン

旅の初日、午後 2 時に羽田からフランクフルトに飛んだ。機内 11 時間の長旅である。日本と 7 時間の時差のお陰で、フランクフルトの到着は夕方であった。それから、国内線に乗り換えてベルリンに飛んだ。大都市であるにも関わらず空港は意外に小さい。到着は夜の 9 時半であった。緯度が高いので日暮れは遅いが、さすがに暗くなっている。旅の本番は翌日からである。次の日は朝早くから予定が組まれているので早々に眠りについた。といっても数時間も眠ったであろうか。身体は長旅で疲れているのに目が覚めた。時差ボケである。起きても何もすることがないので、ウトウトしていると外が明るくなり始めた。

窓の外には抜けるような大陸の青空が広がっている。空気が乾燥しているので朝の冷気が気持ちいい。窓から見えるベルリンの街に戦争の傷跡は認められない。NATO のリーダー国であるドイツを代表する国の中心だけのことはある。活気に満ち溢れた街である。それにしてもベルリンは緑に溢れている。街路樹として植えられている菩提樹とマロニエの若葉が、真っ青な空に映えている。青々と繁った街路樹が実に落ち着いた平和に満ち溢れた街の風情を醸し出している。

写真 1-1　真っ青な空に映える戦勝記念塔
（1872 年に完成した。デンマーク戦争・普墺戦争・普仏戦争の戦勝を記念した塔）

3. 第二次世界大戦とソビエト連邦

今は平和に満ち溢れたベルリンであるが、20 世紀は戦争に明け暮れたこともあり、ベルリンも戦火に焼き尽くされた。2 度の世界大戦では、植民地化政策に乗り遅れた民族主義国家が、自由主義的な国体を持つ国からなる連合国と戦火を交えた。その結果、これまでの戦争では見られないほどの多くの命が失われた。特に、第二次世界大戦では自由主義国家であるアメリカ、イギリス、それとフランスが民族主義を掲げる全体主義国家であるドイツ、イタリア、日本と戦った。結果は自由主義国家が民族主義国家に勝利し、世界は民主主義体制に大きく舵を切った。

その一方で、第二次世界大戦は、共産主義国家であるソビエト連邦の躍進も招いた。ソビエト連邦は戦争で疲弊した東欧諸国に共産党の傀儡政権を立て共産国とした。また、中国や北朝鮮にも共産党政権が樹立された。第二次世界大戦では汎ゲルマン主義を掲げるナチスドイツや大東亜共栄圏構想を掲げる日本の軍事政権などの民族主義国家を敗戦に追い込み、民族主義を抑え込むことには成功したが、一方で世界赤化革命を目指す共産主義の台頭を許すことになった。

4. 共産主義の脅威

共産主義の第一号の国はソビエトである。帝政ロシアで 1917 年に共産主義革命が起こり、瞬く間に東欧に飛び火し、広大なソビエト連邦を建国した。ソビエト連邦の領土拡大指向は止まることを知らず第二次世界対戦の終結に際して、領土を東ドイツにまで拡大した。共産主義国家である東ドイツから西ドイツへの脱出者が後を絶たないことから、1961 年に東ドイツ政府は一方的にベルリンの壁を構築し、東ドイツからの脱出を防ぐとともに、脱出を試みる者を容赦なく撃ち殺した。ベルリンの壁は、朝鮮半島の 38 度線と並んで東西冷戦の象徴であった。

共産主義国家はマルクス・レーニン主義を国家建設の理念とする有史以来、初の国家の形態である。共産主義は、唯物論、唯物弁証法、マルクス経済学、そして唯物史観を思想の根幹とし、階級闘争・暴力革命を歴史の必然として容認する。存在が意識を決定するという唯物論には、人間が生まれながらに持つ生命の尊厳性といった概念はゼロである。そのため、共産主義国家では多くの国民が無慈悲に粛清された。スターリンや毛沢東による反革命分子の犠牲者はそれぞれ 2 千万人を超えるとも言われている。またカンボジアのポルポトを政権下では、殺戮された死体がメコン川に列をなして流れたとも言われている。

アメリカは第二次世界大戦後の戦後処理で、共産主義への対応を誤った。ソビエトの出方を読み誤った事により東欧を支配下に収められ、中国および北朝鮮の共産化を許した。北朝鮮の共産主義を排除する事に失敗したことが今日の北朝鮮の核の脅威となっている。また北朝鮮の共産主義国家樹立を許したことがベトナム戦争を引き起こし、ベトナム戦争での米国の敗戦が発展途上国で雨後のタケノコの如く共産主義国家が誕生する遠因となった。

共産主義は徹底した全体主義国家である。共産党の主張が絶対であり、個人の自由や人権は一切認められていない。これは北朝鮮の金正恩体制を見ても明らかである。北朝鮮では体制に反対すれば、即座に収容所送り、もしくは死刑が待っている。

5. 東西冷戦の象徴としてのベルリンの壁と壁の崩壊

ドイツが東西に分裂後、東ドイツでは共産主義政権による徹底的な弾圧政策と経済の停滞が起こった。ベルリンの壁を境にして、西側には自由と繁栄が、一方、東側には弾圧と貧困が待っていた。

冷戦に終止符を打ったのはソビエト連邦のゴルバチョフである。1917 年の共産主義革命から 70 年の年月を経てのことである。ソビエト連邦が世界赤化政策を推し進めたこともあり、世界の半分近い国が共産主義革命の犠牲になった。中国や北朝鮮などの極東アジア、東南アジア、中南米、アフリカ、そして東欧と実に多くの血が流された。

ゴルバチョフがソビエト連邦を解体し、共産主義独裁政権を放棄するのは、経済の停滞に端を発している。北朝鮮の金正恩が、曲がりなりにも対話路線に出たのは、経済制裁の効果である。アメリカを始めとして経済制裁を緩めることがあってはならない。

1989 年 11 月 9 日、大挙して押し掛けた東ベルリン市民を前にして国境検問所が開かれ、数万人が西ベルリンになだれ込んだ。ベルリンの壁の崩壊である。この様子は、テレビで連日の如く放映された。自由と解放の象徴であった。多くの人々を苦しめたベルリンの壁は、今は一部だけが遺構として残されている。ベルリンの壁を前にして、共産主義政権下で苦しめられた多くの人々のことを想い、祈りを捧げた。

6. ポツダム宣言の会場

ベルリンの郊外にあるポツダムのツェツィーリエンホーフ宮殿を訪ねた。1945 年 7 月 17 日、米英ソの首脳が会談した会場である。歴史的な会談が開催された場所であるので、もっと大きな宮殿かと想像していたが、案外と小さい。歴史教科書に掲載されている宮殿の庭園で写された 3 首脳が並んで椅子に座っているところもじっくりと見学した。ポツダム会談の時には、まだ広島と長崎に原爆は投下されていない。ポツダムで戦後処理のことを話し合っている時に、トルーマン大統領の頭の中には原爆投下の計画がすでにあった。広島、長崎の人は何も知らない。戦争は実に悲惨である。

ナチスドイツが降伏後の占領政策を話し合うためにベルリンに隣接するポツダムのツェツーリィエンホフ宮殿で、アメリカのトルーマン、イギリスのチャーチル、それとソビエトのスターリンの 3 巨頭会談が行われた。今回、会場を訪ねて見ると73年前の姿がそのまま残されている。

ポツダム宣言では、日本の無条件降伏が勧告された。しかし、日本が敗戦を受け入れたのは、8 月 15 日のことである。この間、ソビエトは 8 月 7 日未明に参戦し、樺太を占領すると共に中国に展開していた日本軍 50 万人をシベリアに抑留した。ソビエトのスターリンは領土拡大に躍起と

写真 5-1　シュプレー川沿いに残されたベルリンの壁にはアーティストたちにより多くの壁画が描かれている。ブレジネフとホーネッカーがキスしている絵が特に有名である

写真 6-1　ポツダム市のツェツィーリエンホーフ宮殿の壁にかかるトルーマン・チャーチル・スターリンの会談光景の写真

なっていた。終戦が延びていれば、北海道や韓半島は間違いなく占領されていた。スターリンは、ポツダム会談に先立つヤルタ会談で北方領土の併合を約束させている。

当然のことであるが、戦争では勝者が全てを決定する。ソビエト連邦の一方的な参戦により、日本側では多くの犠牲者が出た。また、樺太も北方領土も一方的に支配された。せめて、北海道が分割統治されなかったことが救いである。日本人は、戦後日本の分割統治に反対してくれた中華民国の蒋介石総統に感謝しなければならないことを再確認したツェツィーリエンホーフ宮殿の訪問であった。

7. ミュンヘンの町並み復興

旅の 3 日目にベルリン空港を飛び立って、午後 5 時過ぎにはドイツ第 3 位の人口を擁するミュンヘンに到着した。私にとって、ミュンヘンと言えば、ビール、そしてオリンピック開催時のテロ発生くらいの知識しかない。

ミュンヘンは第2次世界大戦の際に連合国軍の空爆により徹底的に破壊されている。そのため、美しさと縁もゆかりもない街かなと勝手に想像していたが、何とも表現できないほど美しい街である。

ミュンヘンはヒットラー率いるナチスが本拠地を置いた街である。そのため、第 2 次世界大戦中は、連合国により 71 回もの空爆を受け、中世の美しい街並みは完全に破壊された。戦後の復興は、住民たちの意を汲んで、戦前のままに復興されている。建物の高さ制限がかけられ、色調も統一されている。戦後、世界各地において、経済優先の街並みが建設された。それらの街は、伝統的な美しさも、近代的な美しさも乏しい。ミュンヘンは 150 万人を超える大都市である。BMW のような世界的企業も立地している。この街が、戦前の街の美しさを完全に残して再建されたことに驚きを禁じ得ない。日本各地のまちづくりもミュンヘンに学べば、日本的な美しい街並みを取り戻せる。いつ取り組みを始めても遅すぎることはない。

写真 7-1　戦火に焼き尽くされたが、今は見事に復興されたミュンヘン市の美しい街並み
赤レンガや屋根瓦が中世の佇まいを醸し出す

8. アウトバーンと自動車産業

ドイツは自動車生産大国である。メルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲン、BMW、アウディ、ポルシェ、Smart など、世界を代表する自動車メーカーがある。これを支えているのが、全土に張り巡らされたアウトバーンである。

今回の旅行でアウトバーンを走った。速度制限はところどころにあるが、多くは速度制限なしである。日本だと即座に速度違反を取り締まられるが、ドイツではその心配があまりない。日本もいつの日か、自分たちで制限速度を守る国民になりたいものである。

アウトバーンの建設を本格的に推し進めたのはヒットラーである。第 2 次世界大戦の開戦までに実に 3860km が完成されている。それに比べて日本の高速道路の開通は、1963 年 7 月の名神高速の栗東 IC―尼崎 IC 間(71.7km)まで待たなければならない。ヒットラーは数々の悪政を行ったが、今日のドイツのアウトバーンの建設とそれに伴う自動車産業の隆盛は、ヒットラーあっての賜物である。

古代ローマは、「すべての道はローマに通ず」と言われるほどの道路整備で広大な帝国の繁栄を誇った。ドイツのアウトバーンを走って、日本も今まで以上に真剣に国土整備に向かう必要があるように感じた。

特に、四国のインフラ整備は遅れている。南海トラフ巨大地震の発生が現実味を帯びる中、救援路・復旧路としての生命線である 8 の字高速自動車道ネットワークの完成も、まだ時間を要するようである。また、8 の字ネットワークの完成と並んで四国が将来的に発展していくためには、四国新幹線の整備、そして、第二国土軸としての豊予海峡ルートの整備なども、ぜひ取り組みたい事業である。

今回のドイツ旅行は、私に多くの感動を与えてくれた。戦争は許せるものではないが、さすがに 2 度の世界大戦を戦うだけの気概を持った国だけのことはある。特に、歴史を感じさせる街並みと社会資本整備への取り組みは素晴らしい。

ドイツ街並み紀行

設計部　部長
松本　洋一　(1994 年入社)

1. はじめに

今回の社員研修旅行は、会社創立 55 周年を記念してヨーロッパを訪れた。私は、第3班としてドイツを訪問した。EU 圏を訪れたのは、新婚旅行で北欧を旅して以来である。今年度から都市計画の勉強をして仕事の幅を広げたいと考えていたこともあり、特にドイツの街並みに対して興味を持って見学することができた。

駆け足で見聞した街並みは、整然と美しく整備されていると感じた。以下に印象に残った街並みについて綴る。

2. ベルリン市街の歴史的遺構

ベルリンは、ドイツ連邦共和国の首都であり市域人口は 350 万人の大都市である。旅の最初にドイツ連邦議会議事堂を訪れた。見学者に解放された屋上ドーム(口絵写真 30)からはベルリン市街が一望できる。ガラス張りのドーム眼下には議場を覗くことができ、オープンな議会政治をアピールしている。屋上にはドイツ国旗が青空に映えてはためいていた。ガイドさんによれば国旗の黒色は勤勉、赤色は情熱、金色は名誉を表している。国の顔とも言える連邦議会議事堂を見学してドイツが世界有数の経済大国に発展した精神の一端を垣間見ることができた。

ベルリン市街には、ドイツ帝国時代、第二次世界大戦、東西冷戦時代の遺構が数多く保存され現代の統一ドイツを代表する街並みを形成している。

ブランデンブルク門(口絵写真 31)は、かつての城郭都市であった面影を残し現在はベルリンのシンボルとなっている。東西冷戦後に大規模な修復を受けており、戦禍を物語る弾痕が至る所に見られた。

ベルリンの壁がアートギャラリーとして解放されたイーストサイド・ギャラリー(口絵写真 36)は、多くの観光客で溢れていた。かつての東西分断の象徴は、国内外のアーティストが様々なスタイルで自由や平和について発信する場となっている。

ベルリンでは、平和について考えさせられる歴史的遺構が観光資源や市民の憩いの場として活用されていることが印象深かった。

写真 1　通勤時間の自転車通行レーン

市内の街路では、多くの路線で駐車が可能となっている。びっしりと路上駐車が並ぶ景観は、ヨーロッパの特徴的な街中景観である。路上駐車に対する考え方は根本的に日本と異なっている。

自転車交通も日本との違いを感じた。日本に比べて自転車通行レーン(写真 1)の整備が行き届いている。通勤時は自転車交通量が非常に多く、マナー良く颯爽と市街を通り抜けていく。

3. ポツダムの旧市街と宮殿群

ポツダムはベルリンから約 30 分程度に位置し、湖と森の緑に囲まれた美しい街である。

昼食をとった旧市街中心部のブランデンブルガー通り(写真 2)は、車両の侵入が規制されてショッピングモールとなっている。オープンカフェやフラワーショップ等が軒を連ね、美しい建物と調和した開放感のある街並み景観を形成している。

「ポツダムとベルリンの宮殿群とその公園群」は、ユネスコの世界遺産(文化遺産)に指定されている。今回は、その中でも代表的な遺産であるサンスーシ公園と宮殿(口絵写真 33)、ツェツィーリエンホーフ宮殿(口絵写真 34)を訪れた。

写真 2　車両の進入が規制されたポツダム旧市街の街並み

サンスーシ公園は約300ヘクタールの広大な敷地に芝生や森が広がっている。サンスーシ宮殿の前庭は階段状のブドウ園になっている。花壇、生け垣、芝生の景観を維持するために 60 人程の庭師が働いているそうである。

フリードリヒ 2 世が暮らしていた頃の宮殿は、トイレや風呂が設置されていなかったそうで劣悪な衛生状態であったことは容易に想像できる。ロココ調の美しい建物とのギャップには驚かされる。美しさへの追求を何よりも優先する文化が根底にあると感じる。

4. ミュンヘン旧市街

ミュンヘン新市庁舎からは市街が一望できる(写真 3)。ミュンヘンの街は、旧市街と新市街が対照的な街並みを形成している。旧市街は、はしご車が届く高さ 22m 以下に建物高さが制限され、中世から近世の美しい街並みが復興され維持されている。

旧市街中心部の観光は、マキシミリアン通り(写真 4)を経由する。この通りは国立劇場や高級専門店が軒を連ね、

ミュンヘン旧市街の都市景観を代表する通りとなっている。旧市街の真ん中には、市内最大の野外市場ヴィクトアリエンマルクト(写真 5)があり、ビアガーデンには明るい時間から多くの人が集っている。さしずめ、高知では日曜市からひろめ市場に至るエリアといったところか。ただ、その規模と開放的な雰囲気には圧倒される。今回は残念ながらこのようなオープンスペースでの食事はとれなかった。機会があればゆったりと時間をとって過ごしたい。

ヨーロッパでは、ディーゼルエンジンの排ガス不正が明るみなって以降、電気自動車の普及が加速しているとの報道を耳にしていた。実際に街路に設置された充電施設(写真 6)を利用する場面を見かけたが、ベルリン、ミュンヘンともに思っていたよりも施設数が少ない印象を受けた。

写真 3　新市庁舎から望むミュンヘンの街並み

写真 4　旧市街の中心部マキシミリアン通り

写真 5　緑に囲まれた開放的なビアガーデン

写真 6　街路に設置された充電施設

5. ミュンヘン新市街の建築デザイン

旧市街を抜けると街並みは一変し近代的なデザインの建築物に目を惹かれる。

BMW 本社(写真 7)は、シリンダーを模したユニークな形状をしている。本社に隣接するショールーム、それらを結ぶ歩道橋(写真 8)に至るまで、BMW らしい硬質で美しいデザインで統一されている。

ドイツの工業製品には、デザインの一貫性を感じる。例えばドイツを代表する自動車メーカーである BMW、メルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲン、ポルシェは、時代が変わっても一目でそれとわかるデザインへのこだわりを感じ取ることができる。質実剛健、機能的、美しさといった要素をうまく融合し、各メーカーのアイデンティティーが確立されている。

FC バイエルン・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アレーナ(口絵写真 44)は、スポーツ全般に興味がある私にとっても一度は訪れてみたいと思っていた場所である。外観は繭のようなユニークな形状のサッカー専用スタジアムで、ミュンヘンの新たなランドマークとなっている。外壁の半透明のパネルは日本の旭硝子製である。

ガイドによるスタジアムツアーも充実している。ツアーでは選手が実際に使用するロッカールームから対戦チームが並んでピッチに入る通路を案内される。チャンピオンズリーグのテーマに合わせてピッチに出れば美しい芝生と 7 万人収容のスタンドが迫り臨場感が素晴らしい。

写真 7　シリンダーを模した BMW 本社ビル

写真 8　近代的なデザインが目を惹く BMW ショールーム

6. ロマンティック街道

ロマンティック街道は、ドイツで最も人気がある観光街道である。心配された天気にも恵まれて期待通りの美しい風景を楽しむことができた。車窓に広がるのどかな田園風景やアルプスの山並みは美しく心が癒やされる。

今回訪れたのは、街道の南端部に位置するヴィース教会とノイシュヴァンシュタイン城である。

ヴィース教会(口絵写真 40)は、世界遺産にも指定されて

おり内装のロココ装飾の美しさが圧倒的であった。多くの観光客が訪れる施設であるが、周辺は牧場に囲まれて質素な佇まいである(写真 9)。園路(写真 10)や駐車場、案内看板等も周辺に溶け込むよう配慮されており違和感なく整備されている。

ノイシュヴァンシュタイン城(口絵写真 41)は、街道の南端に位置する人気の観光地である。渓谷に架かるマリエン橋からの景観は、素晴らしいの一言に尽きる。この城は、要塞や宮殿としての機能を備えて建設されたものではない。これほど大規模な建築物が、ルートヴィヒ 2 世の中世への憧れを具現化した趣味の産物であったことに驚かされた。城郭としての実用性に乏しいが、結果的に観光施設として非常に価値あるものとなっている。

写真 9　農村風景に溶け込んだヴィース教会

写真 10　周辺景観に調和した園路

7. 番外編：ドイツの食

旅先では、食文化を理解することが重要である。風土的に食材に恵まれていなかったため、保存食が発達し塩分や酸味がきつい。供される食材も単調でジャガイモや肉類が主体である。季節感も乏しく旬の食材として出たものはホワイトアスパラガスのみであった。市場で見た魚類は、川魚や燻製が主体であった。

食事のボリュームは、日本で外食する場合の 2〜3 倍はあろうか。とにかく量に圧倒される。ドイツ人の屈強な体躯を見ればその量も納得はできるのだが。

ドイツの食文化は、繊細な日本食文化と対極にあり、特に年配の日本人旅行者には馴染みにくいものであろう。しかし私自身は、ドイツでの食事を美味しく楽しむことができた。白ソーセージ(写真 11)、ピクルス、皮目を香ばしく焼いた豚肉(写真 12)などと本場のビール(口絵写真 39)との相性はぴったりである。好き嫌いだけでなく、風土や文化の違いに思いを馳せることができれば、その土地の食をもっと楽しむことができるのではないだろうか。

写真 11　ミュンヘン名物の白ソーセージ

写真 12　メインの豚肉とジャガイモ

8. おわりに

実際に見聞したドイツの街並みは、各々の都市が特徴ある歴史や文化を保全しつつ機能的で快適な生活ができる空間整備が両立されていると感じた。

ドイツの街並みを見て、日本との違いとしてあらためて感じることは、街並みを構成する要素の中で美しさを優先する強い意思である。この意思が文化として社会に根付いていなければ、このような統一感のある街並みは形成できないであろう。

身近な日本の街並みを見れば、経済性、快適性、利便性、速さ、高さといった要素が優先され、美しさや統一感に欠ける残念な景観が目立つように思う。

現時点で私には「美しい街並み」について、都市計画の観点から整理して説明することは難しい。今回の旅をきっかけとしてあらためて都市計画について勉強する意欲を持てたことは有意義であった。

6 日間のドイツ旅行は、あっという間に帰途を迎えた。見所が多すぎて、どうしても駆け足の観光になってしまうのは仕方がない。

次にヨーロッパを訪れる機会があれば、じっくりと腰を据えて滞在したい。開放的な屋外の市場、ビアガーデン、オープンカフェでもゆったりした時間を過ごしたい。

このような機会を再び持てるよう、日々精進していきたい。

ドイツの文化に触れて

設計部　河川砂防課　係長
冨永　敏絵　(1993 年入社)

1. はじめに

創立 55 周年の社員旅行がヨーロッパに決定したと聞いた時は、実際にアンケート等の準備が始まるまでは信じられなかった。

イタリア・フランス・ドイツの中でドイツを選んだのは、ビールを本場で飲んでみたかったことと、日本人に気質が似ていると言われるドイツの人達と実際に接してみたいと思ったからである。

2. 出発

いよいよ研修旅行出発になってもドイツに行くという実感はあまりなく、忘れ物だけしないように気を付けて家を出た。羽田で乗り継ぎ、不安だった国際線も体調を崩すことなく乗り切りフランクフルト空港に到着した。フランクフルト空港から次にベルリンに向かう国内線に乗り継ぐのだが、入国審査のゲートが非常に混雑しており、1 時間半という短時間での乗り継ぎ時間に間に合わないのではないかと初日から焦ってしまった。何とか飛行機に乗り遅れることもなく、定刻どおりベルリン・テーゲル空港に到着。首都の空港にしては規模の小さいのに驚いた。

3. ベルリン・ポツダム観光

2 日目からはベルリン市内の観光地を訪れた。

バスの車窓から見えるベルリンの街は、都会で近代的な建物も多く、その中に混在する古い建物は存在感があった。

最初に訪れたのはドイツ連邦議会議事堂である。入場するのに空港並みのセキュリティチェックを受けたことに驚いたが、聞けば日本の国会議事堂に入場する時も同様のチェックがあるという。

議事堂の中央にはガラス張りのドームがあり、議場の中はいつも天然光が差し込むように設計されているという。また、ガラス張りは、政治の透明性を象徴しているとも聞いた。多くの観光客が見学しており、日本よりも開かれていると思った。

議事堂のすぐ近くには有名なブランデンブルグ門があり、想像していたよりも大きな門に圧倒された。ベルリンがナポレオンに征服された時期はパレードが行われた場所だと聞き、同じ場所に自分がいることが信じられなかった。

午後からは、サンスーシ宮殿とツェツィーリエンホーフ宮殿を順番に見学した。私は宮殿と名の付く建物の内部を見学するのは初めてで、最初に見学したサンスーシ宮殿ではロココ様式の内装や調度品に興味を引かれた。宮殿前には広い庭園が広がり、当時の優雅な生活が想像できた。だが、当時の暮らしぶりの説明では、トイレやお風呂もなく、客人との会話も争いの起こらないよう音楽など当たり障りのない話題に限られるとのことで、もし私が生活するならば退屈だし不便で長続きしないと思った。

ツェツィーリエンホーフ宮殿は、サンスーシ宮殿とはまた趣が違い、森の中にある閑静な住居といった感じであった。もちろん建築物は立派であるが。ここは、第二次世界大戦後、ポツダム会談が開かれた場所であり、戦後の日本についても議題にこそ揚がらなかったようだが、北海道まで占領地とする案もあったようだと説明を受けた。会談次第では、今の日本も全く違ったものになっていたかもしれない。

数々の宮殿や博物館を見学したが、私にとってベルリンで印象に残ったのは、東西ベルリンの時代とナチスの時代の話を多く聞いたことである。市内には関係する記念碑や公園が多々あり、そしてベルリンの壁が設置されていた場所には今も石とプレートが埋め込まれている。また、銃弾の後も建築物には残されており、とても平和で落ち着いた国に見えるが、それは様々な過去を乗り越えたうえにあることを考えさせられる。ドイツの人達にとっては隠したい事実かもしれないが、しっかり受け止めて後世にも伝えていこうとしている姿勢が感じられた。

写真 3-1　議事堂のガラスドーム

写真 3-2　議事堂屋上からの景色
（中央白い屋根の建物はメルケル首相官邸）

写真 3-3　ベルリンの壁の跡

写真 3-4　ベルリンの壁
（この場所は観光地ではないため当時の雰囲気が残っている）

4. バイエルン自由州観光

ベルリンからミュンヘンまでは空路1時間ほどで到着した。ミュンヘンはベルリンとは全く違い、中心部は古く美しい町並み続き、少し郊外に行くと田園地帯が広がるとても情緒のある町であった。

ミュンヘン市中心部は観光バスの乗降場所がオペラ座横と決められており、食事や観光のため何度もオペラ座前を通ることができた。最終日には、練習中なのか館内から音楽が聞こえ、得をした気分になった。

4 日目は、ヴィース教会とノイシュヴァンシュタイン城を訪れた。旅行前に一番楽しみにしていた日である。

ヴィース教会は、周辺にのどかな放牧地が広がり、とても静かな場所にあった。午前中の早い時間の見学だったせいか、他に観光客も巡礼者もなく、ゆっくりと教会内を見ることができた。外観は素朴な建物であるが、内装はロココ調の荘厳な装飾が施されており、数多くの彫像とフレスコ画で構成されていた。教会では、有料だが蝋燭に火を灯すこともでき、私はキリスト教信者ではないが、蝋燭を立てお祈りしてきた。こういう場所で静かにゆっくりと過ごせば人生観が変わるかもしれない。

ノイシュヴァンシュタイン城はまず、最もお城が綺麗に見られるというマリエン橋からの景色を堪能し、歩いてお城まで散策、城中を見学した。

説明を聞くまでは、普通に王様が暮らした伝統的なお城なのかと思っていたが、実際は、石造りではなく鉄骨のコンクリート製で、城主のルートヴィヒ 2 世の趣味のためだけに造られたと分かり、随分がっかりした。城が完全に完成する前にルートヴィヒ 2 世は不審死を遂げ、居住することがほとんどなかったため、歴史的価値がそれほどあるとは思えないが、ドイツ内で人気が高い観光地なのだという。確かに綺麗なお城で、外観も内装も立派なもので、見る価値はある。有名なお城を間近で見ることができ、嬉しく思った。

写真 4-1　ミュンヘン市内の様子

写真 4-2　ヴィース教会周辺の様子

最終日には、サッカーチームのバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムであるアリアンツ・アレーナを訪れた。

私はサッカーのことは詳しくなく、この場所に特に思い入れもなかったが、ゲートの中に入り、説明を聞きながら進んで行くにしたがって興味が沸き始めた。ロッカールームや記者発表ルームなど、テレビで見たことがあったし、選手が入場するように皆で列になってピッチ手前まで歩いたことは本当に良い思い出となった。

ファンではないが、ついショップで買い物をしてしまった。

5. ドイツでの食事

出発前は、ドイツはソーセージとザワークラフトしかないので、料理には期待しないでほしいと聞いていた。

好きなビールが飲めれば、食べるものは何でもいいと思い、特に期待もしていなかったが、実際に現地の料理はとても美味しかった。

料理が単調にならないよう旅行会社の方で予定を組んでもらったということで、バラエティに富んだ料理であったと思う。ソーセージは昼夜毎食出たが味が違ったし、魚や旬の白アスパラ、豚肉の豪快な料理を食べ、充分満喫することができた。

ただ、量の多さに驚いた。前菜で軽く 1 食分あるのに、更にスープ、メイン、デザートと続く。美味しいのに食べきれない状態がほぼ毎食で、お店の人に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。語学力がないため、それを伝えることはできなかった。

魚料理は 1 匹丸ごと出てきたので、ナイフとフォークで食べるのが難しく、この時だけはお箸を使いたいと思った。

ドイツではビールは、日本のようにメーカーが一括して同じ味のビールを造るのではなく、その土地の地ビールが主である。旅行中は 2 種類のビールを飲んだが、小麦が原料のヴァイツェンビールが気に入った。

日本のビールに味が近いピルスナーももちろん美味しかったが。食事の時には、1 杯が最低 500ml のグラスで注文となり、大きさに圧倒された。2 日目の夜の食事は地元のビアホールだったのだが、1L のジョッキが基本で、両手でなければ持てない重さであった。料理の量もあり、さすがに 1 杯飲むのがやっとだった。

料理ではないが、水については、スーパーなどで炭酸入りではない水を購入するのに苦労した。英語表記もあることはあるのだが理解できず、何種類か購入した結果、開けた瞬間プシュッと音がした時は落胆した。

写真 5-1　豚足料理（大きさに圧倒された）

5. 帰国

最終日は飛行機の出発の時間もあり、慌ただしい観光となったが、それでも当初の予定を全て終えることができた。

帰りの飛行機内では、疲れているはずなのに珍しく眠れず、映画を 3 本見てしまった。無事に高知に到着した時には、安心したのと同時に少し寂しい気分になった。こんなに長い旅行をしたことがなかったせいかもしれない。

6. おわりに

訪問する場所の予備知識を持たないまま旅行に出発してしまい、その分、感動が薄くなってしまったであろうと思うと、今更であるが少し悔いが残る。

今回の旅行は長時間移動のため体調に少し不安があったが、ほんの一部ではあってもドイツの歴史と文化に触れることができ、思い切って行って本当に良かったと思った。

はじめにも書いたが、ドイツの人達は日本人に似ているとよく聞くが、実際にはもっと大らかで、時間の流れがゆっくりしていると感じた。生活にゆとりがあるように見え、自分とは時間の感覚が違うのだろうなと思った。

私はあまり、旅行に行ってもそこに住みたいとは思わないが、ドイツは住んでもいいと思った。

ドイツの土木構造と建築と文化にふれて

設計部　橋梁構造課　課長補佐
兵頭　学　(2009 年入社)

1. はじめに

海外研修旅行としてドイツを訪れた。これまでの研修旅行でも何度か海外に行かせて頂くことはあったが、今回は初めてのヨーロッパへの旅であり、今まで以上に期待に胸膨らむ旅であった。

本稿では、いくつかの事柄について、ドイツ国内(ベルリン、ポツダム、ミュンヘン)を旅して気づいたことや感じたことについて記したいと思う。

2. ドイツの構造物

構造物設計を専門としている者としては、一番気になるのはドイツの構造物がどのような造りになっているかということである。

残念ながら、色々と代表的な橋や構造物を巡るということはできなかったが、観光で訪れた場所やバスの車窓から見ることができた構造物についてその特徴を述べる。

(1)　橋梁

ドイツは、橋梁工学においては先進的な国の一つであり、連続合成桁やトラス構造などはドイツから輸入された技術だそうである。その他にもゲルバー(Gerber)やラーメン(Rahmen)などの構造用語はドイツ語であるなど構造分野では日本にとって身近な国であると言える。

日本の橋梁との大きな違いは何といっても橋脚の柱の細さである。アウトバーンに架かる橋梁の橋脚でさえ驚くほどスレンダーで華奢である。(写真 1)

ドイツは地震がほとんどない国で、ガイドさんの話では、ドイツ人は地下空洞の陥没による揺れを感じることはあっても、地震の揺れを知っている人はほとんどいない程だそうである。

橋脚の設計において地震荷重を全く考慮していないということはないものと思われるが、設計荷重が明らかに小さいことが想像できる。

こうした荷重条件の違いは、形だけでなく根本的な設計理念の違いにもつながっているのではないかと思われる。

(2)　建築

地震の影響が少ないことの特徴は建築物にも現れている。今回訪れた場所のひとつに BMW の博物館があり、この建物がとても特徴的で興味深かった。

構造は、大きな箱の中に張り巡らされた薄い通路に、蟻の巣のように小さな展示部屋が枝分かれしながら連なる構造になっている。邪魔な柱が少なく、通路は空中を浮遊しているような感覚になる。その自由なレイアウトがとても面白い。(写真 2)

日本でこのような構造を実現しようと思うと、耐震性を考慮した柱をなくす努力に相当の苦労を要するものと思われる。

隣接するミュンヘンのオリンピックスタジアムを設計したドイツの構造家フライ・オットーが得意とする膜構造に代表されるように、非常に軽やかな空間の創造は、地震が極めて少ない国ならではのものではないかと感じられた。

写真 1　アウトバーンを跨ぐ橋の橋脚

写真 2　BMW 博物館の内部空間

(3)　維持管理

旅行 3 日目のポツダムでは、過去に東西ドイツの国境となっていたグリーニッケ(Glienicker)橋を訪れた。この橋は世界大戦時後の 1947 年に現在の鋼橋に架け替えられた橋で、いくつかの維持管理上の工夫を見ることができた。

鋼 3 径間連続トラス橋で、トラス斜材の埋込み部は歩道の床版コンクリートに埋込まれている。日本では、斜材がコンクリートに直接埋込まれていたために腐食が進行しても発見できず、致命的な損傷にまで進展して問題になっていた時期があった。

そのため、ここで見られたように直接埋込むのではなく、斜材を通す空間を作るように改められているが、ドイツではすでに建設当初から実践されていたようで当時のままの姿で健全性を保っているようである。(写真 3)　設計者のちょっとした配慮で維持管理上の問題の多くは改善することができる一つの証左である。

次に、トラスの各部材は塗り替えが実施されていたが、全面が同時期に塗り替えられているわけではなく、塗装時期が明らかに異なる場所もあった。また、部分的にタッチアップ塗装を行っている箇所もいくつか見られた。現在、日本においても部分塗装が行われる事例が多くなってきている。本来、鋼橋の塗膜寿命を延ばすためには、局所的に進行してしまう腐食に対して部分塗装を繰り返し行うことが、最も経済的な方法ではないかと思っている。

また、BMW 博物館の建物間をつなぐ橋では、伸縮装置の排水について日本とは異なる特徴を見つけるとことができた。PC 橋は桁端部の空間が狭く非排水型の伸縮装置を採用するだけで、止水ゴムが劣化するなどして止水機能が失われた後に、二次止水処理をすることが難しい。しかしここでは狭い空間の中でも排水樋を設けて、支承部に極力漏水の影響しないように工夫がなされていた。(写真 4)

ドイツに限らず海外には鋼橋や PC 橋など、日本よりも先行して建設された構造物が多く存在する。そのため劣化性状や補修技術についても学ぶべき事は多い。すでにドイツから輸入された橋梁点検車なども国内には存在するが、今後も海外の維持管理技術を学んで、利用可能な技術については積極的に取り入れていくことが必要であると思われる。

写真 3　トラス斜材埋込み部の様子

写真 4　伸縮装置の排水処理

3.　ドイツの食事

次に話は大きく変わり、旅行中で特に印象に残ったドイツの食事について書きたいと思う。今回体験したドイツの食事を一言で表すならビールとポテトと肉である。

朝はホテルのバイキングで、昼と夜の食事は常にビール

とポテトと肉がメインの食事だった。塩味が強くビールに合わせた味付けという印象で、味付けは全体的に大味だ。それでも本場ビールとの相性は良かった。

ドイツの人は、瓶ビールや缶ビールを飲むことはほとんどないそうで、基本的には生ビールを飲むそうだ。同じ生ビール派としては、とてもありがたく終始美味しく頂いた。

ただ、味の問題というよりも一食の食事の量が異様に多いのが難点であった。特にディナーでは、そのボリュームの多さにほとんど食べきれないまま残すこともしばしばであった。出されたご飯は残さず食べることを躾けられてきた標準的な日本人の感覚としては、精神衛生上よろしくない食事ではあったが、無理なものは無理なので致し方ない。その点を除けば美味しくビールを頂ける毎日で、ドイツ料理を堪能できたのではないかと思う。ただ羽田空港に戻ったら、どうしても蕎麦が食べたくて仕方がなかった。

高知にもドイツ料理を出しているお店があるようなので、本場の味付けと量の違いを確かめに一度行ってみたいと思う。

写真 5 ドイツビール（左からピルス、白、黒）

写真 6 ある日の夕食（その 1）

写真 7 ある日の夕食（その 2）

4. ドイツの文化

ベルリン、ポツダム、ミュンヘンと訪れてドイツの様々な文化に触れる機会があった。私が一番印象に残っているのはノイシュヴァンシュタイン城である(口絵写真 41)。

この城は、ディズニーのシンデレラ城のモデルになったことで知られるが、実は古くから存在するものではなく、19 世紀後半に鉄骨やコンクリートで作られた比較的新しい城である。バイエルン王国の第 4 代国王であるルートヴィヒ 2 世が建設した。

外観は一見、中世ヨーロッパの城を思わせる雰囲気で、確かにおとぎ話に出てきそうな城という印象である。ただ、実際に近づいてみるとコンクリートで石積み風に化粧をしただけの様子が見てとれて、少しチープさを感じさせる。

この城で特筆すべきはその中身である。残念ながら写真を撮ることは禁止されていたが、その美しさには圧倒されるものがあった。

城の中にはいくつもの部屋があるが、それぞれの部屋は統一された様式で作られているわけではなく、個々にテーマが与えられ、テーマに沿った装飾や家具が配置されている。どの部屋も細部にまでこだわり抜いて作られたのがよくわかるものばかりである。

ルートヴィヒ 2 世は子供の頃に神話や騎士伝説などの物語をよく読んでいたそうだ。これらの部屋はそうした本の中に出てくる思い出の風景だったのかもしれない。ある部屋の天井の宗教画はミュシャを思わせるような、どこか現代的で、繊細でありながら力強いタッチで描かれており、とても美しかった。

彼は、この城の建設のように享楽的な浪費を繰り返したことで“狂王”の異名を持つことになったそうである。その時代に生きた国民にとっては間違いなく悪王であったであろうが、彼が残したこの城は誰もが子供の頃に持つ夢の結晶として、現在全く違った価値を持つようになっていると思う。

石積みを模して造られた張りぼての城の中には、彼の多大な浪費によって作らせた美しいもので溢れている。彼はこの城に実際に住み、食事を一人でしていたそうである。彼はその孤独の中にも夢を実現した充実感も感じていたのではないかと思う。

ディズニーがこの城をモデルにしたのは、その外観に憧れただけではなく、彼の夢と孤独に憧れたのかもしれないと思った。

次に印象に残ったのがミュンヘンの新市庁舎の建物である。この市庁舎はゴシック様式の外観が今も保たれている。また、マリエン広場と呼ばれる商店が立ち並ぶ区域に面していて、住民の生活の一部に溶け込んでいる。現役の市庁舎がこのような歴史的な外観を保ったまま使い続けられていることに感銘を受ける(口絵写真 43)。

私はヨーロッパの数ある建築様式の中でも、最も好きなのはゴシック様式である。ゴシック様式の持つ荘厳さと、どこか荒廃的な印象がとても魅力的に感じる。今回、実際にゴシック様式の建物を見ることができ、そのインパクト

の強さを感じることができてうれしかった。

今回の研修旅行のフランス組の旅程には入っていなかったが、フランスのボーヴェという小さな町には、「未完のボーヴェ」と呼ばれるゴシック様式の巨大なカテドラルがある。このカテドラルは、あまりにも巨大な計画であったために、設計図どおりに作ることができずに建設途中で崩壊してしまい、未完のままで現在の形となっている。

学生時代にこのカテドラルの写真を見て、深く感動したことを覚えている。ゴシック様式のフライング・バットレスに代表されるような構造的な美しさの限界を追求しようとした挑戦的で野心に満ちた作品である。いつか行ってみたいという思いを持っていたが、今回の旅行でその思いが強くなった。次にヨーロッパを訪れる時には、妻と一緒にプライベートで是非フランスなど他の国も旅してみたいと思う。

写真 8　ノイシュヴァンシュタイン城

写真 9　ゴシック様式のミュンヘン市庁舎

5. 終わりに

初めてのヨーロッパ旅行はとても充実した日々であった。初めて見ることや経験することも多く、知らない場所で知らない文化に出会うことは、仕事に忙殺されがちな日常に良い刺激となってくれたと思う。

アイデアというものは、その人が日常の中で見聞きしたものへの感動の経験から生まれるものではないかと思っている。どれだけ多くのものに触れ感動してきたかは、その人のかたちを造るものだ。

こうした機会で得られた感動を大切にして、今後も仕事に励んで行こうと思う。

車好きの聖地ドイツ

調査部　空間情報課
徳橋　蓮　(2013 年入社)

1. はじめに

海外は何度か行ったことがあるがヨーロッパに行くのは初めてであったので期待が膨らんだ。

今年の旅行は、イタリア、フランス、ドイツの 3 ヶ国から行きたい国を選ぶという豪華なものであった。何故私がドイツを選んだかというと、旅行プランの中に BMW 博物館へ行く事になっていたからだ。ドイツといえば BMW・メルセデス・ベンツなどが有名だ。私は車が好きなのでたくさんの車が見られると思い、ドイツを選んだ。

2. ベルリン観光

羽田空港の飛行機で 12 時間後、ベルリン空港に到着した。到着すると既に夜になっており、直ぐにホテルベルリン･ベルリンへと移動した。

ホテルに着くとホテル内にあるカウンターバーでお酒を呑むことになった。長距離移動の疲れと、お酒の力で部屋へ戻るとすぐに寝てしまった。

朝食後、ドイツ連邦議会議事堂へと向かった。議事堂の前には綺麗な芝生が広がっていて、日本の国会議事堂に比べて開放感を感じた。国会議事堂の屋上にはガラスドーム型の展望台があり、その中を見学することができた(口絵写真 30)。展望台の直下には国会議場が位置し、議員が座る青い座席を見ることができた。日本は赤色だがドイツでは青色であった。

屋上からは、首相官邸、ソニーセンター、コンサートホールで有名なフィルハーモニーを眺めることができた。

ホテル･ベルリン･ベルリン

次に、ブランデンブルク門(口絵写真 31)へ向かった。ベルリンはかつて城郭都市だったそうでこのような門が昔に建設され今でも残されているとのこと。門の前には道路が走っていて強く門の存在感を感じた。門の上にある、女神の像はなんと一度ナポレオンに戦利品として奪われている。その後ナポレオン戦争で勝ったプロイセンが奪い返

している。

門本体には第二次世界大戦時の銃弾を痕がたくさんあり、そのほとんどが修復されていた。

その後、昼食をとり移動している際にスポーツカーを見かけた。アメリカのシボレー コルベット スティングレイという車だ。460 馬力もあり、3.8 秒で約 100km に加速できる。綺麗な赤色でみとれてしまった。

期待していた通り、ドイツには当たり前のように高級車や希少な旧車が走っている。移動中もついそういった車を探してしまっていた。

コルベット スティングレイ

次に、サンスーシ宮殿へと向かった。ここでは豪華なロココ様式にまとめられたスタイルで建築され、宮殿内は金色の装飾や絵画などで飾られていた。大勢で移動していたので宮殿内の装飾などに触れない様に大変気をつかった。

サンスーシ宮殿内

豪華な外観や装飾に包まれて生活することは幸せなことだと思うが、日々暮らしの中で落ち着ける場所が無いと思った。当時の人たちにも自分と同じ考えの人はいたのだろうか。宮殿内にある庭園は綺麗で、どこからどこまでが庭園かわからない程の広さに驚いた。庭園には噴水や彫刻が配置されていて、無数に道が枝分かれしていた。ゆっくり散歩するには非常に良い場所だと思った。隅々まで歩いてみたいと思ったが、日程の都合上あまり庭園を歩けなかった事が残念である。

ベルリン観光最後の夜は、レストランで夕飯という日程であった。ドイツでは料理をコース形式で食べるため、1品ずつ食べなければならない。初めに「プレッツェル」というドイツの焼き菓子が出てきた。周りには岩塩がまぶされていて美味しかった。ただ食感がとても硬く、生地が詰まっているのではやくもお腹がいっぱいになりそうであった。2 品目は野菜スープが出てきた。優しい味で、つい日本の味噌汁を思い出してしまった。3 品目、ようやくメインディッシュがでてきた。仔牛のステーキであったが、脂身が少なく淡泊な味わいであった。仔牛の肉なんて食べたのは人生で初めてで、良い経験ができた。最後にデザートであるエクレアのようなものが出てきた。女性陣がとても喜び、すぐ完食していたのでこれが別腹ということなのかと思った。

この日は、右城社長と帰国後にすぐ誕生日を迎える井上君の誕生日だと言うことで、バースデーケーキを用意してもらい盛大に祝った。

右城社長と井上君の誕生日

小松課長がバースデーコールの音頭をとる準備をしていたが、添乗員の足立さんが音頭をとり始めたため、残念がっていた。バースデーケーキは、イチゴとブルーベリーのタルトケーキでとても美味しかった。

3. ミュンヘン観光

次の日はベルリンの壁にアートが描かれているイーストサイド・ギャラリーへと向かった。

ベルリンの壁には所々穴が開いていて、中の配筋がむき出しになっていた。壁自体の高さは思っていたほど高くなく、数名で協力すれば乗り越えられそうな壁だと感じた。帰って調べてみると当時は2重に壁が建てられていて中には犬や地雷などで厳重に警備していたそうだ。ベルリンの壁は壁内の人を閉じ込めるのではなく壁外(東ドイツ)から壁内(西ベルリン)への進入を防ぐためのものであったようで、自分は先入観から壁内の人を閉じ込める壁だと思っていた。

イーストサイド・ギャラリーでは、118 人のアーティストが平和をテーマに壁に描いた絵を見ることができた。観光客だらけでアート作品の前で写真を撮るのに苦労している人がたくさんいた。中には日本の富士山が描かれたものがあり嬉しく思ったが、色々な言語で落書きがされていた。どこに行ってもモラルの無い観光客がいるのだと実感した。

次に、博物館の中に遺跡があるというペルガモン博物館へと向かった。

博物館の中には巨大な遺跡などがたくさん展示されていた。

中でも目を引いたのがシリアの遺跡から発掘されたライオンの壁画であった。様々な色の石があり、一つ一つライオンの見た目が違っていた。

遺跡を見て回る内に、外国から発掘されたものばかりが展示されていることが分かった。外国から遺跡類を発掘しドイツで展示しているようで、発掘場所の国からは返還の要求がきているとガイドさんから聞いた。他国から発掘したものを勝手に展示するのは勝手すぎるのではないかと思った。

ライオンの壁画

ドイツ 2 日目の夜はベルリンからミュンヘンへと約 1 時間ほど飛行機で移動し、ホフブロイハウスという大きなビアホールで夕飯であった。そこへ行く道中、マキシミリアン通りというエルメスやアルマーニなどの高級ブランド店が立ち並ぶブティック街を通った。そこには高級車や、珍しい旧車が道淵にたくさん停まっていた。その中でイギリスのトライアンフ･スピットファイヤという車を見つけた。今から 45 年くらい前に造られた車だが新車並に綺麗な状態であった。多分、塗装の仕直しや部品交換をしているのだろう。自分も古いバイクを乗っているので、少し親近感が沸いた。後ろに停まっている紺色の車は、高級車ポルシェの SUV である。

トライアンフ･スピットファイヤ

ビアホール内はかなり広い空間で、ホール奥には生演奏をしている楽器団までいた。入った瞬間から賑やかな印象であった。

初めにビールが巨大なジョッキで 1ℓ出てきたのには驚いた(口絵写真 39)。店が繁盛しているせいか、コース料理の間隔が長く感じてしまい、早々にお腹がいっぱいになったが料理の味は美味しかった。最後にでてきた大きな豚の丸焼きを食べきれなかった事が残念であった。

次の日は、ホテルから 100km 以上離れた場所にある世界遺産ヴィース教会へと向かった。標高 1000m ほどに位置しているので現地に着くと少し肌寒く感じた。教会内に入ると美しい内装の装飾が多く、初日に行ったサンスーシ宮殿とは違い、どことなく落ち着いた印象を受けた。教会の外には牛の牧場が広がっていて少し周辺を歩いていると、角が生えたままの牛がいたので珍しく感じた。

角がある牛

次にシンデレラ城のモデルとなったノイシュヴァンシュタイン城へと向かった。城へと向かうシャトルバス乗り場まで観光バスで移動したが、シャトルバス乗り場には大勢の観光客がいて、長蛇の列ができていた。行き来しているシャトルバス内は人でいっぱいであった。

城内の見学は写真撮影が禁止されていて残念であった。城内は以外と質素というか今まで見た宮殿などの装飾ほど豪華では無かった。ただ小高い山の上に建てられているので城内から見る景色は自然が多く癒やされる風景であった。

城の下にあるレストランで昼食をとった後、BMW 博物館へと向かった。博物館では、BMW 歴代の車や、航空機のエンジン、バイクなどがたくさん展示されていた。個人的に BMW320i というアート車に魅力を感じた。今の時代の車には無い角張った無骨なデザインが格好良かった。

博物館内は見所が多かったが滞在時間が約 1 時間しか無かった。博物館に隣接されている BMW ヴェルト ショールームにも行きたかったので足早に観なければならず、できれば一つ一つゆっくり見たかった。いくつか見逃したものもあり、少し後悔している

ショールームでは、BMW グループのロールスロイスや MINI の最新車種が展示されていた。他にも BMW のバイクが展示されていて、いくつか跨がり、記念写真を撮った。

BMW320i 1977(アートカー)

BMW を見学後、マリエン広場へ向かった。そこから新市庁舎見学と自由行動グループに別れることになったが、友人からお土産を頼まれていたので自由行動を選び買い物をした。

ドイツ滞在最終日は強豪サッカーチームバイエルン・ミュンヘンのホームスタジアムである、アリアンツ・アレーナへと向かった。選手のロッカールームや、スタジアム入場の際行進する通路などテレビでしかみたことのない場所を見学することができた(口絵写真 44)。

見学後、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿レジデンツへと向かった。ルネサンス、ロココ、バロック、新古典主義の各様式が混在した建物。400 年以上かけて建築されていて、緻密な彫刻や装飾に迫力を感じた。

宮殿レジデンツを後にし、日本へと約 11 時間かけて帰国した。旅の疲れからか機内ではほとんど寝てしまっていた。

宮殿レジデンツの緻密な装飾

4. おわりに

今回人生で初めてのヨーロッパ旅行であったが、また訪れたいという気持ちよりも住んでみたいという気持ちを感じた。日本では見ることのできない希少な車や高級車がたくさん走っているこのドイツに住めば、毎日そういった車たちを眺めることができるからである。歴史を感じさせる建物や美しい景色を背中に、いつか自分の車でドライブできることを夢に生きていきたいと思う。

ドイツの建築を巡る

設計部　橋梁構造課
児玉　翔　(2018 年入社)

1. はじめに

私にとって、今回の研修旅行は、中国、スペイン、台湾に続き、4 回目となる海外旅行である。

ドイツでは、古くから残る宮殿や教会、ヘルツォークのアリアンツ・アレーナやヘルムート・ヤーンの SONY センター、ノーマンフォスターの国会議事堂の見学でヨーロッパにおける近代建築に触れることができるようだ。文化や風土の違い、地震の有無などで建築や土木、景観などさまざまな分野でのヨーロッパと日本での違いが楽しみだ。

私は、今回の研修旅行では、社員の方々との懇親を深めるとともに、構造物へ目線を向け、構造的な考察も踏まえながら旅行を楽しみたいと考え、初めての研修旅行の準備を進めた。

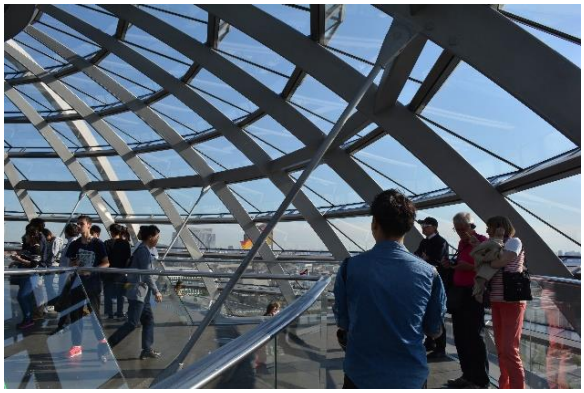
2. ドイツ連邦議会議事堂

ドイツ観光初日は、ベルリンのドイツ連邦議会議事堂を訪れた。パウル・ヴァルトが設計を行い(1894 年竣工)、第二次世界大戦時に爆破され廃墟となっていたが、ベルリンの壁崩壊後、ノーマンフォスター設計の元(1999 年竣工、延床面積 61,166 ㎡)、外観を維持しつつ再建されている。

この建築で特徴的なのは、ガラスのドームで、頂部へと続く二重螺旋構造のスロープは、展望台としての機能だけではなく、ドームの補強の役割も担っているそうだ。

ガラスのオブジェは、下階の議事堂内部へと光を落としているらしく、実際にどれくらい明るさが違うのかを確かめたかった。

ドームを上っていくと眺めがよく、気持ちの良い空間だった。スロープを上っていく途中には構造材が手の届く範囲にあり、いたずらされないのか不安になる。



スロープから手の届く範囲にある吊り材

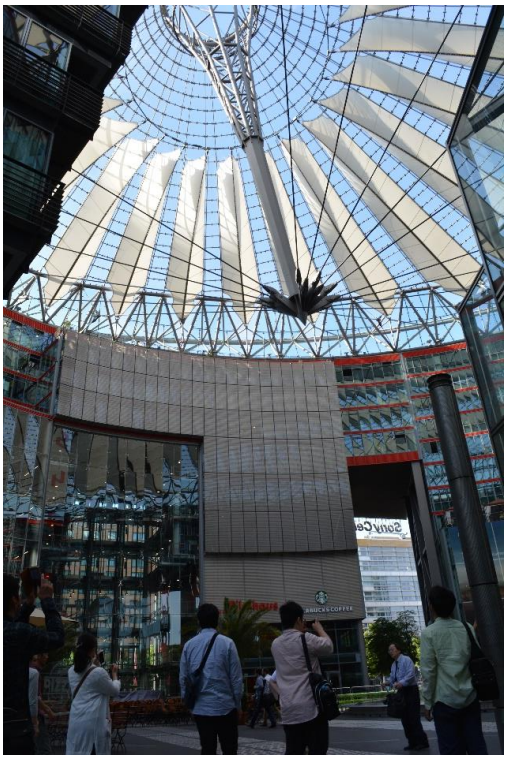
3. SONY センター

SONY センターは、ポツダム広場にある住宅を含む複合商業施設となっている。

ここの目玉は、大きな屋根のついたフォーラムだろう。約 4000 ㎡の広さを持つフォーラムはテントのような構造で、議事堂の展望台から見ると富士山を連想させる形になっている。

オフィスビルの中には映画館や、博物館、カフェなどが入っており、通常のオフィスビルのように、仕事が休みの時に寂れた印象を与えないよう、オフィス以外の施設が入っているらしい。テーマパークのようで実際に日中人が来た場合、オフィスビルからどう見えるのか、音などの対策はどうしているのかが気になった。

このビルの横には、レンゾ・ピアノが設計を行ったダイムラーシティもあったが、見に行くことができず、残念であった。



中庭から見上げた様子

4. ヴィース教会

世界文化遺産にも登録されているヴィース巡礼教会は、内装のロココ装飾によって有名である。ロココとは、美術史でバロックに続く時代の美術様式で、貝殻の曲線を多用する繊細なインテリア装飾を指すそうである。

この建築の内装は質素な外観からは想像もできないようなもので、非常に美しい内部空間だった。

5. ノイシュヴァンシュタイン城

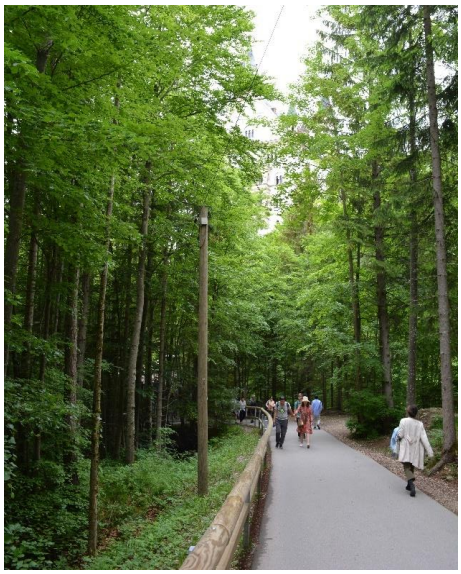
ディズニーランドのシンデレラ城のモデルにされたとされるノイシュヴァンシュタイン城は、周辺を自然に囲まれ、その中に浮かぶ白色の城が非常に美しく感じた。

いざ、中に入ってみると、これでもかというほどのバロックやゴシック、ルネサンスなど様々な装飾、さらには人工の洞窟など、建築を全く知らない人でも、興味を持たざるを得ない建築であった。ルートヴィヒ 2 世のロマンティック趣味のためだけに建設されたもので、このような内部になっているそうだ。

ペラート峡谷にかかるマリエン橋が視点場として利用されており、ここから見る城が最も美しいとされている。

また、周辺の散策路では、手すりや電柱が木で作られており、現地の方々の景観への配慮にも驚かされる。

木で作られた手すり



木で作られた電柱

6. BMW 博物館、BMW ヴェルト

BMW 博物館、BMW ヴェルトは、ミュンヘンのオリンピアパルクに隣接する自動車博物館、ショールームとなっている。

BMW 博物館は、大きな吹き抜けの中に通路が設けられ、スロープに沿うように展示スペースのボックスが配置されているような空間であった。2 階のエントランスから入り、スロープを下っていきながら展示スペースを見ていくという流れで、非常に単純でわかりやすい動線計画となっていた。そのおかげで無駄なサイン等は無く、展示の内容に集中できるようになっているように感じた。

博物館を見た後は、その後建てられた BMW ヴェルトへと向かった。

設計はコープ・ヒンメルブラウで、まるで宇宙船のような近未来的な建築物だった。

博物館からは、大きくうねった橋を渡り、ガラスが多用されたエレベーター室を横目に建物のエントランスへ向かうような形となっている。

また、この周辺には、ギュンター・ベーニッシュとフライ・オットーの設計であるミュンヘン・オリンピアシュディオンが隣接していた。時間の許す限り近くまで近づいてみたが、傍まで行き、ゆっくりと見ることができなかったため、次の機会に訪れてみたい。

ミュンヘン・オリンピアシュディオンの一部

7. アリアンツ・アレーナ

このスタジアムは、ミュンヘンのサッカー専用スタジアムでヘルツォークとド・ムーロンの設計である。外観は白いフィルムが貼られており、青空によく映える外観だった。このフィルムは、フッ素樹脂フィルムで、光線透過性に優れるため、天然芝でも育成ができるそうだ。

また、試合の日には中に埋め込まれた LED でスタジアム全体が赤に照らされ非常に美しいのだろう。夜どのように照らされるのか実際に見てみたいものである。

スタッフの案内で、選手の控え室から、ピッチへ向かう通路なども通ることができ、貴重な経験ができた。サッカーがお好きな方にはたまらない経験になったのではないだろうか。

8. おわりに

私は初めての研修旅行ということもあり、事前準備段階から、期待とともに、様々な不安もあった。しかし、いざドイツに着き、普段見られない景色や建築を前にすると、社員の方々との会話も進み、純粋にドイツ旅行を楽しんでいた。事前準備を行っていたものの、タイトなスケジュールの中では、十分には情報を得ることができなかったように感じた。それは、まだまだ準備不足であったことと、自分の知識や経験が足りていなかったということだと考える。加えて、もっと歴史的知識があればこの旅行をさらに楽しめたのではないかと感じた。

この研修旅行では、社員の方との懇親を深めるとともに、様々な構造物を見、文化に触れることができ、非常に多くのことを学ぶことができた。

ドイツには、今回の旅行では見ることができなかったシュライヒやレオンハルトなどの橋梁が多くある。ヨーロッパに行くのはなかなか大変だが、是非とも次の機会を設け、見学に赴きたい。

ドイツに倣う旅

設計部　防災まちづくり課
岩瀬　誠司　(2018 年入社)

1. はじめに

ドイツは、日本人にとってなじみ深い国である。それは、歴史・文化が物語っている。明治維新後、日本を近代国家にするためつくられた日本国憲法は、君主制の強いドイツ憲法を倣ってつくられている。また、日本で上演回数が多く、日本人の耳になじみのある「第九」は、ベートーヴェンの交響曲第九番のことである。そのベートーヴェンはドイツ出身である。

先の世界大戦においては、日本、イタリアと同盟を組み、イギリス、アメリカを中心とする連合国と戦った。いわば日本とドイツは共に戦った「同士」でもある。ドイツは 1914 年からの第一次世界大戦においても、世界を相手に戦った。2 度の世界大戦の中心にあったのがドイツである。1 度ならず2度の世界大戦を起こしたドイツ人のメンタリティーには驚かされる。当時のドイツ軍の軍事技術は、高度なもので、その技術力は現在のドイツのモノづくりにも生かされている。

2. ドイツの治安

私が、海外に行くのは今回が 5 回目である。初めての海外は、家族でハワイに行った。しかし、幼い頃であり記憶にはない。2 回目の海外は、中学の頃に兄と中国・上海万博に行った。3 回目は、大学 1 年の夏にイタリアで 40 日ほど滞在し、大学連携のプログラムに参加した。4 回目は、大学 3 年の夏にタイへ余暇を過ごしに行った。そして今回のドイツである。

私の少ない海外での経験から、ドイツの治安は良いと感じている。私がそのように感じる一つの理由はサイレンの音である。救急車両や警察車両が緊急走行する場合にサイレンを鳴らすが、5 日間の滞在の中でサイレンの音を聞く回数は少なかった。ミュンヘンで滞在したホテルの前の駅に、朝の時間を利用して訪れたが、駅のホームにはごみが少なく、路上滞在者も見かけることはなかった。ドイツは第二次世界大戦後、東ドイツから難民が流出した。その難民を中東地域で受入れた。そのような歴史から、移民の受け入れに寛容な国として知られている。移民の受け入れ人数はアメリカに次ぐ二番目である。一般的に、移民が押し寄せると治安が悪くなるといわれるが、行政によるコントロールがされているのであろう。

3. ベルリン観光

「ベルリン」といえば「ベルリンの壁」を思い浮かべるほどベルリンを象徴するものである。ベルリンの壁はドイツを東西に分断していた壁であり、30 年前まで実際に存在していた。第二次世界大戦直後、アメリカとソ連を中心と

した対立が世界を巻き込む形で起こっていたからである。西側がアメリカ、東側をソ連が統治するような形をとり、不意に分断された。私が生まれる前の話である。ベルリンの壁が、東西冷戦、米ソ対立の象徴となっていた。現在、朝鮮半島情勢が不安定な中、似たような歴史をたどったドイツ、ベルリンの壁を見学したことは意義があり、世界平和を考えるきっかけとなった。ベルリンの壁は現在、壁として残されているエリアもあるが、ほとんどは道路にブロックが埋め込まれ、跡として残っている状態である(写真1)。

ドイツ帝国時代からベルリンは首都であり、首都機能のほとんどが西側に立地していた。ブランデンブルク門を取り囲むようにベルリンの壁があった。ブランデンブルク門(口絵写真 31)は、王宮への通り道にあり、交通の要所であった。そのため、関税門として利用された時代もあった。ナポレオン 1 世による支配の時代には、パレードを行う場所として利用された。門の上には、4 頭立ての馬車に乗った女神ヴィクトリア像があったが、フランスへの戦利品としてナポレオン 1 世によって持ち去られた。その後、再びブランデンブルク門の上に戻された。

ブランデンブルク門のすぐ近くには、ドイツ連邦議会(写真 3)がある。連邦国家は、自治共和国や州のような政治単位から連邦憲法によってコントロールしている。行政府の長として政治を行うのが首相である。

連邦議会の屋上には、「渦巻きドーム」がありベルリンを一望できる。ベルリンは平坦な土地である。しかし、街並みの中に山のように見えるところがあった。それは、大戦による瓦礫によって形成された山である(写真 4)。これも歴史遺産の一つである。

歴史遺産といえば、東西ドイツの検問所であるチェックポイント・チャーリーも訪れた(口絵写真 35)。主に西側の軍事関係者が通行するための検問所である。かつて、東ドイツでは社会主義の体制をとっており、「秘密警察」が存在し言論の自由などは認められなかった。東西ドイツの境界線の東側では、有刺鉄線や壁や監視塔がつけられ、西側への移動は厳しかった。ジョージオーウェルの小説「1984 年」の世界のようである。東ドイツは、西ドイツに比べて住みにくいと感じるが、最近では、東ドイツを懐かしむお年寄りが多いようだ。過去が良いとか悪いとかではなく、懐古することが良いようだ。

写真 1　ベルリンの壁跡のブロック（道路中央）

写真 2　連邦議会

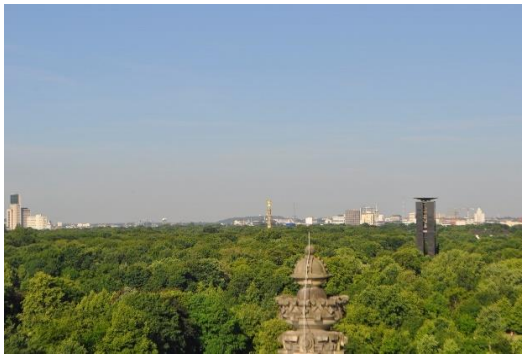


写真 3　瓦礫によって形成された山（中央奥）

4. ポツダム観光

ポツダムでは、ポツダム会談の舞台となったツェツィーリエンホーフ宮殿を訪れた(口絵写真 34)。ポツダム会談は、第二次世界大戦の戦後処理について話し合った会談である。参加者は、アメリカのトルーマン。イギリスのチャーチル。ソ連のスターリンで、当時の世界を取り仕切るトップ会談である。ソ連は連合国側であったが、日本と日ソ不可侵条約を結んでいた。1945 年の 8 月に入りソ連は日本に宣戦布告をし、侵入してきた。トルーマンはスターリンに対して、対日参戦を前から要望していたが、参戦に対する明確な理由がないため、踏み切れなかった。また、アメリカの原子爆弾開発の期限も迫っていた。当初の想定通り会談は難航した。ソ連が早期に対日参戦をしていれば、アメリカは楽に大戦を終えることができた。しかし、アメリカとしては、結果的に会談が難航しなければ、原子爆弾を実践使用する機会は得られなかった。それぞれの政治的な思惑が重なる中での重要度の高い会談が行われた場所である。

ポツダムではもう一つ、サンスーシ宮殿も訪れた(口絵写真 33)。宮殿内部には、大理石や金をふんだんに使ったつくりになっており、豪華であると感じたが、平屋建てであり、フランスのベルサイユ宮殿などに比べるとつくりは簡素なようだ。フリードリヒ 2 世が、2 年の建設期間でつくらせた宮殿である。日本の城のように、縦に大きいつくりではなく、横に大きいつくりになっているので、外観から見るよりも、内観のつくりは大きかった。宮殿内部は、たくさんの部屋があり、それぞれの役割に合わせたつくりになっている。絵画の配置や遠近法を活用した空間づくり

になっていた。

ポツダムの街並みは、ベルリンやミュンヘンとは違った古い街並みのように感じた。街中には、トラムが走っていた。レンガ造りの建物も見られた。そのレンガ造りの建物は、「オランダ街」である。フリードリヒ 1 世の時代に宗教迫害などでやってきたオランダからの移民が住むために、オランダ人建築家につくらせたものである。移民でやってきたオランダ人が、気持ちよく故郷を思い出して暮らせるようにした気遣いを感じることができた。

5. ミュンヘン観光

宗教改革で知られるルターも、ドイツ出身である。カトリックから分離し、プロテスタントを創った人物である。私は宗教に対してそれほど大きな関心を持たないが、教会に行くとなぜか心が洗われるような感覚になる。旅行では、世界遺産でもあるヴィース教会へ行った。ヴィース教会はカトリックの教会である。天井の壁画や彫刻はどれも素晴らしいものであった。「鞭打たれるキリスト像」が涙したというキリスト像が安置されている。キリスト教徒にとっては神聖な場なのだと感じた。ヴィース教会は、のどかな草原に位置し、外観やその周囲の雰囲気と礼拝堂の神聖な雰囲気との違いに驚かされた(写真 5)。そのような草原を抜けた山間部に、ノイシュヴァンシュタイン城がある。

ノイシュヴァンシュタイン城は、ルートヴィヒ 2 世が、趣味とワーグナーを匿うために建設した城であり、軍事的な要塞や政治的な執務を行う所謂「城」というものではない。城の中に人工的な洞窟を創るほど、城の建設にこだわりを見せていただけに、外観だけでなく、城内の創りもすばらしく、圧倒されるばかりであった(口絵写真 41)。

ミュンヘンは、ドイツ 3 番目の都市であり、BMW の本社がある。BMW 博物館の見学では、会社の歴史から歴代の名車まで展示がされていた。BMW は、かつて軍用機のエンジンを制作していた。ドイツの軍事技術は高度であった。特にロケットの技術は高度なもので、米ソが宇宙開発に応用するために、ドイツを東西に分割したとまで言われている。現代においてもドイツの自動車は世界的に人気が高く、モノづくりに対するドイツ人の思いにも触れられた。

ドイツで驚いたことはトイレである。諸外国に比べてドイツのトイレはきれいだ。洗面は自動で水が出るようになっていた。ジェットタオルまでついているところもあった。日本では当たり前なであるが、海外では珍しい。

当然ながらドイツは日本と文化も生活様式も違う。また想定される「災害」にも大きな違いがあり、その違いがまちづくりに生かされている。ドイツ人は、建物に日光を取り入れるために、ガラス張りを特徴とした建築物をよく見かける。しかし、日本のように地震が頻発する国では、そのような建築物は敬遠される。他にも、鉄道の高架の橋脚も日本の物と強度が違うことは一目瞭然であった。

ミュンヘンの街並みはベルリンと比較して中世の雰囲気があり、ヨーロッパらしい景観であった。中心部には、ヴェルテルスバッハ王家の宮殿があり、博物館や、大学、オペラ座、官公庁が集積している。石畳やブロックでできた道路と、入り組んだ路地も多く、古くからの街並みに新しい街を形成したような都市であった。市庁舎の屋上から見ると、その街並みはよくわかる(写真 6)。市庁舎の周囲は歩行者天国となっている。車社会であるドイツでは当初、商業が衰退するといった理由で、歩行者天国にすることに反対の意見が多かったようだ。しかし、実際はトラムを部分的に利用しショッピングに出かける人が多く、商業も賑わい、新たな出店も増えたようだ。思い込みや理論で社会将来を予測するのは難しい。今後の仕事の参考になる事例であると思った。

写真 5　草原に建つヴィース教会

写真 6　市庁舎屋上からの景色

6. おわりに

私は音楽が好きで、ベートーヴェンをはじめ、好きなドイツ出身の作曲家はたくさんいる。また、学生時代に戦後史に興味を持ち、第二次世界大戦の戦後処理について、ニュルンベルク裁判、東京裁判の文献や世界大戦開戦時のドイツ、イタリアとの諸外国との関係について調べたことがある。そういった意味で、今回の旅程ではポツダム観光が一番印象に残った。ドイツに行けたことは幸運であった。

今回の旅程はとても密度が濃く、充実した旅行であった。レポートでは書ききれなかったベルリンのペルガモン博物館、ベルリン大聖堂、ミュンヘンのアリアンツ・アレーナ、どこも見応えがあった。ミュンヘンは雨の多い地域であったが、天候にも恵まれ傘を使うことはなかった。当初入場できるかどうかわからなかった、連邦議会や宮殿にも入ることができた。本当に運の良い旅行であった。入社 1 年目でこのような体験ができたことに感謝したい。今後 5 年後、10 年後にも同じような想いをするようにこれからの仕事に励みたいと思う。

初夏のドイツ旅行

調査部　空間情報課
坪田　沙希　(2018 年入社)

1. はじめに

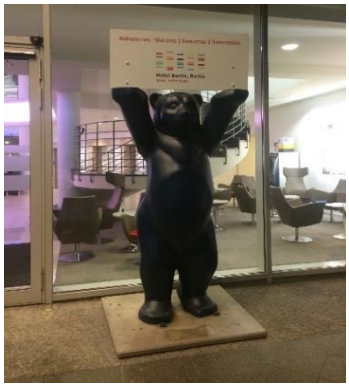
ドイツのミュンヘンは一昨年 12 月に訪ずれたことがあり、このたびの社員旅行が訪独 2 回目である。初夏のドイツを堪能することができ、非常に嬉しく思う。

5 月 21 日、高知を出発してから約 15 時間後、ドイツの首都ベルリンに到着し、宿泊先の Hotel Berlin ではベルリンのシンボルであるベルリン・ベアが歓迎してくれた。ドイツとの時差はサマータイム期間(2018/3/25～2018/10/28)のため日本時間よりマイナス 7 時間である。ドイツは北海道よりも緯度が高く、滞在中は夜 9~10 時までは空が明るかった。

2. ベルリン観光

今回、ドイツでの最初の食事はホテルの朝食であった。オーソドックスな献立が並べられていた。他の宿泊客を見ているとパンをナイフで半分に切り、野菜、生ハムを挟み、オリジナルのサンドウィッチを作って食べる人、コーヒーだけを飲む人と、さまざまであった。私はお皿に生野菜、生ハム、ベーコン、マッシュルーム、パン 2 個を盛り付けた。日本でも同じような食材を食べているはずだが、気候や文化が違うと味付けの仕方、風味が変わり、全く別の料理のように感じられた。

朝食後、バスに乗り込み、向かった先はブランデンブルク門、ドイツ連邦議会議事堂である。早朝は少し冷たい風が吹いていたが、天候は快晴であり、昼頃になると夏を感じる程の暑さになった。私の想像以上にベルリンは気温が高く、太陽の日差しが強かった。



ホテル入口で歓迎してくれたベルリン・ベア

ベルリンからは放射状に各地に向かう街道が伸びており、壁と交差するところには、18 か所の関税門が設けられ、ベルリンを出入りする物資に関税を課していた。訪れたブランデンブルク門も関税門のひとつであった(口絵写真 31)。

ドイツ連邦議会議事堂を見学することができるのは一部のエリアのみである。今回、ガラスドーム内部に入場することができた。ドーム内部のスロープを上りきった頂上ではベルリンを 360 度見渡し、ビルがところどころ建ち並んでいるが、どこか中世の面影を残す街並みに感動した(口絵写真 30)。

バスでの移動中に現地ガイドの方に車内で流していただいたフランツ・フォン・シューベルトの歌曲“菩提樹”は初めて聴いた曲である。ベルリンの菩提樹の並木通りの風景に溶け込んでいき、作曲家たちが見ていた風景を目の前にして、この曲を聴くことができてよかったと思う。

ベルリン観光のなかで印象的であった観光地は第二次世界大戦後、東西ドイツを分断していたベルリンの壁である。イーストサイド・ギャラリーにて、芸術家たちが壁に平和へのメッセージをストレートに描いた作品を観覧することができた。作品の内容は戦争のことだけではなく、環境問題、核兵器問題、人種差別などさまざまであった。また、ベルリンの壁以外にもユダヤ人大量虐殺により亡くなった方々の慰霊碑や東西に分断されていた当時の史跡など、ベルリンには戦争の記録を多く残していた。

菩提樹の並木通り

ベルリンの壁に描かれた作品

ユダヤ人の方々の慰霊碑

3. 南ドイツ観光

5 月 24 日、ベルリン-ミュンヘン便に搭乗し、バイエルン州の州都ミュンヘンに到着した。ミュンヘン空港は近代的なデザインであり、南ドイツのハブ空港の役割を担っており、日本への航路も ANA 羽田直行便が就航している。

ミュンヘン空港まではミュンヘン中央駅よりバス、列車が運行されている。南ドイツののどかな風景の中を自動車道が横断しており、ミュンヘン中心部に到着するまでにドイツの基幹産業を担うメルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲンのショーウィンドウを見ることができた。

アウトバーンから観光地に向かう行程がベルリンやミュンヘンでもいくつもあり、アウトバーンは日本の高速道路とは交通ルールが異なっていた。アウトバーンの速度制限表示が普通車は 100km/h となっており、場所によっては 80km/h で制限されているが、実際の速度は無制限であることには驚いた。これにはドイツの歴史が関わっている。第二次世界大戦で敗戦した際、最初に開通したのがフランクフルトからダルムシュタットまでの 40 ㎞にも満たない短い区間であった。この区間でメルセデス・ベンツなど自動車会社が自社の車の最高速度を競い合った歴史がある。このようなことからアウトバーンの走行速度は 200km/h が当たり前であり、日本では考えられない速度である。非常に驚いたことは交通事故数が日本よりも少ないことである。

ミュンヘン中心部はベルリンと違い、石畳の道、建物、街頭の灯り、どこを見ても気品さ、優雅さを感じ、また国内・国外出身者問わず就職のしやすさ、交通機関の発達度などが高いことから、ミュンヘンは毎年発表される「世界で最も住みやすい都市ランキング」で常に上位であり、その結果も納得である。しかしながら、富裕層が多く、街並みに華やかさがある一方で、ミュンヘン中央駅付近には難民、浮浪者が多く滞在しており、家がないために地べたに座っている方が目についた。華やかさのなかに、麻薬が行き交ったり、難民、浮浪者が多かったりという暗い一面も持つ街である。

中心部マリエン広場周辺はやはり芸術と音楽の都市と云われるだけあって沢山のミュージシャンたちが路上ライヴをしており、より一層ミュンヘンを楽しませてもらった。今回、訪れることはできなかったが、ミュンヘン工科大学に隣接しているノイエピナコテークにはゴッホのひまわり、ピカソ、フェルメールなど絵画の知識がない私でも知っている画家たちの作品が展示されている。次の機会にぜひとも訪れたい。

ミュンヘン滞在中に夕食で訪れた世界一有名なビアホール“ホフブロイハウス”では 1 リットルの大ジョッキに注がれたビールには度肝を抜かれた。店内一番奥にあるステージでは南ドイツの伝統衣装を身に纏った奏者たちによるバンド演奏が行われており、鞭を楽器として演奏していたり、外国人観光客の団体が曲に合わせて歌ったり、とても楽しい時間を過ごした(口絵写真 39)。

旅行 4 日目、世界遺産のキリスト教のヴィース教会、そしてドイツで一番人気の観光地ノイシュヴァンシュタイン城を訪れた。ドイツ国内の宗教人口の割合はキリスト教が占めている。宗教や教会毎に造りが違い、それぞれの特徴があると教えていただいた。ヴィース教会は「草原の教会」という意味であり、ロココ調の建物である。外観はシンプルだが、内部の壁、天井には外観からは想像ができないような華やかな絵画・装飾があった。そのため、世界遺産登録の経緯は宗教的にも芸術的にも価値が高いことから登録された。

世界遺産のヴィース教会

ノイシュヴァンシュタイン城はルートヴィヒ 2 世により 19 世紀に建築された。ノイシュヴァンシュタイン城のような白亜の城は兵庫県の姫路城しかり、人々を引きつける魅力がある。残念ながら、城内は写真撮影禁止のため、内部の様子を残すことはできなかったが、城内に作られた洞窟や豪華絢爛な大広間など、財を存分に費やしたルートヴィヒ 2 世の住処を見学することができた(口絵写真 41)。

4. お土産

ドイツのお土産はベルリンの地元民御用達のスーパーマーケット Netto と観光地で購入した。食べ物やビールなどをお土産にしたい場合はスーパーマーケットでの購入をぜひ推奨したい。地元民が普段から使用するスーパーマーケットにはドイツならではのお菓子や飲み物を購入することができ、価格も観光地で購入するよりも安い。熊の形をしたグミ“ハリボー”、赤ワイン、プレッツェルのスナック菓子、チョコレートなどを購入した。また文房具が有名であり、自分へのお土産として LAMY の万年筆を購入した。ガイドの方の説明に何度も登場した作曲家ワーグナーの歌劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」にもパン屋や鍛冶屋、靴屋などの職人(マイスター)が登場するが、ドイツは伝統文化・技術の継承を政策として行っており、職人の国であるととても感じた。

5. 最後に

ドイツの色彩豊かな自然、歴史ある街並のなかを歩き、さらにボリューム満点のドイツ料理やビールから沢山のエネルギーをいただきました。これを励みとして、日々の業務に精一杯取り組んでいきたいと思います。

社員旅行の思い出

代表取締役社長　右城猛

まえがき

第一コンサルタンツに入社して 32 年、社長に就任してもうすぐ 12 年になる。社員と一緒にヨーロッパ旅行ができる会社になれたかと思うと感無量である。

最近入社した社員には、わが社に苦しい時代があったことなど想像もできないと思う。わが社の経営がここまで来るには、長い年月と先輩社員たちの血のにじむような努力があった。そのことを若い社員たちにも是非知ってもらいたいとの思いで、これまでの社員旅行を振り返ることにした。

はじめての社員旅行

私が第一コンサルタンツ(当時は第一測量設計コンサルタント)に入社したのは昭和 61 年である。社員は 41 名であった。それでも高知県内では最大規模を誇るコンサルタントであった。経営は破綻状態にあり、社員の給料は驚くほど安かった。

昭和 62 年に社長が創業者の矢野利男氏から新名義弘氏に代わった。経営が行き詰まったためである。ところが、新名社長の誕生直後からバブル経済が始まり、ゴルフ場や住宅団地などの大規模開発が急増した。そのお陰で、昭和 63 年度決算は 1 千万円を超える利益が出る見通しがたった。新名社長から、「利益が出るが右城さんどうしましょう」と相談されたとき、即座に「全員で旅行しましょう」と提案し、「伊勢神宮と伊賀の里」へ行った。

利益が出たといっても借入金がたくさんあり、社員の給料を上げられる状態ではなかった。社員の苦労に報いられるのは、旅行が精一杯だったのである。

その後、平成元年に「沖縄」、平成 3 年には「熱海」へ旅行した。

はじめての海外旅行

平成 4 年 10 月に新名社長が肺癌のため他界した。そのあとを引き継いだのは小田義人氏であった。

平成 4 年にバブル経済は崩壊したが、国土交通省の公共事業関係予算は大幅に増えた。アメリカから日米貿易不均衡を是正するため内需拡大を求められ、10 年間で総額 630 兆円という「公共投資基本計画」が策定されたためである。

この影響で平成 4 年には過去最高の 7 千万円を超す利益を上げることができた。社員は 74 名に増え、会社には勢いがあった。

創立 30 周年となる平成 5 年の社員旅行は、小田社長の提案で「ハワイ」に決定した。初めての海外社員旅行である。

恒例行事となった社員旅行

平成 6 年からは社員旅行を毎年の恒例行事とし、偶数年は海外、奇数年は国内と決め、平成 12 年までの 7 年間に、「香港・マカオ」、「北海道(道央)」、「シンガポール」、「宮崎県」、「オーストラリア」、「北海道(道東)」、「グアム」と社員旅行を続けた。

受注が順調で、会社経営にゆとりがあったのは平成 11 年までであった。それ以降は公共事業費が毎年削られ、平成 13 年からは社員旅行をする余裕がなくなっていた。それでも創立 40 周年の平成 15 年にはカナダへ行く計画を立てていたのであるが、鳥インフルエンザが猛威を振るい始め、急遽取り止めた。その代わり、翌年の平成 16 年に二度目となるハワイへ 40 周年記念旅行をした。

社員旅行を中断

平成 16 年のハワイ旅行以外は、平成 13 年からずっと社員旅行を中断していた。その最大の理由は会社経営の悪化であるが、その他にも理由はあった。

平成 5 年から旅行のため社員に毎月 3,000 円の積み立てをしてもらい、旅行費用の不足分を会社が負担していた。最初は喜んでくれていたが、ある頃から参加率が 50%を切るようになってきた。旅行に行かなければ 1 年間の積立金 36,000 円が返金されるためである。支給されるボーナスが年々減少していたため、返金される積立金が社員の生活を支える上で必要だったのである。

参加率が 50%を切れば、福利厚生として認められなくなる。半分以上の社員が希望しない旅行を無理矢理に続ける必要は無いという判断で平成 13 年以降、社員旅行を取りやめることにしたのである。

創立 50 周年記念旅行とその後の社員旅行

平成 20 年を底に公共事業予算は少しずつ回復し、平成 21 年からは利益が出せる状態になっていた。そうした中、平成 24 年 12 月の笹子トンネル天井板崩落事故による道路施設点検特需で仕事が大幅に増え、これを契機に当社の経営は一気に軌道に乗ることができた。

創立 50 周年の平成 25 年には、9 年振りの社員旅行として台湾へ行った。「台湾を愛した日本人土木技師　八田興一」の著者である古川勝三先生に同行していただき、台南市にある八田興一の銅像や彼が造った烏山頭ダムを見学してきた。

小泉政権時代に「公共投資基本計画」が廃止され、そ

れを契機にインフラ不要論が叫ばれるようになっていたのであるが、民主党の鳩山政権が「コンクリートから人へ」をキャッチフレーズに誕生すると、さらにマスコミが「公共事業悪玉論」「公共事業絶対悪論」を煽りだし、土木技術者は肩身の狭い思いを余儀なくされていた。大学や高専から「土木工学科」の名称が消えるまで「土木」の人気は低下していた。

戦前、日本が台湾を統治していた時代に、土木技術者・八田與一が台南市に烏山頭ダムを造り、不毛地帯であった嘉南平野を 15 万ヘクタールの大穀倉地帯に変え、台湾経済の発展に大きく貢献している。70 年以上経った今でも八田與一は台湾の人々から尊敬され、中学校の教科書にも紹介されているのである。

烏山頭ダムのほとりには、地元の人たちが建立した八田與一の銅像と八田夫婦の墓がある。台湾に行き、その前に立てば、土木技術者としての誇りと自信を取り戻せるのではないかと思ったからである。

台湾旅行以降は社員旅行を再開し、「東京・横浜」、「北海道(道央)」、「グアム」、「立山・黒部アルペンルート」に行っている。

過去の経験から、平成 25 年以降の旅行については、費用を全額会社が負担している。

創立 55 周年記念ヨーロッパ旅行

序文でも述べているが、私は数年前から社員に対して、「55 周年には全員でヨーロッパへ行こう」と夢を語り、高い経営目標を掲げてきた。社員はこれによく応え業績を伸ばし、平成 29 年度には念願であった 20 億円の受注目標を突破することができた。

旅行先は社員の希望を優先させ、イタリア、フランス、ドイツへ 3 班に分かれて行くことにした。1 カ国より 3 カ国に社員が行けば、より多くの情報を集めることができ、それが会社の財産になるという思いもあった。

ヨーロッパ旅行に参加した社員は、イタリアが 30 名、フランス 27 名、ドイツ 31 名(この内の 10 名は新入社員)であった。旅行に同伴した家族は、イタリアが 6 名、フランスが 2 名、ドイツが 1 名であった。社員全員で行くことが私の目標であったが、自身の健康、子供の世話、親の介護などの問題を抱え参加できなかった社員がいた。本当に悔しい思いがした。

過去の海外社員旅行では、必ずなにかしらのトラブルがあった。平成 5 年のハワイ旅行では、社員の一人がパスポートの入ったセカンドバックを置き引きされた。平成 6 年に香港へ行ったときも社員の一人がスリにあった。平成 25 年の台湾旅行では、社員が途中ではぐれて大騒動になった。平成 28 年のグアム旅行では、航空機のトラブルで帰国時間が大幅に遅れ、ご家族に心配をおかけした。

ヨーロッパは、日本のようには治安が良くない。2～3 名はスリや置き引きに遭うだろうというのが JTB の当初の予想であった。

しかし、親睦会役員と JTB 添乗員による事前の準備と現地での気配り、社員の協力のお陰で誰一人被害に遭遇することなく、体調を崩すこともなく無事に帰ってこられて、ホッとした。

あとがき

平成 25 年の社員旅行以降、参加者全員に旅行記を執筆していただいている。

社員が書いたレポートを読むと、社員がどのような視点でものを見、そして考えているのかを知ることができる。

抜群の文章力を持った社員、独特の感性を持った社員、優れた論理的思考をする社員、日常業務とは関係ない分野の専門知識を持った社員などを発見すると嬉しくなる。

小学生のような文書を書いていた社員が、旅行記を書くたびに成長する姿を見るのもまた楽しいものである。

人間の幸せは「愛されること」「褒められること」「役に立つこと」「必要とされること」だと言われている。

第一コンサルタンツは、建設コンサルタンツの仕事を通じて社会に貢献できる人材の育成を目指している。毎年、多忙な仕事の間隙を縫って社員旅行に行っているのは、知らない場所で社員同士が助け合いながら見聞を広めれば、大きく成長すると期待しているからである。

5 年後には創立 60 周年を迎える。社員全員で再びヨーロッパに行くことを目標にして、さらなる社業の発展を目指してゆく決意である。

創立 55 周年記念社員旅行　イタリア・フランス・ドイツ
平成 30 年 11 月 29 日　発行

発行・編集　株式会社　第一コンサルタンツ
〒781-5105　高知県高知市介良甲 828 番地 1
TEL　088-821-7770
FAX　088-821-7078

印刷・製本　有限会社 西村謄写堂
〒780-0901　高知県高知市上町 1-6-4
TEL　088-822-0492
FAX　088-825-1888